

遊戯王ARC—V ある脱走兵の話

白鳥

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年は融合次元で生まれ、融合次元で育った

しかしこの世界に違和感を感じていた

エクシード次元侵攻をきっかけに、少年は動き出す

目次

アカデミア	1
ハートランド	5
レジスタンス	12
ユート	16
加入?	25
情報整理	28
カイト	31
素良	39
トキノ	53
トキノ (2)	58
トキノ (3)	65
襲撃	71
オベリスクフォース	76
覚悟	84
覚悟 (2)	89
覚悟 (3)	103
ユーゴ	109
ユーゴ (2)	121
黒咲	132
黒咲 (2)	139
黒咲 (3)	147

アカデミア

デュエルアカデミア

決闘戦士育成機関であり、学校でもある

絶海の孤島にあり、入学したらほとんど外に出ることは出来ない
そこで鍛えて、一流の決闘戦士を目指すことが全生徒の目標であり、それが当然のこと

……
これがこの世界の当然のことなんだ

室内森林決闘場

「俺は迷宮の魔戦車でクワガーヘラクレスを攻撃！」

「うわああああ！」

森の中で爆発が起こる

決闘戦士としての力を示すための集大成バトルロワイヤル

負けた決闘者はカード化される、非情の決闘

そして今、迷宮の魔戦車を使った決闘者がクワガーヘラクレスを使っていた決闘者を倒したところだ

「い、いやだー俺はカードになりたくない！」

「へっへっへっ往生際が悪いなあ……」

決闘盤を操作し、カード化しようとした

その時、背後から赤い服を着た少年が飛び出した

「俺はサイバーツインドラゴンで迷宮の魔戦車とプレイヤーを攻撃！」

「なっ!？」

「エボリューションツインバースト2連打！」

「ぐわああああ!？」

迷宮の魔戦車が双頭の機械龍に撃ち抜かれ、もう一撃が決闘者を撃ち抜く

それによりライフが0になった

「ぐっ……不意打ちなんて卑怯だぞ……」

「なにが卑怯なもんか、これはバトルロワイヤル、スキを見せたほうが

悪い」

「くっそ・・・カード化かよ・・・」

決闘盤を敗者に向ける

「・・・」

しかしカード化せずに踵を返した

「・・・おい！なんでカード化しない！」

勝者の少年は答えない

「なさけでもかけたつもりか！ふざけんな！」

「まったくだ」

光が輝く、そこには少年達にこの戦いを強いた教官、サンダースが立っていた

「だから貴様はいつまでたっても赤服なのだ」

その手には先ほど負けた少年2人のカードが握られていた

「・・・サンダース」

「教官と呼べ、まったく、実力はあるのに甘さが抜けない、貴様ならBをも超える傑作になれるとおもったのに・・・」

赤服の少年は答えない

「まあいい、バトルロワイヤルはこれで終わりだ」

「そうか、なら俺は帰らせてもらう」

「明日の侵攻、貴様も参加してもらう、くれぐれも作戦開始時刻に遅れぬようにな」

伝達事項を伝えるとポーズを取り、声を張り上げる

「グローリーオンジアアカデミア！」

「・・・グローリーオンジアアカデミア」

やる気のない声でそう言いながら赤服の少年、リョウジは決闘場から出ていった

俺の父親は立派な決闘戦士だったらしい

俺が赤ん坊の頃に戦場で戦死したとかで、俺はほとんど知らない

でも、母親はことある事に「お前も父親のような立派な決闘戦士になれ」と、口癖のように言われた

周りもそうだった、勝手に俺に期待して、勝手に失望していった
決闘戦士になる事が当然、決闘戦士として結果を残すことが名誉
強い決闘戦士を作るためなら同じ釜の飯を食った仲間だろうと
カード化することになんの抵抗もない

そんな世の中のあり方に違和感しかなかった

それでも俺は勝ち続けた

決闘で勝てば強さを証明できる

強ければ飯が食えるし、生き残れる

でも、非情にはなれなかった

だから、アカデミアの方針に従わないものとして、落ちこぼれの象
徴とされる赤服を着させられている

そんな俺も、明日から戦場に送られる、でもそれも仕方ないこと、い
つの世も世界から戦争が消えることは無い

自分の居場所を守るためにも、戦争を長引かせないためにも、全力
で戦おう

俺はこのとき、そう思っていた

作戦当日の朝

集合場所で知り合いに声をかけられた

「リョウジくんじゃない」

「ん？天上院か」

整った顔立ちに高身長、スタイル抜群と、非の打ち所のない美少女、

天上院明日香だ

「あなたもエクシード次元に行くの？」

「ああ、お前もか？」

「私は来週から参加予定よ」

「そうか」

人が集まってきた、広場が騒々しくなる

「どっちが多くカード化出来るか勝負しようぜ！」

「おういいいぜ！」

「ハンティングの時間はまだかな？」

「最高のゲームだよな！」

とうていこれから戦争に行くとは思えない話をしている者が多くいる

これが普通、異常なのは自分

「・・・チツ」

そうは思っても舌打ちが出る

「天上院、お前は・・・」

聞こうとして止める

「なによ？」

「いや、いい、お前は正常な人間だからな」

「なんのこと？」

天上院は青服、つまりはアカデミアの方針に疑問を持っていない人間

「時間だ」

集合時刻と同時に、エクシード次元侵攻の総司令官、エド・フェニックスの話が始まった

ハートランド

とても平和な町だった

あちこちで決闘が行われ、プロを目指す決闘者が切磋琢磨し、決闘は最高のショーだった

アカデミアが来るまでは

「古代の機械猟犬で直接攻撃！」

「うわああー！」

アカデミア兵士がエクシード次元の人間を倒し、カードにする

正直言つて、ここまでなら想像はしていた

決闘を用いて戦争している以上、決闘で倒した相手をカード化するだろうとは思っていた

しかし、ここまで一方的だとは思っていなかった

さらには

「た、助けて……」

「よっしゃー！スコア更新！」

決闘できない相手を嬉嬉として相手をカード化するアカデミア兵

「なんだよ……これ……」

思わず口から出てしまった

それを隣にいた分隊長のオベリスクフオースに聞かれた

「あ？お前ハンティングは初めてか？」

「……ハンティング？」

「まあ安心しろって、このあとは自由行動だ、お前のぶんの獲物も残ってるよ」

笑いながらそう言った

「獲物……」

これが戦争……？決闘戦士の戦い？

これが……こんなのが……

……ああ、そうか、ようやく分かった

間違ってるのは俺じゃない、アカデミアだ

・・・

「クソツタレ！」

レジスタンスの少年、神月アレンは毒づく

「アイアンヴォルフの効果でてめえに直接攻撃だ！」

「ぐあっ！」

自身のエースモンスターで敵のライフを0にする

しかし

「あーあ、やられちまって、なっさけねー」

「後で説教だな」

敵はまだあと二人いる

「ほら、お前の攻撃は終わっただろ？ エンドでいいんだよなあ？」

アレンにこれ以上出来ることは無い

「くっ・・・ターンエンド」

「俺のターン！ 古代の機械猟犬の効果！ ハウンドフレイム！」

「うわっ！」

機械でできた猟犬の口から火球が放たれ、アレンのライフをあと一

撃という所まで削る

「ちっ！ この手札じゃトドメはさせないか・・・この獲物はお前にやる

よ」

「おっ？ まじか、ラッキー」

アカデミア兵のそんな会話が聞こえる

最後のアカデミア兵の場にも猟犬がいる

アレンは非戦闘員を逃がすために殿になった

故に、近くにレジスタンスはおらず、援軍は望めない

「ちっくしょおおお！」

「ターンエンドだ」

「よっしや、俺の」

『乱入ペナルティ、2000ポイント』

無機質な機械音となり、アカデミア兵とアレンの間に赤い影が割り込んだ

「俺のターン！ドロー！」

赤いアカデミアの服を着たりヨウジだった

「貴様！獲物を横取りする気か！」

「そんなつもりは無い」

「だったら邪魔をするな！さっさとそこをどけ！」

楽しみを邪魔されたアカデミア兵が怒り心頭といった感じで吠える

「横取りする気は無い、けど」

アカデミア兵を指さして宣言する

「お前らの邪魔をさせて貰う」

カードを盤に叩きつけるように発動する

「融合を発動！サイバードラゴン2体を融合し、現れろ、サイバーツインドラゴン！」

双頭の機械龍が列車とアレンを守るように猟犬に立ちはだかる

「やれ！サイバーツインドラゴンでお前らの古代機械の猟犬に攻撃！」

二つの口にエネルギーを溜め、2体の猟犬に狙いを定める

「正気か貴様！」

「アカデミアを裏切る気か！」

アカデミア兵が叫ぶ

「ああそうだよ！アカデミアの崇高な理想？次元統合？知るかそんなもの！無抵抗の人間いたぶって笑ってるようなところなんざこつちから願う下げだ！速攻魔法、リミッター解除！」

サイバーツインドラゴンの口のエネルギー量が増す

「消え失せろ！エボリューションツインバースト！」

「ぐああああ！」

アカデミア兵が消えていく

アカデミアの盤には決闘で負けた場合強制送還される機能がある
戻ったら自分の事も報告されるだろう

これで自分は立派な反逆者、帰ったら粛正でカード化か、よくて牢屋行き

少なくとも、今までの生活は送れない

でも後悔はしない、むしろ清々している

「お、おい……」

後ろからつり目のガキが話しかけてくる

「あんたアカデミアだろ……なんで俺を助けた？」

「それは……」

なんと答えようかと考える

遠くから悲鳴が聞こえた

「っ！まさか追いつかれたのか!？」

「話はあとだ」

悲鳴の方へ駆け出そうとする

「待てー!」

つり目のガキが俺を止めた

「……グズグズしていたら犠牲者が増えるぞ」

「……近道を知ってる、このへんの地理ならあんたより詳しい」

「……」

「……たのむ、今だけでいい、力を貸してくれ」

「さっさと案内しろ、手遅れになりたいのか」

「あ、ああ!」

つり目のガキの案内について行った

「やれ！エターナルエボリューションバーストオ!」

「ぐわっ!」

最後のアカデミア兵のライフを0にする

「はっ、ははは!」

次元移動で体が消えかかっているアカデミア兵が笑う

「何がおかしい」

「お前は終わりだよ……アカデミアに逆らって、タダで済むわけがない!お前も!その獲物共も!せいぜい怯えながら過ごせばいいさ

！ははは！

高笑いとともに消えていった

「・・・はあ」

肩の力を抜く、さすがに連続での決闘は堪えるものがある

「ア・・・アカデミア？」

「なんでアカデミアが・・・？」

後ろにいる非戦闘員からの困惑の音が聞こえる、まあ当然だろう

突如、左腕の決闘盤が光り始める

危ないとなつきに判断して決闘盤からカードを抜き取り、盤を投げる

決闘盤は次元移動の光に包まれ、その場から消えた、帰還した兵が俺の事を報告したのだろう

そして盤の強制送還機能で俺を呼び戻そうとした、間一髪だったな
しかしどうするか、これでは決闘が出来ない

ちらりと後ろを見る、まあ、俺に対する警戒の度合いが上がっているな

ここは・・・

決闘戦士として鍛えられた身体能力をフルに生かしてその場から
離脱する

「ああつーおい！」

つり目の声が聞こえたが、面倒なことになりそうな予感があったので
無視した

・・・

さてと、これからどうするか

時間は夜、サバイバルの訓練で学んだ火起こしで火を確保し、焚き
火をつくり、寒さをしのいでいる

サバイバルの訓練を受けているとはいえ現状はどうしようもない

融合次元に戻っても反逆者として粛正される

かと言ってこっちでも、融合次元の人間と言うだけで怪しきしかな
いし、あいつらの同類ということで敵対意識を持たれるだろう、よっ
てこの次元の人に頼ることも出来ない

そしてなにより重要なことが、決闘盤が無い

幸いデッキは無事だが、盤が無ければ宝の持ち腐れ、持ち手のない刀など何の役にもたたん

そもそも盤がない以上融合次元に帰る選択肢すらない

「どうするかなあ・・・」

思わず声に出してしまったが、まあしかたない

・・・足音か

遠くから足音がこちらに近づいてくる

焚き火に土をかけて消し、物陰に隠れ、息を潜める

嫌っていたアカデミアだが、そこで学んだサバイバル術が役に立っているのが腹が立つ

足音の主が現れた

「焚き火の跡・・・この近くにいるはずだな」

昼間に会ったつり目だった

「俺を探してるのか?」

「!?」

物陰から身を出す、理由は二つ、相手がなんの目的で動いているのかを確認したかったことと、周りに気配がないから最悪決闘(物理)で逃げ切れると判断したからだ

「・・・あ、ああ、あんたを探してた」

「なぜだ?」

「アンタに聞きたいことがある」

「なんだ?」

「・・・アンタは・・・俺達の味方・・・なのか?」

敵味方の確認か、敵か味方かの区別は戦場で真っ先に付けなくてはいけないことだな

「少なくとも俺はお前らに敵対する気は無い、アカデミアは許せないと思っっている、可能であれば協力したいと思っっている」

「・・・そうか」

つり目が手にしていた包みを投げ、俺がそれを受け止める

「・・・?これは?」

包みを開く、レジスタンスが付けているのと同じ形の盤が入っていた

「アンタの決闘盤が無くなるのが見えたからな、レジスタンスのスペアのひとつを貰ってきたんだ」

「感謝する」

目下最大の課題が解決した

「けどよ」

つり目が続ける

「それは今日助けてもらった借りを返したただけだ・・・俺はまだアンタのことを完全には信用出来ない」

「そうか、それでいい」

「・・・え?」

「俺はお前からから見れば侵略者の一味だ、信用出来なくて当然、むしろスパイの容疑をかけるべきだ」

貰った決闘盤をつける、カード化の機能はない、まあ元々使ったことのない機能だから問題ない

「この盤は大切に使用してもらおう」

そう言い残し、闇夜に消えた

レジスタンス

レジスタンス本部

「くっ・・・ダイヤ校のレジスタンスは全滅か・・・」

レジスタンスのリーダー、ユートはその報告に悔しげに顔を歪ませる

アカデミアの侵略に対抗するために結成されたレジスタンス

しかし、それまで戦いなど想定したことも無かった彼らには圧倒的に知識も経験も不足していた

「偵察班は問題ない、アカデミアを3人カードにしてやった」

それを言うのはユートの親友、黒咲隼だ

「食糧調達班・・・アカデミアに襲われてリーダーが負傷し、戦闘不能・・・」

そう報告するのはアレン

食糧調達班のリーダーはここにはいない

アカデミアとの交戦で傷を負い、医務室に運ばれている

「負傷だと？カード化はされなかったのか？」

隼が問いかける

「あつ、と・・・またアイツが助けてくれて・・・」

「例のアカデミアの脱走兵か」

ユートが答える

アカデミア脱走兵、リョウジに付けられたレジスタンスからの通称だ

アレンが提案しようとする

「なあユート、アイツなんだけど・・・俺達の仲間・・・」

「駄目だ！」

それを遮ったのは隼だ

「奴は所詮アカデミアだ！俺達がどれだけアカデミアに苦しめられているか分からないお前ではないだろう！」

「そ、それはそうだけど・・・」

激昂する隼の前ではこれ以上は続けられなかった

「・・・うん」

ユートは腕を組み、考え込む

「彼と一度話をしてみるか」

「正気かユート!? 奴は!」

「分かっている、彼はアカデミアだ、けど、アレン以外にも赤服のアカデミアに救われた報告がいくつかあった、話が通じない相手ではないと思う」

「しかし!」

「なにより、今のままじゃレジスタンスはジリ貧だ、現状を変える一手が欲しい」

「・・・分かった、だが俺も同行しよう、奴の目的がリーダーであるお前だと言う可能性もある、護衛は必要だろう」

組織を潰すためにリーダーを狙う、使い古された戦法、しかし有効な戦法だ

「いや、俺一人で行く」

「・・・本気で言っているのか?」

「ああ、彼の信用を得るためにも俺一人で行く」

隼がユートを睨みつける

ユートは怯まずに睨み返す

「・・・分かった」

やがてユートは折れないことを察した隼が折れた

かつてデパートがあつた荒れ地

そこにリヨウジは腰を落ち着けていた

脱走兵になってから10日程たったが、なんとかなっている

自身を狙うアカデミア兵は言わずもがな、レジスタンス狙いのアカデミア兵も確認できる範囲では撃退できている

生活だが、町の残骸から使えそうなものを拝借してやりくりしている

不便ではあるが、贅沢を言える立場でもないから我慢だ

「・・・だれだ、出てこい」

客人が来たことを察し、決闘盤を構える

「待ってくれ」

黒と紫のナスみたいな色合いの頭の男が現れた

「っ!? ユーリ!?」

その顔を見て警戒のレベルを最大まで引き上げる

「ユーリ?」

しかし次の瞬間には、別人だと分かった

髪型も違う、服装も違う、そしてなにより、あのニヤケ面じゃない
なのに一瞬あいつを思い出してしまった

「俺はレジスタンスのリーダーをしているユートだ、君と話をしたい」

「・・・いいだろう」

決闘盤を下ろした

「改めて自己紹介しよう、俺はユートだ」

「俺はリョウジだ」

簡単に自己紹介を済ませる

「話とは何だ?」

「単刀直入に言おう、君にレジスタンスに入ってもらいたい」

「・・・正気か?」

脱走兵とはいえアカデミアだった自分をレジスタンスに勧誘して
きたことを驚きを隠せなかった

「俺たちの敵は共通している、そしてレジスタンスは今少しでも戦力
が欲しい、頼む」

「・・・仲間になることは構わない、だが」

「無論、レジスタンスにも君をよく思っていない者がいることは分
かっている、そこは俺がどうにかする、信じてほしい」

反論しようとしたら先に潰された

「・・・少し考えさせてほしい」

「ああ、構わない」

レジスタンスに入った場合のメリットは組織として行動できるこ

と、個人として行動するには限界があるが、組織で動けばやれる事は大幅に広がる

デメリットは後ろからの攻撃にも気をつけなければならぬということだろう、レジスタンスにはアカデミアへの怒りが異常に強い奴もいる（数日前にも襲われた）仕方ないとはいえ、そういった者の怒りの矛先が自分に向くことも覚悟しなければならない

断った場合はどうだろう、メリットは：：特には思いつかない、やはり個人よりは組織の方が目的達成に近づく、幸い、共にアカデミア打倒を掲げているため、協力出来るだろう

デメリットは：：完全に孤立すること、レジスタンスからも要注目人物として狙われるかもしれない

「・・・分かった、レジスタンスに入ろう」

「そうか！でも意外だな、こんなにあっさりOKしてくれるなんて」

「メリットとデメリットを天秤にかけたただけだ、お前が何とかすると言っただけだ、その言葉を信じさせてもらう」

「ああ、任せてくれ、それと・・・」

「なんだ？」

「決闘をしよう」

ユート

デパート跡地の広場

かつては賑やかだったここもいまは瓦礫の山になっている

「すまないな、こちらから誘っておいてなんだが、俺は君の決闘を見たことが無い、だから君の実力を知っておきたいんだ」

「構わない、俺もレジスタンスのリーダーの実力を知っておきたかったからな」

互いに盤を構える

「久しぶりに気負わずに決闘が出来る」

ユートが苦笑しながらそう言った

「俺もそうだな」

「まあ、どうせやるなら、楽しくやろう」

「楽しく・・・そうだな」

「決闘！」

リョウジ LP4000

ユート LP4000

「先行は譲ろう」

リョウジがそう言う

「・・・ならばお言葉に甘えさせてもらおう、俺はカードを3枚伏せてターンエンド！」

「動かないか・・・ドロー！」

リョウジ 手札6枚

「俺はプロトサイバードラゴンを召喚！」

プロトサイバードラゴン 攻1100

「プロトサイバードラゴンは場にいる時サイバードラゴンとして扱える！」

「罨発動！針虫の巣窟！」

ユートが罨を発動させる

「デッキの上から5枚のカードを墓地に送る」

「墓地利用デッキか・・・俺は融合を発動！」

融合と聞いた瞬間、思わず身構えてしまったユート

ユートの友人程では無いにしろ、エクシーズ次元の人間は融合に対して苦手意識を持ってしまっている

「場のプロトサイバードラゴンと、手札のサイバードラゴンを融合！」

2体の機械龍が混じり合う

「進化する機械龍よ、仮初の機械龍と一つとなりて、二筋の閃光を生み出せ！融合召喚！レベル8、サイバーツインドラゴン！」

サイバーツインドラゴン 攻2800

「サイバーツインドラゴンは二回攻撃ができる、いきなりだが行かせてもらう、サイバーツインドラゴンで直接攻撃！」

機械龍が口にエネルギーを溜める、しかしそれが放たれることは無かった

「畏発動！幻影霧剣！」

輪郭がぼんやりとした剣がサイバーツインドラゴンに突き刺さり、サイバーツインドラゴンの体が、霧のように希薄になる

「サイバーツイン！」

「幻影霧剣の効果で対象モンスターは攻撃できず、攻撃対象にならず、効果は無効化される」

「ちっ、カードを一枚伏せてターンエンドだ」

やはりレジスタンスのリーダー、そう簡単にはいかない

「俺のターン、ドロー！」

ユート 手札3枚

「俺はマジックプランターを発動、幻影霧剣を墓地に送り二枚ドロー、さらに墓地の幻影霧剣の効果、墓地から除外する事で墓地の幻影騎士団を特殊召喚する、墓地より幻影騎士団サイレントブーツを特殊召喚！さらに手札から幻影騎士団ダステイローブを通常召喚！」

幻影騎士団サイレントブーツ攻200

幻影騎士団ダステイローブ攻800

レベル3モンスターが2体並ぶ、融合次元ならともかく、エクシーズ次元で同じレベルのモンスターが並ぶことは、条件が整った事を意

味する

「レベル3が2体・・・来るか」

「俺はレベル3のサイレントブーツ、ダステイローブでオーバーレイ！」

2体のモンスターが紫の光球になって穴に吸い込まれる

「戦場に倒れし騎士達の魂よ、今こそ蘇り、闇を切り裂く光となれ！エクスシーズ召喚！現れるランク3、幻影騎士団ブレイクソード！」

幻影騎士団ブレイクソード攻2000

「ブレイクソードの効果！ORUを一つ使い、自分と相手の場のカードを一枚ずつ破壊する！俺は残った伏せカードとサイバーツインドラゴンを選択！」

伏せてあった幻影死槍と共にサイバーツインドラゴンが破壊される

「くっ・・・サイバーツインに何もさせないとはな」

「行くぞバトルだ！ブレイクソードで直接攻撃！」

リョウジの場はがら空き、このままではライフ半分持っていかれるが

「畏発動！ガードブロック！ダメージを0にしてカードを一枚引く！」

「凌がれたか・・・やるな、ターンエンドだ」

「そっちこそ、俺のターン、ドロー」

リョウジ 手札4枚

「相手の場にのみモンスターがいる時、サイバードラゴンは特殊召喚出来る、こい！サイバードラゴン！」

サイバードラゴン 攻2100

「バトルだ、サイバードラゴンでブレイクソードを攻撃！エボリューションバースト！」

機械龍の口から放たれた光線がブレイクソードを撃ち抜く

ユート LP4000↓3900

「だがブレイクソードはタダではやられない！ブレイクソードが破壊された時、墓地から幻影騎士団を2体選び、レベルを1つ上げて特殊

召喚する！甦れ、ダステイローブ、サイレントブーツ！」

幻影騎士団ダステイローブ ☆3↓4

幻影騎士団サイレントブーツ☆3↓4

「幻影騎士団は倒れない！」

「レベル4のモンスターが2体・・・か」

ユートは間違いなくエクシーズ召喚を決めてくる

しかし今の手札では追撃はできない

「カードを一枚伏せてターンエンドだ、こい！」

「俺のターンだ、ドロー！」

ユート 手札4枚

「俺はレベル4となったダステイローブ、サイレントブーツでオーバレイ！」

先ほどと同じように穴の中に吸い込まれて行く2体のモンスター

しかし感じるエネルギーは先程よりも大きく、強いものだ

「漆黒の闇より愚鈍なる力に抗う叛逆の牙！今降臨せよ！エクシーズ召喚！現れる！ランク4！ダークリベリオンエクシーズドラゴン！」

漆黒の竜が咆哮と共に姿を現す

「こいつがお前のエースか？」

「そうだ、俺が最も信頼するエースだ、ダークリベリオンの効果！ORUを二つ使い、相手モンスターへの攻撃力を半分にし、その数値分攻撃力を上げる！トリーズンデイスチャージ！」

ダークリベリオンの翼が開き、サイバードラゴンのエネルギーを吸収する

サイバードラゴン 攻2100↓1050

ダークリベリオンエクシーズドラゴン 攻2500↓3550

「バトル！ダークリベリオンでサイバードラゴンを攻撃！」

雷撃が顎の突起に集まり、ダークリベリオンが飛翔する

「叛逆のライトニングデイスオベイ！」

「速攻魔法、ハーフシャット！モンスター1体の攻撃力を半分にして戦闘破壊耐性を与える！」

「それでもダークリベリオンの方が攻撃力は上だ！」

「誰がお前のモンスターに使うと言った？俺はサイバードラゴンを対象にこの効果を発動する！」

サイバードラゴン 攻1050↓525

半分になった攻撃力が更に半分になり、リヨウジを大ダメージが襲う

「くっ！」

リヨウジ LP4000↓975

「ダメージを増やしてもカードを残したか・・・俺は墓地のサイレントブーツの効果、及びラギッドグローブの効果が発動！」

ダークリベリオンの効果で墓地に行ったカードが使われる

「除外することでそれぞれファントムと名のつく魔法罫、幻影騎士団と名のつくカードを手札に加える、俺は幻影霧剣と幻影騎士団ロストヴァンブレイズを手札へ加える、カードを二枚伏せてターンエンド」

サイバードラゴン 攻525↓1050

ハーフシャットで下がった攻撃力が戻る、だが、ダークリベリオンに奪われた攻撃力は戻らない

「俺のターン・・・ドロー！」

リヨウジ 手札3枚

「俺は強欲で貪欲な壺を発動！デッキの上から10枚を裏側で除外することでカードを二枚ドローする！」

引いたカードを見て思わず口端が上がる

楽しい決闘なんていつぶりだろうか

アカデミアに入る前、決闘を覚えての頃は毎日楽しい決闘をしてきた気がする

でも、アカデミアに入ってから決闘は武器でしかなかった

負けることは許されない、ただ勝つためだけの決闘

無論、負ける気は無いし、負けたいとも思わない

けれど、勝敗なんか気にしない決闘、それを強い決闘者と出来る

こんな状況だが、今は純粹に楽しかった

「魔法発動、融合回収！墓地から融合と融合素材となったモンスター1体を手札に戻す！融合とサイバードラゴンを手札へ！」

「またサイバーツインドラゴンでくるか？だが、攻撃力はダークリベリオンの方が上だ」

「残念ながらツインドラゴンは1枚しか無いんだ、代わりに見せてやる、俺のエースを、融合を発動！」

「っ！来るか！」

「お前のエースの力は見せてもらった、ならば今度は俺の切り札の力を見せる番だ、場のサイバードラゴンと手札のサイバードラゴン2枚を融合！」

三体の機械龍が融合の渦に飲まれ、姿を変えていく

「進化する3体の機械龍よ、一つとなりて終焉もたらず閃光となれ！融合召喚！レベル10、サイバーエンドドラゴン！」

白銀の三つ首龍は大きく翼を広げ、趣きの異なる三つの頭で咆哮した

それに対抗するかのように、漆黒の竜も吠える

サイバーエンドドラゴン 攻4000

「こいつがお前の切り札・・・」

「いくぞ、バトル！サイバーエンドドラゴンでダークリベリオンエクシードドラゴンを攻撃！」

三つの首でエネルギーを溜める

「その攻撃は通さない！畏発動！幻影霧剣！」

最初の攻防で使われた剣がサイバーエンドに向かう

「それは一度見た！速攻魔法禁じられた聖槍！このターン、モンスターの攻撃力を800下げること魔法罫の効果を受けない！」

「だが、これで攻撃力はダークリベリオンの方が上だ！迎え撃て！ダークリベリオン！」

「いいや、まだまだ！さらに速攻魔法！リミッター解除だ！」

言わずと知れた機械族の切り札が発動される、当然ユートもこの効果は知っていた

「機械族の攻撃力をこのターン中倍にする！」

「くっ！ならば俺は伏せカード・・・」

ぞわっ、とユートの背筋に悪寒が走る

ここでこのカードを使つてはダメだ、決闘者としての本能がそう警鐘を鳴らす

伏せカードはロストヴァンプレイズ、モンスターの攻撃力を600下げ、そのモンスターのレベルを2にし、このカードを特殊召喚し、幻影騎士団に戦闘破壊耐性を与えるカード

この場で使えばサイバーエンドの攻撃力を1200下げ、ダメージを減らせるカードとなる

しかし、ユートは自身の直感を信じた

「・・・いや、何もしない」

効果が処理される、サイバーエンドドラゴンの攻撃力が倍になり、その後攻撃力をと引換に現れた槍に幻影の剣は叩き落とされる

サイバーエンドドラゴン 攻4000↓8000↓7200

「墓地の幻影死槍の効果！闇属性モンスターが破壊される時、このカードを除外することで破壊を免れる！」

「っ・・・だがダメージは受けてもらう！エターナルエボリューションバースト！」

三つの首から放たれた光線はまじり合い、一つのエネルギーとなって黒い竜に直撃する

「ぐあああああ！」

ユート LP3900↓250

黒い竜が受け止めきれなかった分がユートのライフを一気に持つていく

「くっ、倒しきれなかったか・・・ターンエンドだ」

ターンエンドと共に限界を超えたサイバーエンドドラゴンが崩れ落ちる

これでリョウジの場には何も無い、完全に詰みだ

「・・・まずは謝罪しよう、君の実力を疑うような事をしてしまった事を、君は強い決闘者だ」

「・・・そんなことないさ、俺は今まで、自分たちが間違つてることに薄々気付いていたのに何も出来なかったんだから」

アカデミアは間違つてる、そんなことによろやく気付いたのは取り

返しのつかない惨状を目の当たりにしてから

手遅れになってから気づいてももう遅い

「けれど君は戦うことを選んだ、目を背けず、今まで通りの生活を捨てて戦うことを選んだ君は弱くなんかないさ」

ユートがレジスタンスのリーダーに選ばれた理由がなんとなく分かった気がした

こいつは誰よりも優しい、それこそ、仲間のために敵だった奴に頭を下げることに躊躇わないくらい

こんな状況になっても怒りに囚われず、優しくあり続けられる

強いて言葉はこいつの方がふさわしい

「・・・分かったからさっさと終わらせてくれ、話はあとでも出来るだろう」

「ああ、すまない、俺の「俺のターン！ドロー！・・・は？」

真剣勝負の最中に乱入者が現れた

「おのれアカデミア！とうとう本性を表したか！」

ユートのよく知る人物、黒咲隼だった

「は？」

ユートとリヨウジの声が重なる

乱入した黒咲はペナルティとして2000のライフを失う

「ま、待て隼！彼は」

「ユート！大丈夫か！安心しろこいつは俺が片付ける！」

「いや、だから「俺は手札から！」

まったくユートの話を聞かない黒咲

「バニシンググレイニアスを召喚！バトルだ！」

無機質な隼がリヨウジに迫る

「え、ちよっ」

リヨウジ LP950↓0

隼の一撃を受けてライフが0になる

ダメージ実体化の機能を切っているはずも無く、その衝撃は現実の

ものとなり、リヨウジを襲った

「ぐわあああ!？」

リヨウジの体が瓦礫に叩きつけられ、瓦礫が崩れる

「ダークリベリオンの咆哮を聞き、もしやと思い駆けつけたら案の定戦闘になっていた!」

「………隼」

「やはりレジスタンスのリーダーの首を狙っていたんだろうと判断した」

「………」

「やつを尋問して情報を吐き出させる!何か有益な情ほ」ドスツ!

ユートの拳が黒咲の腹部にめり込む

「ぐっ!?!……ユート……ト……?……なぜ……」

「話を聞かないお前が悪い」

倒れる黒咲を放置し、リヨウジに駆け寄る

「おい、大丈夫か?」

不意打ちで吹き飛びこそしたがそこまで大きいダメージではない

「ああ……お前が何とかするって言ったんだからな……あれ、お前がなんとかしろよ……」

「………すまない、俺の仲間が……」

頭を抱えるユートであった

加入？

その後、ユートに連れられてレジスタンス本部に向かった
夜の報告会で紹介するということだったが・・・

「俺は反対だ、アカデミアなんかと手を組むなんてな」

「同感だ、ユート、考え直せ、こいつもいつ裏切るかわからないんだぞ」
「カードにしないにしても拘束しちまった方がいいんじゃないか？」

報告会に来ているレジスタンスからは否定意見が上がる

「お前らのいうこともわかる、だが・・・」

説得を試みるユート

「・・・やっぱりこうなったか」

予想できた現状に内心ため息をつく

万一のことを考え、窓の位置とその下の足場を確認する、4階だが、
この程度の高さなら飛び降りても問題は無い

ユートの説得の続く中近付いてくる者がいた

「なあ、あんた・・・」

脱走兵になった日に出会ったつり目だった

「なんだ？」

「あんたあの時、信用出来なくて当然、スパイの容疑をかける、つて
言ってたよな」

「ああ」

口論していた者達もこちらの会話に耳を傾ける

「じゃあさ・・・あんたはスパイなのか？」

まっすぐ目を見て問いかけてくる

「・・・俺はスパイだ、なんて答える奴はいないだろ。俺はただの脱走
兵、かつての故郷に喧嘩を売る反逆者だよ」

「あんたを信用していいんだな？」

「・・・それを決めるのは俺じゃない、お前自身だ」

返答を聞き、意を決した様子だ

「よし！俺はあんたを信じることにする」

「おいアレン！何を勝手に・・・」

「俺は実際にこいつに助けってもらったし、他にもこいつに助けてもらった奴を知ってる、お前らも聞いてるだろ？」

「それは・・・」

「そうだが・・・」

反対派は難色を示す

実際にアカデミアの赤服でレジスタンスの盤を付けた者に助けってもらったという報告は彼らも聞いていた

加えて、アレンが意見を曲げないことも知っている、一度決めたらそこに向かっていく、列車のような彼の性格を知っているというのもあった

「・・・一つ提案がある」

話し出す

「アカデミアだった俺をレジスタンスの仲間だと言うのは納得出来ないだろう」

「リョウジ・・・」

ユートが心配そうに見つめる

「仲間としては無理でも、変わりに協力者としてならどうだ？俺のことは仲間と思わなくていい、もしもの事があっても迷わずに見捨てられる駒が手に入ると思ってもらっていい」

淡々とそう告げる

「それなら・・・」

「まあ・・・実力はあるし・・・」

反対派だった者達も渋々といった感じで諦めた

報告会も終わり、来ていた者達も会議室から出ていった

「そっぴやユート、隼はどうしたんだ？」

つり目が思い出したように聞く

残っているのはユート、つり目、そして俺の3人だけ、黒咲は報告会の時から姿が見えなかった

「ああ、隼には少し休んでいてもらっている、アレがいると話し合いが進まなくなる恐れがあったからな」

「あー・・・なるほど」

それでいいのかレジスタンスリーダー、そして納得するのかつり目
少し空気が緩んだが、すぐに真剣な顔付きになるユート

「リョウジ、ちよつといいか?」

「なんだ?」

「話を聞きたい」

「・・・先に言っておくが、俺はせいぜい一般兵程度の地位しか無かつたから、あまり多くは知らないぞ」

「かまわない」

「なら・・・」

ぐうとお腹がなった

「・・・悪い」

「はは、話はご飯の後だな、食堂に行こう」

ユートとアレンの案内で食堂に着く

本来の飯の時間は終わっており、配給班が片付け始めていた

ユートが食器を洗っていた少女に話しかける

「瑠璃」

「あ、ユート」

その顔を見て身構える

「っ!?セレナ!?・・・じゃないよな」

「セレナ?」

ユートと瑠璃は首を傾げる

「いや悪い、知り合いに似ていて・・・いや、似てないが・・・」

あのすぐに噛み付いてくる駄犬のような女と似ているなど失礼極まる

「・・・ユート、この人が」

「ああ、彼が例の脱走兵のリョウジだ、リョウジ、こっちは瑠璃だ」

「よろしくね」

「・・・よろしく」

つり目が調理場の方から戻ってきた

「残ってたスープ貰ってきたぜ、喜べ新入り、今日は肉入りだ!」

情報整理

リヨウジが脱走兵から協力者になった次の日の朝

ユートは1人、人気の無い食堂で情報を整理していた

「・・・次元統合」

昨晚、リヨウジから聞いた情報は、今まで敵を尋問して手に入れたどの情報よりも価値のあるものだった

・・・アークエリアプロジェクト

融合、エクシーズ、シンクロ、スタンダードの4つの次元を統合し理想郷を創り出す計画

融合次元のアカデミアはその手始めとしてエクシーズ次元に侵攻した

アカデミアのトップ、プロフェッサーと呼ばれる男の名は赤馬零王
エクシーズ次元侵略の司令官の名はエド・フェニックス

他にも、警戒すべき決闘者の名を語った

さらに、リヨウジが付け加えた情報が

「赤馬零児・・・」

プロフェッサーには息子がいる、そしてその息子には今スタンダードにいるという

アカデミアが送り込んだのでは？と思ったが、リヨウジがそれを否定し、そのうえで

『ひよつとしたら、共に戦ってくれるかもしれない』

こう言った、根拠は赤馬親子が喧嘩別れする所を見たからだそうだ
「・・・融合次元は完全に敵、シンクロ次元は不明、スタンダードは：」

正直な話、ユートも今の戦力ではアカデミアに勝てる確率は低いだろうとは思っていた

疲弊したエクシーズ次元の僅かな決闘者だけでは、訓練を受けた融合次元の決闘戦士達に勝つことは難しい

大分イレギュラーではあるが、融合次元の決闘者であるリヨウジと協力者になれたことで、他次元との同盟という考え方ができるようになった

食堂に来た瑠璃がユートに話しかける

「おはよう、ユート」

「ああ、おはよう、瑠璃」

「今日は特に早いね」

「昨晩色々聞いたからな」

たわいもないことを話す二人

そういえばとユートが聞く

「瑠璃、リョウジの居場所を知らないか？」

「リョウジさん？まだ寝てるんじゃないか？」

「いや、ここに来る途中で寄ったがいなかった」

食堂に眼鏡をかけた少女が駆け込んでくる

「ごめん瑠璃！少し寝坊した！」

「そんなにあわてなくてもいいよ、まだ時間前だよサヤカ」

瑠璃の友達で、今は同じ給仕担当のサヤカだ

「ちようどよかった、リョウジさん見なかった？」

「リョウジ・・・ああ、脱走兵の。見たよ、なんでも日課のランニング

兼異常がないか見廻りに行くとかで、朝食には戻るって」

「外に行ってたか・・・って外だと！」

「ど、どうしたの？」

思わず声を荒げ、焦った様子のユートとびっくりした瑠璃

「すぐに彼を探さなくては・・・！」

.....

「おいおい・・・」

リョウジは冷や汗を垂らす

リョウジもそれなりに場数を踏んだ決闘戦士、相手の威圧感で大体の力量は分かる

しかもそれが全て自分に向けられているものだとすれば・・・

「その赤い制服・・・貴様、アカデミアだな」

その相手は決闘盤を展開し、こう告げた

「懺悔の用意は出来ているか」

カイト

「待て！俺はお前と戦う気は……」

「問答無用だ！俺のターン！」

カイトLP4000 手札5枚

「話を聞け……ああもう……」

リヨウジは説得を諦めた、黒咲とのやりとりで怒りに囚われた奴とは会話自体が成立しないことは身に染みて分かっていた

かといってここでやられてカードにされるわけにもいかないと盤を起動させる

リヨウジ LP4000

「俺はサイファアーウイングを召喚！さらに場にサイファアーがいることで手札からもう一体特殊召喚！」

サイファアーウイング 攻1400

サイファアーウイング 攻1400

二体のモンスターが並ぶ、共にレベルは4

「くるか……」

「俺はカードを一枚伏せてターンエンド！」

身構えたリヨウジだったが、カイトは何もせずとターンを終えた

「わざわざモンスターを並べたのにエクシーズ召喚しなかった……」

あれほどの気迫を出せる決闘者が手札事故を起こすはずがない、ならばこの盤面には意味があるはず

「十中八九罠だろうが……俺のターン！ドロ！」

リヨウジ 手札6枚

「俺はサイバードラゴンツヴァイを召喚！」

サイバードラゴンツヴァイ 攻1500

「サイバードラゴンツヴァイは手札の魔法を見せることでこのターンサイバードラゴンとして扱う、俺は手札の融合を公開する！」

ツヴァイの体にサイバードラゴンの幻影が被さる

融合のカードを見たカイトはピクリと眉を動かした

それを見たリヨウジは仕方ないと自分に言い聞かせる

この次元の人間にとっては侵略者の象徴であり、忌むべき力、しかしリョウジにとつては自分の身を守り、これから先の戦いを戦いぬくための力でもあるため、エクシーズ次元の協力者になったからと言って捨てられるものではない

「・・・俺は手札から融合を発動！場のサイバードラゴン扱いのツヴァイと手札のサイバードラゴンを融合！融合召喚！レベル8、サイバードラゴン！」

双頭の機械竜がリョウジの場に現れる

サイバードラゴン 攻2800

「バトル！サイバードラゴンでサイファアウイングを攻撃！」

「畏発動！サイファアウイング！俺の場に同名サイファアウイングが2体以上いる時、そのモンスターは戦闘で破壊されず、俺は効果ダメージを受けない！」

「だがダメージは受けてもらう！エボリユーションツインバースト！」

「ぐっ！」

翼の形をした機械は破壊されなかったが、超過した分の1400ポイントのダメージを受ける

「サイバードラゴンは二回攻撃が出来る！もう一度サイファアウイングを攻撃！エボリユーションツインバースト！」

ツインドラゴンの二撃目がサイファアウイングを襲う

再び1400のダメージを受けてしまったカイト

「ぐあっ！」

カイト LP4000↓2600↓1200

「・・・俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ」

一ターンで相手のライフを大幅に削りとつたリョウジだが、その顔に余裕は無かった

何かがおかしいという違和感があった

「俺のターン、ドロー！」

カイト 手札3枚

「俺は手札から三体目のサイファアウイングを召喚！」

サイファアーウイング 攻1400

「レベル4が3体・・・来るか・・・？」

「誰がレベル4でやると言った？俺は3体目のサイファアーウイングの効果発動、このカードをリリースする事で場のサイファアーモンスターのレベルを4つ上げる！」

サイファアーウイング ☆4↓8

サイファアーウイング ☆4↓8

「っ！レベル8が2体！」

「俺はレベル8になったサイファアーウイング2体でオーバーレイ！エクスシーズ召喚！」

姿を見せたモンスターは先程までの無機質なモンスターと異なり、荒々しく吠える竜の姿を取り、その光は見るものの目を釘付けにする輝きを発していた

「ランク8！銀河眼光波竜！」

銀河眼光波竜 攻3000

「攻撃力3000・・・」

「銀河眼光波竜の効果発動！オーバーレイユニットを一つ使い！相手モンスター1体の効果を無効にしてコントロールを奪う！」

光の玉が光波竜の胸に吸い込まれ、光波竜の翼が輝き出す

「我が下僕となれ！サイファアープロテクション！」

「くっ！速攻魔法！融合解除！融合モンスターを素材に戻す！」

輝きに飲まれる直前、ツインドラゴンは元の2体に分裂して回避した

サイバードラゴン 守1600

サイバードラゴンツヴァイ 守1000

融合解除、これは融合次元では禁止ではないが、使われないカード融合こそが最強という考えにおいてわざわざそれを解除するなど愚行でしかないといわれていたが、異端児であるリョウジは愛用していた

「ならば銀河眼光波竜でサイバードラゴンを攻撃！殲滅のサイファーストリーム!!」

「くっ！」

光波竜の攻撃にサイバードラゴンは破壊されるが守備だったためダメージは無い

「カードを1枚伏せてターンエンド」

「・・・俺のターン、ドロー！」

リョウジ 手札2枚

リョウジの感じた違和感はまだ消えていない、ここまでの決闘はリョウジが優勢で進んでいるはず

なのに、流れを掴んでいる気になれなかった

「・・・俺は伏せていた融合準備を発動！デッキから融合素材のモンスター、サイバードラゴンを1枚手札に加え、墓地から融合を手札に戻す！」

さらにサイバードラゴンツヴァイの効果！手札の融合を公開し、サイバードラゴンとして扱う！」

カード効果を駆使し、融合の準備を整える

「俺は手札から融合を発動！場のサイバードラゴン扱いのツヴァイと手札のサイバードラゴン2枚を融合！」

現れるのはリョウジのエースモンスター

「進化する3体の機械竜よ！一つとなりて終焉もたらず閃光となれ！融合召喚！レベル10、サイバーエンドドラゴン！」

三つの首を持つ機械竜が大きな翼を広げ咆哮する

サイバーエンドドラゴン 攻4000

「攻撃力4000・・・光波竜を上回ったか・・・」

「バトル！サイバーエンドドラゴンで銀河眼光波竜を攻撃！」

三つの首にエネルギーが溜まる

「エターナルエボリューションバースト!!」

放たれたエネルギーの奔流は光波竜を飲み込み、巨大な爆発を引き起こした

「これでどうだ・・・」

まだ倒せた訳では無いが、相手のエースを倒したことで流れを掴むことが出来たのではないかと期待しつつカイトの立っている辺りを

見つめる

「・・・この程度か」

「なっ!？」

しかしその期待は裏切られた

カイト LP1200↓200

カイトのライフは確かに削れていた、しかし

「なぜ光波竜が・・・!」

銀河眼光波竜 攻3000

銀河眼光波竜 攻3000

倒したはずの光波竜は健在、しかも、新たに1体増えている

「俺は罠カード、サイファースペクトラムを発動した、ORUを持ったサイファーマンスターが破壊された時、そのカードを特殊召喚し、同名カードをEXデッキから特殊召喚する」

「くっ・・・だが、もうORUは無い、次のターンでおわりだ、ターンエンド!」

「・・・この程度か・・・貴様に次のターンはない!ドロー!」

カイト 手札2枚

「俺はサイファージェイフュージョンを発動!攻撃力3000以上のサイファーマンスター1体の攻撃力を0にすることで別のサイファーマンスターに三回攻撃の権利を与える!」

銀河眼光波竜 攻3000↓0

「だが、攻撃力はサイバーエンドの方が上!たとえば3回攻撃が出来るも・・・」

「それはどうかな?」

この瞬間、リョウジは今まで感じていた違和感や緊張感の正体に気づいた

こいつには勝てない、リョウジの決闘者の本能がそう警鐘を鳴らしていたことに

「魔法カード!受け継がれる力!場のモンスター1体を墓地に送り、その攻撃力を他のモンスターに与える、攻撃力が0になった方の光波竜を墓地に送る!」

墓地に送られた時点で攻撃力の変化は元に戻る

二体の光波竜、その全ての力が1体に凝縮されていく

銀河眼光波竜 攻3000↓6000

「攻撃力・・・6000・・・」

「バトル！銀河眼光波竜でサイバーエンドドラゴンを攻撃！殲滅のサイファーストリーム!!」

「サイバーエンド！」

迫り来る光線に対して三つの首からの光線で対抗する

しかしその抵抗は無意味に終わり、サイバーエンドは消し飛ばされた

超過ダメージ2000がリヨウジを襲う

「ぐああああ!!」

リヨウジLP4000↓2000

両手を交差させて衝撃に耐えるリヨウジ

だが、攻撃はまだ終わっていない

「懺悔の用意は出来ているか！銀河眼光波竜でダイレクトアタック！殲滅のサイファーストリーム!!」

光波竜の光線が迫る

先の攻撃はサイバーエンドが半分以上削ったが、もうサイバーエンドはいない

圧倒的な光線がリヨウジに直撃した

「ぐわああああ!!」

リヨウジ LP2000↓0

あまりの衝撃に耐えきれずに数メートル吹き飛ばされ、瓦礫に激突する

「ぐ・・・が・・・」

立ちあがろうともがくが、力が入らずに倒れ込んでしまう

「ここまでだ、アカデミア」

「ぐ・・・」

カイトは倒れ伏したリヨウジを見下す

「カイト！待ってくれ！」

その二人の間に飛び込むようにユートが割り込んだ

「彼は俺達の協力者だ！敵ではない！」

「だろうな」

「だから・・・え？」

思いがけないカイトの言葉にキョトンとするユート

「クローバー校のレジスタンスにもアカデミアの脱走兵の噂は届いていた、そんな中での招集だ、大体の見当はつく」

今日カイトを呼んだのは他でも無いユートだった

もつとも、通信手段も限られる現状においては招集の合図程度しか発せず、リヨウジの事は伝わっていなかった

「ならば何故」

「協力者になったからと言って、本当に信用できるかどうかは別問題だ、だから試させてもらった・・・最も、役に立ちそうにないがな」

「なんだと・・・」

倒れたままのリヨウジが睨みつける

しかしカイトは意に介さずに話し続ける

「お前、諦めたな」

「・・・そんなこと」

「レジスタンスはたとえ勝てないと分かった決闘であろうと最後の最後まで抗い、勝つことを諦めてはならない、たとえ負けるとしても一人でも多くの敵を道連れにする。犠牲を無駄にしないためにも、アカデミアは絶対に倒さなければならない」

強い語調でそう語るカイトにリヨウジは何も言い返せない

「貴様には覚悟が足りない、最後まで戦い抜くという覚悟、敵を倒すまで引かないという覚悟が」

踵を返す

「せいぜい足を引つ張るなよ」

そう言い残して去っていった

残されたのは倒れたリヨウジとどうしたものかと悩むユート

「あー、リヨウジ、彼は・・・」

「分かってる・・・多分激励なんだってことは・・・」

「……うむ、ならいいんだ、彼に悪気は無い……多分」

「……まあ、言ってることは合ってたよ」

覚悟がない

自分では覚悟を決めていたつもりだった

けれど、カイトとの決闘で覚悟が足りていなかったことが分かった

「ユート」

「なんだ？」

「俺にエクシーズを教えて欲しい」

素良

協力者になって数日後

リヨウジは3人のオベリスクフォースに追われていた

「はあ・・・はあ・・・」

「逃げるな臆病者！」

「くそっ！どこまで逃げる気だ！」

オベリスクフォースは追っていた・・・と言うよりは息を切らして追いつがっていた

リヨウジとオベリスクフォース、どちらも訓練を受けた身ではあるが、リヨウジはここ数日この周辺を見回っており、地の利はリヨウジにあった

ふいにリヨウジが足を止める

「さてとこの辺でいいか」

「ぜえ・・・ぜえ・・・やっと観念したか」

「ああ、ここなら・・・周りに被害が出ない、やれ！サイバードラゴン！」

・・・

「ふう・・・おわったか・・・」

LPを失ったオベリスクフォースの体が消えて行く

その姿に内心胸を撫で下ろすリヨウジ

パチパチパチ、と拍手の音がする

音の方向を見れば青い髪の少年がいた

「おみごと、赤服の落ちこぼれにしてはよくやるじゃん」

「お前・・・紫雲院か、なんでお前がここにいる、お前はまだ中等部だろう」

エクシード次元侵攻に参加するのは高等部以上と決まっております、それより前の中等部は侵攻には加わらない筈だった

「僕は優秀だからね、リヨウジと違ってさあ」

かたや中等部ながら青服のエリート、かたや高等部でありながら赤服の落ちこぼれだ

「赤服が裏切ったって聞いてたけど、やっぱりリヨウジだったね、エクスीड側についた気分はどう？やっぱり負け犬同士居心地いいでしょ？」

素良とリヨウジは決して友人などではなかった

徹底的に赤服のリヨウジを見下す素良

エリートであるが故に落伍者に対するあたりは強かった

「まあそれも今日で終わり、安心しなよ、寂しくないように、すぐにお仲間も同じ所に送ってあげるから！」

そう言い放つと決闘盤を起動させる

「なるほどね・・・しようがないか」

リヨウジも盤を構え、戦闘態勢になる

「決闘!!」

リヨウジ LP4000

素良 LP4000

「僕が先行だ！僕は融合を発動！手札のシープとエツジインプチェーンを融合！」

可愛らしい羊が姿を見せる、しかしそれも一瞬のこと

その直後に現れた鎖が羊に次々と突き刺さり、その姿を異形のものへと変えていく

「悪魔の鎖よ、角持つ獣と一つとなりて新たな力と姿を見せよ、融合召喚！現れでちやえ！全てを封じる鎖の獣！デストーイチエーンシープ！」

デストーイチエーンシープ 守2000

何本もの鎖が突き刺さり、虚ろな目になった羊がそこにはあった

これが素良のデッキ、可愛らしいファーニマルモンスター達は子供受けするだろうがエツジインプは禍々しいの一言、デストーイモンスターは子供がみたら泣くことうけあいだ

「エツジインプチェーンの効果、デッキからデストーイカードを一枚

手札に加える、僕はデストロイリニツチを手札に！」

「・・・守備表示か」

先行は攻撃出来ない、ほとんどの決闘者は地味なバーンをするか、次のターンへの仕込みをするかだ

しかし素良はあえて守りを固めた、これが意味することは

「・・・俺のことはリサーチ済みってことか」

リヨウジと素良は決闘したことはない

リヨウジの速攻に対する壁を立てたということとは任務にあたりアカデミア側のデータを渡されたのだろう

「僕はこれでターンエンド！」

「俺のターン！ドロー！」

リヨウジ 手札6枚

「俺は融合を発動！手札のサイバードラゴン2枚を融合！進化する2体の機械竜よ、一つとなりて2筋の閃光を生み出せ！融合召喚！レベル8、サイバーツインドラゴン！」

サイバーツインドラゴン 攻2800

「サイバーツインドラゴン・・・やっぱり来たね」

「バトル！サイバーツインドラゴンでデストロイチェーンシップを攻撃！エボリューションツインバースト！」

二つの口から放たれた光線が異形の羊を吹き飛ばす

しかし

「デストロイチェーンシップの効果！破壊された時1ターンに1度だけ攻撃力を800上げて復活できる！」

飛び散った綿状のものを鎖がまとめてゆき、元の形へと縛り上げる破壊されたことに対する恨みからか負のエネルギーがその体には満ちていた

デストロイチェーンシップ 攻2800

「さて？サイバーツインドラゴンには二回攻撃があるけどどうする？」

「くっ・・・サイバーツイン！デストロイチェーンシップを攻撃！」

再び光線が異形の羊を襲う

しかしたただではやられないとばかりに鎖が伸ばされ、サイバーツインドラゴンを締め上げる

結果、お互いに破壊された

「正解、なかなかやるじゃん」

「・・・くっ」

これはリヨウジにとっては厳しい選択だった

しかし相打ちさせなければ次のターンにシープから相打ちを取り復活、そして直接攻撃を受けることになっていた

「バトル終了、俺はサイバークヴァリーを召喚！そして機械複製術を発動！攻撃力500以下のモンスターと同じモンスターを2体特殊召喚！」

サイバークヴァリー 攻0

サイバークヴァリー 守0

サイバークヴァリー 守0

低ステータスのモンスターで壁を作る

「カードを一枚伏せてターンエンド！」

「サイバークヴァリーねえ・・・」

素良の口がニヤリと歪む

「その程度で時間稼ぎが出来ると思ってるの？僕のターン！」

素良 手札6枚

「僕はデストーイリニッチを発動！墓地からデストーイチェーンシープを特殊召喚！さらにファーマルオウルを召喚！効果でデッキから融合を手札に！」

デストーイチェーンシープ 攻2000

ファーマルオウル 攻1000

「そして僕は融合を発動！手札のエッジインプソウとファーマルライオを融合！悪魔宿りし鉄の歯よ、牙剥く野獣と一つとなりて新たな力と姿を見せよ！融合召喚！現れ出ちやえ！すべてを切り裂く百獣の王！デストーイホイルソウライオ！」

デストーイホイルソウライオ 攻2400

また新たに融合モンスターが現れる

だがリョウジの表情は崩れない

「まだ余裕そうな顔だね？そのモンスター達の効果のお陰かな？」

素良はポケットから棒付き飴を取り出し、舐め始める

「でもねえ・・・そのカードもとつくにリサーチ済なんだよ！ホイールソウライオの効果！1ターンの1度相手モンスター1体を破壊する！」

ホイールソウライオから丸鋸が飛び出し、守備表示だったサイバークリアーを切り裂く

「くっ！」

「この時そのモンスターの攻撃力分のダメージ・・・なんだけど、0だからねえ、バトル！デストロイチェーンシップで攻撃表示のサイバークリアーを攻撃！」

チェーンシップがサイバークリアーに突撃する

「この瞬間サイバークリアーの効果発動！攻撃対象になった時、このカードをゲームから除外することで、一枚ドロウしてバトルを終了する！」

「させないよ！」

除外ゾーンに消えようとしたサイバークリアーだったが、その前にチェーンシップから伸びた鎖に縛られてしまう

「なっ?！」

「デストロイチェーンシップのバトル中、相手は効果を発動出来ないのさ！やれ！チェーンシップ！」

鎖に縛られたヴァリアーをシップが体当たりで粉碎する

ヴァリアーの細身の身体では攻撃を止めることなどできるはずもなく軽々と粉碎された

「ぐああっ！」

リョウジ LP4000↓2000

「ホイールソウライオ！残ったサイバークリアーに攻撃！」

「サイバークリアーの効果発動！」

続く悪魔の鋸は間一髪で避け、ドロウへと変わる

「これではがら空き、次のターンの攻撃は耐えられないよ？僕は

カードを2枚伏せてターンエンド」
「くっ……」

素良はリョウジ討伐の任務を受けた時にアカデミアでのリョウジのデータに目を通していた

攻撃するときの傾向、それがダメだったときの凌ぎ方

そして……奥の手の存在さえも

(僕の伏せカードの1枚は大番狂わせ、レベル2以下のモンスターをリリースして特殊召喚されたレベル7以上のモンスターをすべて手札に戻すカード……リョウジの融合モンスターはいずれも高レベル高パワーのモンスター達、このカードでリョウジは終わりだ)

「俺の……ターン!!」

リョウジ 手札2枚

ドローカードを確認する

「これは……」

「どう? 逆転のカードは引けた?」

「ああ……とびっきりのがな、リバースカードオープン! リビングデッドの呼び声! 蘇れ! サイバードラゴン!」

地面を割り、白銀の機械竜が蘇る

「さらに手札からプロトサイバードラゴンを召喚!」

サイバードラゴン 攻2100

プロトサイバードラゴン 攻1100

「わざわざ場にモンスターを並べた?」

素良は情報の戦法とは違う行動に戸惑う

「そして俺は手札から魔法発動! 共振装置!!」

「っ?! なんだそのカードは!?!」

場のサイバードラゴンとプロトサイバードラゴンが突如現れた機械に繋がれる

そしてサイバードラゴン側からエネルギーがプロトへと流れてゆ

く

「場の同属性、同種族モンスターを2体選び、片方のレベルに統一する！」

プロトサイバードラゴン ☆3↓5

「レベルを・・・統一・・・?・・・まさか!？」

「俺は、レベル5になったプロトサイバードラゴンとサイバードラゴンで・・・オーバーレイ!!」

二体の機械竜が光の玉となり、地面に出来た穴の中へと吸い込まれてゆく

「進化する機械竜よ!新たな力をその身に宿し!敵を撃ち抜く閃光となれ!エクシーズ召喚!!」

地面の穴から爆発が起こり、爆炎の中から新たなモンスターが姿を現す

「ランク5!襲雷せよ!サイバードラゴンノヴァ!!」

新たな力を得たサイバードラゴンは大きく翼を広げて咆哮した

サイバードラゴンノヴァ 攻2100

「馬鹿な!アカデミアの脱走兵がエクシーズを使うなんて!」

素良の動揺の原因は決してデータに無いカードを使ったからと言うだけではなかった

それは融合次元のプライドでもあった

融合はエクシーズよりも優れている

盲目的にそう信じてきたが故に、融合使いがエクシーズを使うなんてことが理解出来なかった

「俺はサイバードラゴンノヴァの効果発動」

リョウジは淡々と処理を続ける

「ORUを1つ使い、墓地からサイバードラゴンを特殊召喚する。再び蘇れ、サイバードラゴン!」

サイバードラゴン 攻2100

ノヴァの隣にサイバードラゴンが並び立つ

「バトル!サイバードラゴンでファーマルオウルを攻撃!エボリリューションバースト!」

「しまった・・・！」

大番狂わせのコストのためにわざと放置していたことが裏目に出た

ここで大番狂わせを使い、回避することは出来るが、そうするとホイールソウライオが消える

未だ未知数のモンスターを前にどうするべきか思考を巡らせる

「っ・・・毘発動！大番狂わせ!!レベル2以下のモンスター、ファーマルオウルをリリースして発動！場の特殊召喚されたレベル7以上のモンスターをすべて手札に戻す！」

エクシーズにはレベルがない

今この条件に当てはまっているのはホイールソウライオのみ、よつて、素良のモンスターだけが2体消えた

チェーンシープならばこの場を最小限のダメージだけで凌ぐことが出来る

そう判断しての行動だった

「サイバードラゴン！チェーンシープに攻撃を続行だ！」

オウルへの攻撃こそ避けたが、攻撃は止まらない

光線が羊を撃ち抜き、破片が飛び散る

素良 LP4000↓3900

「くっ！チェーンシープの効果！攻撃力を800上げて復活する！」

しかしすぐに鎖に纏められ、憎悪を糧に力を増す

デストロイチェーンシープ 攻2000↓2800

「どうだ！これで攻撃力はチェーンシープの方が上！君のエクシーズモンスターなんかよりも上だ！」

(もしも効果で対象にしても、ボクの伏せカードはデストロイマーチ・・・デストロイが効果対象になった時その効果を無効にするカード、リョウジが相手なら使うことはないと思っただけ、念のために伏せておいて正解だった・・・)

それはある意味では正しかった

攻撃力が勝っている以上処理するには効果を使うしかない

未知の相手に対しての対抗策になり得るカードを伏せていたこと

は幸運だった

最も、この場合は何の役にもたたないが

「サイバードラゴンノヴァの効果！場か手札のサイバードラゴンを除外することでエンドフェイズまで攻撃力を2100ポイントアップする！」

ノヴァの隣にいるサイバードラゴンの体が粒子となり、ノヴァに取り込まれる

サイバードラゴンノヴァ 攻2100↓4200

「こっつ！攻撃力4200!?!」

「これで攻撃力はこっちが上！サイバードラゴンノヴァ！デストロイチェーンシップを攻撃!!」

サイバードラゴンノヴァの口にエネルギーが集中し、紫電が迸る

「エボリューション・ノヴァ・バーストオ!!」

サイバードラゴンの時とは違う、雷の特性を得たプレスが羊へと降り注ぐ

羊は一瞬の抵抗も許されず、その身を焼却された

その余波が素良に襲いかかる

「うっ!?!ぐあああつ!?!」

素良 LP3900↓2500

「俺はこれでターンエンドだ」

サイバードラゴンノヴァ 攻4200↓2100

ノヴァの体から粒子が霧散し、元のスペックに戻る

「・・・許さない」

バキッ！と飴を噛み砕く音が聞こえる

「落ちこぼれの赤服風情が・・・アカデミアに逆らうだけでも許されないのでにエクシーズに寝返って！あまつさえ融合使いとしての誇りさえ捨てて、エクシーズなんてものを使うなんて！」

ドローカードに手をかける

「もうお前は救えない！そこまで堕ちきったお前には少しの慈悲も与えない！僕の本気でお前を潰す！ドロー!!」

素良 手札2枚

「僕はファーニマルドッグを召喚！ファーニマルドッグの効果発動！デッキからエッジインプシザーを手札に！そして融合を発動！手札のエッジインプシザーと場のファーニマルドッグを融合！」

両手を前に突き出して組み、この決闘で最も力を込めながら唱える
「悪魔の爪よ鋭い牙よ！神秘の渦で一つとなりて新たな力と姿を見せよ！融合召喚！現れ出ちやえ！すべてを引き裂く密林の魔獣！デストローイシザータイガー!!」

ハサミで切り裂かれ、そのハサミごと縛られたような姿の虎の化物が姿を見せる

「シザータイガーが場にいる限り、デストローイモンスターはデストローイカフアーニマルの数だけ攻撃力が300アップする」

デストローイシザータイガー 攻1900↓2200

「さらに！このカードが融合召喚に成功した時、融合素材の数だけカードを破壊できる！消え失せる！目障りなエクシーズ!!」

シザータイガーの腹部のハサミが残っていたリビングデッドの呼び声を軽々と切り裂き、続いてサイバードラゴンノヴァを挟み込む

流石に機械の体は固く、易々とは切れない

しかし、悪魔のハサミに軍配が上がり、やがて機械の体は大きくひしゃげ、爆発四散した

「ははは！やっぱりエクシーズなんかじゃ融合には勝てないんだよ！これで分かっただろ！」

後はシザータイガーの直接攻撃でリョウジのライフは0になる

すでに手札も尽きているリョウジにこれを凌ぐ手段はない・・・はずだった

「・・・ああ、そうだな」

爆煙渦巻いている中から声が聞こえる

「・・・俺のエクシーズじゃ、お前を倒すことは出来ない」
爆煙が風に流されてゆく

「・・・結局はコイツに頼っちゃうことになったからな」
「っ!?!なっ!?!」

サイバードラゴン 攻4000

爆煙が消えたあと、そこには三つの首を持つ白銀の機械竜が鎮座していた

「馬鹿な!?なんでサイバーエンドが!」

「サイバードラゴンノヴァの最後の効果、こいつが相手の効果で墓地に送られた場合、機械族の融合モンスターを特殊召喚出来る」

融合へとつなげることの出来るエクシーズ

これは元融合次元の決闘者であり、現エクシーズ次元側として戦っているリョウジにしか出来ない芸当・・・と言えば聞こえはいいが、リョウジはあまり好きではなかった

エクシーズを使おうが所詮自分は融合の人間だということを思い知らされているような気がした

「エクシーズから・・・融合?・・・ははは!」

「何がおかしい」

堰を切ったように笑い出す素良

「なに、君も融合使いとしての最低限の誇りはあったんだと思ってね」
「・・・誇りだと?」

「そうさ!所詮エクシーズは融合には勝てない、だったらせめて踏み台として利用してやろうってことだろ?君のエクシーズは?」

融合を捨ててエクシーズを選んだのではなく、融合の為にエクシーズを利用している、それならば話は変わる

「どうだい?その力、アカデミアの為に使う気は無い?」

「・・・なに?」

思いがけない言葉に戸惑うリョウジ

「君には抹殺命令が出てる・・・けど、アカデミアの利になるならば話は変わる、エクシーズを踏み台にした融合・・・まさに正しい姿だ、それは必ず計画達成への力となる」

ニヤリと笑う素良

「今なら僕が口添えをしてあげるよ、敗北が決まっているレジスタンスなんかやめてアカデミアに戻ってきなよ」

「・・・なるほどな」

リヨウジの返事は一言

「断る」

簡潔に、それでいて明確に拒絶した

「・・・はっ。」

「それから二つ程訂正しておく」

指を一本立てる

「まず一つ、俺はレジスタンスではなくレジスタンスの協力者だとしても一つ」

二本指を立てる

「俺はエクシーズが融合に劣るだなんて微塵も思っちゃいない、エクシーズを融合に利用する？馬鹿馬鹿しい」

「っ！君は融合使いとしての誇りはないのか！」

「誇り・・・？」

脱走兵になった日から今日までの日々を思い返す

必死に逃げている人がいた

それを笑いながら追い回す奴がいた

仲間の仇を取ろうとする人がいた

それを嘲笑し弄んだ奴がいた

大切な人を失い、泣くことしか出来ない無力な人がいた

それを嘲笑いながらカードにした奴がいた

リヨウジは激昂する

「・・・アカデミアに誇りなんてものは無い！どうしてそんなことも分からない!!」

アカデミア兵に自分が悪いことをしている自覚があるやつはいない、少なくともリヨウジはそんなやつを見たことがない

力のある融合が無力なエクシーズを滅ぼすのは至極当然のこと

それが普通だった

「黙れ！エクシーズに魂を売った裏切り者が、融合の誇りを語るな!!」

2人の考えは平行線

どれだけ語り合ったとしても決して相入れることは無い

決闘盤がターンがリヨウジに移ったことを教える、一定時間素良に動きがなかったため強制的にターンが移行した

「ああ・・・そうだな・・・俺のターン!!」

リヨウジ 手札1枚

「魔法発動！死者蘇生！墓地から蘇れ！サイバードラゴンノヴァ!!」

サイバードラゴンノヴァ 攻2100

エンドとノヴァ

融合とエクシーズという全く異なるモンスターがリヨウジの場に並び立つ

「僕が・・・この僕が・・・」

数歩後ずさる素良

「バトル！サイバーエンドドラゴンでデストーイシザータイガーを攻撃!!」

三つの首から放たれたブレスが虎の化物を吹き飛ばす

素良 LP2500↓700

「赤服なんか・・・脱走兵なんか・・・」

「サイバードラゴンノヴァで直接攻撃！」

紫電が迸る

「エボリユーシヨン・ノヴァ・バーストオ!!」

「エクシーズなんかにいいいい!!」

紫電が弾けた

「うわあああああ!!」

素良 LP700↓0

ライフが0になった事で素良の盤の次元転送装置が起動する

「・・・なんで僕をカードにしなかった？」

決闘後、倒れふしたままの素良をカードにすることは容易だった
だが、リヨウジはそれをしなかった

「・・・お前らの同類になりたくないだけだ」

「・・・認めない！」

倒れたまま、怒りに満ちた目でリョウジを睨みつける

「僕がお前なんかには負けるわけない！僕を見逃したこと、後悔させてやる・・・必ず・・・必ずだ！次は油断なんてしない！本気でお前をたたきつぶしてやる！！リョウジ！！」

恨みのこもった絶叫を残して素良の姿が消えた

「・・・エクシーズに魂を売った裏切り者、か」

決闘の余波によりガレキが散乱したその場を後にする

「それで結構、俺は、ただの脱走兵だ」

トキノ

工作室

「うーん・・・これは1回ちゃんとメンテナンスしなきゃだめだねー」
そう言つてリョウジの盤を分解し始める歯車を模したモノクルを
付けた白衣の少女は葉緑 マオ

素良との決闘の後、盤の調子がおかしい事に気づいたリョウジはレ
ジスタンスのメカニックである彼女の元を訪れていた

工作室の隅には黒咲が座っている、偶然彼も盤のメンテナンスで
来ていた

「どのくらいかかる?」

「うーんそうだね、修理に1時間つて所かなー、でも・・・」

困つたように首をひねる

何か問題があるのか訪ねた

「いやー、修理自体はすぐに終わるんだけど、またすぐに壊れちゃうか
らさー」

モンスターを召喚する時、エネルギーが発せられる

エクシーズを召喚するならエクシーズの、融合ならば融合の召喚エ
ネルギーが発生する

エクシーズ次元の盤は融合の召喚エネルギーを想定しておらず、素
良戦でのエクシーズと融合の連続展開の負荷に耐えきれなかったの
が故障の原因だった

・・・融合召喚の話をした時に部屋の隅からあからさまに不機嫌な
オーラがしたが無視する

「・・・だから、これをそのまま修理してもすぐにまた故障しちゃうん
だよねー」

「なるほど」

「だからちよつとばかしデータ取りたいから決闘して欲しいんだけ
ど・・・」

コンコンと扉がノックされる

マオが入室を促すと紙袋を持った少女が入ってきた

「マオちゃん、ジャンクパーツを・・・あ・・・どうも」

シヨートひじりの少女、聖トキノはリヨウジを見るなり一歩引いて会釈をした

リヨウジからしたら、もう警戒されるのは慣れたもので、特に思うことは無かった

「トキノっちーどしたの？」

「あ、これ、マオちゃんなら使えるかと思って」

マオに紙袋を手渡す

中身は壊れた機械から取り出したと思われるパーツが入っていた

「おおー、助かるよー」

「丁度いい」

ふいに今まで沈黙を保っていた黒咲が口を開いた

「脱走兵が決闘する相手を探しているそうだ、トキノ、お前が決闘しろ」

「えっ!?わ、私が!？」

.....

屋上

マオから渡された盤を付ける、灰色のそれはデータをとる為のテスト用

ソリッドビジョンもただのホログラム、決闘のデータを取るためだけの盤だ

「それじゃあ、始めるか」

盤を起動させる、若干重いような気もするが決闘に支障はない

決闘で融合のデータを取り、それを盤に組み込む

本当なら融合次元の盤があれば一番楽だったが、あれは次元転送で消えてしまったため仕方ない

ともかくデータが取れば問題はないが・・・

「は・・・はい・・・よろしくです」

正直彼女を相手にするのは気が引ける

実力的には問題ないらしいが、今まで見てきたどの戦士とも違
う・・・というより、戦士としてあるべき雰囲気が無い

「・・・まあ、衝撃の発生しないテストだから気楽にやろうか」

「はっ、はいー!」

薄い黄色の盤を構えるトキノ

・・・その手は小さく震えていた

「決闘!」

トキノ LP4000

リヨウジ LP4000

「わ、私の先行!私は聖刻龍ドラゴンゲイヴを召喚!カードを一枚伏
せてターンエンドです」

聖刻龍ドラゴンゲイヴ 攻1800

力強い四肢を持つドラゴンが降り立った

なかなかの攻撃力に伏せカード、悪くない布陣だが・・・

「俺ターン、ドロー」

リヨウジ 手札5↓6

「俺は融合を発動、手札のサイバードラゴン2体を融合、融合召喚レベ
ル8サイバーツインドラゴン」

サイバーツインドラゴン 攻2800

「融・・・合・・・」

怯えた顔で後ずさるトキノ

「やっぱりか・・・バトル、サイバーツインドラゴンでドラゴンゲイヴ
を攻撃、エボリューションツインバースト」

「っ!リバースカード!抹殺の聖刻印!聖刻モンスターをリリースし
て相手モンスターを除外!!」

罨によりドラゴンゲイヴの姿がエネルギー弾へと変わり、サイバー
ツインに襲いかかる

しかしそれは二つの首がそれぞれに分裂することで、直撃を避けた
「え?」

「速攻魔法、融合解除を発動した、これによりサイバーツインの融合は
解かれ、2体のサイバードラゴンへと戻った」

サイバードラゴン 攻2100

サイバードラゴン 攻2100

「そしてバトル中の特殊召喚のため、このまま攻撃に参加できる」

「っ！リリースされたドラゴンゲイヴの効果！聖刻通常モンスターを特殊召喚！デッキから神龍の聖刻印を特殊召喚！」

神龍の聖刻印 守0

巨大な球体状のモンスターがトキノの場に現れる

しかしそのステータスは0、その場しのぎにしかない

「・・・サイバードラゴンで神龍の聖刻印、及びプレイヤーを攻撃、エボリューションバースト2連打」

「きゃっ！」

トキノ LP4000↓1900

2体のモンスターからの攻撃でモンスターとライフの半分を失う

「うう・・・でも、これでバトルは・・・」

「速攻魔法、瞬間融合を発動、場のモンスターで融合を行う、再び融合せよサイバーツインドラゴン」

サイバーツインドラゴン 攻2800

「あ・・・あ・・・」

「・・・サイバーツインドラゴンで攻撃、エボリューションツインバースト」

.....

決闘は終了したが、トキノはその場から動かず、座り込んでしまった

「・・・聖、お前」

「トキノ！なんだ今の不拔けた決闘は！」

声をかけようとしたが、黒咲に割り込まれた

「えっ・・・でも・・・」

「お前の本気はそんなものじゃないはずだ！思い出せ！本当のお前を！」

腕を引っ張って立たせる

「お前は俺やユートに並ぶ実力者だ！お前が戦線に復帰してくれさえすれば戦況も変わる！アカデミアを倒せるんだ！」

「っ!?アカデミアと・・・戦う」

震える身体を怒りと勘違いしたのか黒咲は止まらない

「そうだ！思い出せ！アカデミアにされたことを！アカデミアへの怒りをー！」

「やめろ黒咲」

黒咲の腕をはらい間に割り込む

「彼女は戦えるような状態じゃない、俺と決闘させても無駄だ」

黒咲は融合への怒りを思い出せばまた戦えるようになると思っていたようだが、怒りよりも恐れが強い彼女にそれは愚策だ

「私・・・は・・・」

「はーい、そこまで」

睨み合う俺と黒咲のあいだにマオが割り込む

「融合のデータはとれたから、もう戻るよー、あ、黒咲は来ないでね、盤はメンテ終わったらアレンあたりに持ってかせるから」

マオは俺達2人を引っ張るようにその場をあとにした

トキノ (2)

工作室に戻ってきてすぐにモニターに記録用の盤を接続してなにかを打ち込みはじめるマオ

「よし、融合の召喚エネルギーのデータは取れたからこれを前提としたプログラムを組めば…」

すごい勢いで文字が打ち込まれていく

レジスタンスのメカニック担当の名は伊達ではないということか

「…葉繰、ちよつと聞きたいんだが」

「ん？トキノつちのこと？」

モニターから視線を外さずに答える、予想はしていたということだろう

トキノは戻ってくるなり一人になりたいとどこかに消えてしまった

「ああ」

「何が知りたいの？血液型？好きな食べ物？スリーサイズ？トキノつちって意外と出るとこ出てるんだよ？」

「……」

「ま、冗談はさておき……これでよし」と

キリのいいところまで終わらせたのかイスを回して向き直る

ヘラヘラ笑っていた表情を一変させ鋭い目付きで問いかける

「その前に1つ聞かせろ、アカデミアの脱走兵、なんで敵をカード化しない？」

「…何でそれを」

その雰囲気の変化に驚くことは無い、外面で笑う奴は内に何かを隠してる奴だと言うのは分かっていたからだ

「あんたを信用している人間ばかりだと思うな、それに私はメカニックだ、盤を見れば持ち主にどういう扱いを受けたか、持ち主が何をしたのかなんてすぐにわかる」

カンカンと使っていた盤を指で叩く

「あんたは元々向こう側、まさかかつての仲間がカード化出来ない」と

か言うの?」

「…あいつらの事を仲間だと思ったことは無い」

もともと仲間なんていなかった

表向きでニコニコしながら腹を探り合う

信用したら裏切られる

スキをみせればやられる

手を差し伸べれば利用される

ただの蹴落とし合うだけ

それがアカデミアだ

「俺は…人をカードになんかしたくない…そう思っただけだ」

それが正しいのか間違っているのか、当時は分からなかったが、本当にそれだけ

幾度もカード化するように迫られてもそれだけは出来なかった

「へえ…あんたもなんだ」

「あんた…も?」

「トキノも同じことを言った…」

懐かしむように語り出す

「アカデミアに襲われて、レジスタンスが出来て、街のみんなを守るために戦った…トキノもその時までには一緒に戦ってた…アカデミアの盤を解析して、カード化出来るようになって、さあこれからだっ!…ってなって…」

悔しそうに歯を噛み締める

「私達はバカだった…トキノは強いから大丈夫だって勝手に勘違いして、戦いを押し付けて…トキノは…誰よりも優しかったのに…気づけなかった…震えながら戦ってたのに…皆を守るために無理して戦ってたのに…あの日、アカデミアを倒してもあんたみたいに見送るだけのトキノに『なんでカードにしない!』って言う奴がいて…私も同じこと思ってた…そしたら…『人をカードになんかしたくないっ!』って…私達は間違いに気づくのが遅すぎた…!」

後悔から手で顔を覆う

「…そうか」

そう答える、戦えない兵士など戦場では役に立たない、それどころか足でまといでしかないと切り捨てることは簡単だ

だが：彼女は兵士じゃない、それを理解して何も言えない

「その日から：トキノの顔からは笑顔が消えた：私達の前では笑ってみせるけど：あんなの：本当の笑顔じゃない：」

ただ心配をかけないようにと無理矢理に笑って、それがヘタで、痛々しくて

でも、そうさせてしまったのは他でもない自分達だから何も言えなくて

「あんななら：もしかしたら：って」

エクシーズ次元の人間じゃトキノを笑顔にすることは出来ない気をつかってトキノは無理に笑おうとするから

でも部外者のリョウジならそんなことはないかもしれない、そう思っただけを許可した

でも、結局怖がらせてしまっただけ

それどころか、黒咲のせいで悪化したかもしれない

「……盤の調整が終わるまでどのくらいかかる？」

「……そうだよ、元々あんなには関係ない話だもんね：データの更新とか全体の調整なんか含めて2時間ってとこかな」

トキノの事ではなく盤の事を聞くリョウジに軽い失望を覚える

でもそれはお門違い、勝手に期待して勝手に裏切られたと思っただけ

彼は元から言っていたではないか、ただの協力者で、仲間ではないと、ただ同じ敵を相手にしているだけの相手に勝手にそんなことを求めるのは違う

彼は戦うために盤の修理を頼みに来た

なら私は協力者として、メカニックとしての仕事を全うする

「そうか、それから：」

なんだ？用が済んだのなら早く出ていけ

早く作業に戻らせてくれ、キーボードに向かっているあいだはそれ

に集中出来る

…トキノへの罪悪感もその間だけは忘れられる

「あいつが…聖がどこにいるか分かるか？」

……

……学校近くの決闘塾

といつても昔プロ決闘者だったおじさんが場所を作って決闘を教えしてくれるだけで、塾と言うよりはいつでも空いてる近所のおじさんの家みたいな所

1人になりたい時はここに来る

この辺もアカデミアに襲われて建物は崩れちゃったけどここは残った

でもおじさんは…

「……っ！」

頭を振って嫌なことを振り払う

ここで決闘を教えて貰った

友達もいっぱい出来た

今でも目をつぶれば思い出せる

『バトルっ！神竜ラグナロクでユート君の終末の騎士を攻撃っ！』

『また負けた……トキノ！もう1回頼む！』

『いや、次は俺の番だ、リベンジしたいからな』

『次は隼君とだね！負けないから！』

「あの頃は楽しかったな…」

ソリッドビジョンも無いテーブルデュエル

覚えてたての決闘を毎日日が暮れるまでやって

みんなプロ決闘者になるなんて夢を語って

「……でも」

体育座りで目を伏せる

そんな日々はもう戻ってこない事は分かっている

『どうしてカードにしない』

『強いのになんで戦おうとしない』

『臆病者』

『戦え』

耳を塞いでも聴こえてくる

うるさいと叫びたかった

勝手な事言わないでと泣きたかった

でも、皆が困っている時に勝手なことしてるのは私なんだ

私が戦わなきゃいけないかった

私は強かつたんだから

私が…私が…

「無理だよ…」

戦う？なんで私が…？

負けたらカードにされるんだよ？

怖い…体が震えて動かなくなる…

…？声が聞こえる

「聖？ここに居るのか？」

それが見知った人の声だったなら隠れてやり過ぎそうかと思った

でもこの声は最近レジスタンスに協力してくれてるアカデミアの

人

私なんかとは違う…戦う人

その人がなんで私なんかを探してるんだろう？

涙を拭って立ち上がって出迎える

「は、はい…なにか？」

「ああ、よかった、探してたんだ」

探してた？…なんで？

「ちよつと頼みがあつてな」

頼み事？…この人も言うんだろうか？

戦えと、カードにしろと…

「決闘してくれないか？」

「…え？…さつきやりましたよね…？」

「いや、…ちよつとデッキの調整とかエクシーズの練習とかしたいか

ら付き合ってほしいんだ」

「…でも」

怖い、そう言いかけて

「まだ盤の修理が終わってないから、テーブルデュエルしか出来ないんだが…」

「…：…それなら」

私はその頼みを引き受けた

………

「融合召喚、サイバーツインドラゴン」

「エクシーズ召喚、聖刻龍王アトウムス」

………

「アトウムスを素材にオーバーレイ、ランクアップエクシーズチェンジ、迅雷の騎士ガイアドラグーン」

「ら、ランクアップ…？」

「あつ…ランクアップって言うのは…」

………

「エクシーズ召喚！サイバードラゴンノヴァー！」

「エクシーズ召喚！聖刻真龍エネアード！」

………

「エネアードでダイレクトアタック！」

「…ぐぐぐ…負けたっ！」

「やった！勝ったっ！」

「くっ、もう1回だっ！」

………

「サイバーエンドで攻撃！ダメージは貫通だ！」

「そ、そんな能力が…も、もう1回っ！」

………

「なーおい、盤渡さなくていいのかよ？」

「あんたは黙ってなさい」

その様子をこつそり覗いていたマオとアレン
盤の修理が終わり、リヨウジとトキノがどうなったかが心配になっ
て見に来ていた

アレンは途中で拾った

「…よかったね、トキノ」

本人は気づいてないだろうがトキノは今笑ってる

決闘を覚えたての頃みたいに無邪気に

そしてそれは、トキノだけじゃなかった

「…あいつもあんな顔するんだな」

アレンはレジスタンスの中で最初にリヨウジと接触している

それ以来リヨウジのことは警戒するにしろ信じるにしろそれなり

に長く見てきた

だからこそ訓練された決闘戦士のイメージしかなかったリヨウジ
の笑った顔に少し驚いていた

今決闘が終わったようだ

トキノは小さくピョンピョン跳ねるように喜び

リヨウジは悔しそうに、でも楽しそうに空を仰いだ

どちらも決闘を心から楽しんでいる

それこそ、ソリッドビジョンがなくて決闘内容が分からなくても二
人の楽しんでる姿を見ているだけで嬉しくなれるくらい

結局二人の決闘は日が暮れて夜飯の時間が来るギリギリまで何回
も行われた

トキノ (3)

「ガイアドラグリーンでサイバードラゴンを攻撃！」

「……くっ、また負けた……」

リヨウジとトキノのテーブルデュエルは今日も行われていた

ライフ計算モードになっている盤を操作するリヨウジ

小気味よい効果音とともにライフがゼロになった

「やったー！三連勝！」

「くっ……もう一回……」

最初の頃こそ五分五分だったものの次第に調子を取り戻してきたトキノは元々の実力を発揮しはじめ、勝率は7:3でトキノ優勢だった

「つと……すまない、そろそろ時間だ」

「あ……そうだよね」

しかしその楽しい時間は長くは続かない

レジスタンスは常に交代で見回りを行い、アカデミアを発見した場合すぐに行動できるようにシフトが組まれている

リヨウジはその合間の休憩時間を利用してここに訪れていた

「…ねえ、リヨウジ君」

「どうした？」

「……いつまで続くのかな？」

戦地へ向かおうとするリヨウジを呼び止め、問いかける

「…分からない」

リヨウジはそう答えるしかなかった

ここですぐに終わると言えるほど楽観的ではない

このままエクシード次元に来るアカデミア兵を撃退し続けている戦争は終わらない

かといって直接乗り込もうにもレジスタンスにはその手段がない

「そう…だよね、ごめんね、呼び止めちゃって」

「…すまない」

その謝罪は何に対してだったのだろうか

戦争を止められない己の無力さか
それとも気の利いたことも言えないことに対してか
ただ、彼女の寂しそうな顔だけが深く印象に残った

.....

胸のモヤモヤがずっと消えない
今までこんなことは無かった

「.....ジ」

どう答えればよかったのだろうか

『すぐに終わる』...そんな無責任なことは言えない

『まだ続く』...もつと駄目な気がする

「...ヨウジ...」

いやそもそもなぜこんなことを続けている？

彼女は確かに実力はある、だが戦力としては役に立たない、関わったところでなんの得にもならない、ならばなんでわざわざ時間を割いて.....

「.....リョウジ！」

「うおっと！」

アレンの大声で思考が中断される

「まったく、見回り中になにボンヤリしてんだよ」

「すまん、考え事してた」

「ま、今日はアカデミアの連中も休みみてえだけどな」

アカデミアの侵攻には波がある

一気に攻めてくる時は何十人と送り込んでくるがそうでない時は
残党刈りと称して数名がうろついているだけの時もある

「ん？...これは？」

ふとガレキの中から何か光るものを見つけて拾い上げる

「メモリーカード...か...？」

「でもだいたいボロいな」

雨風に晒されてしばらくたっているのだろう

試しにと盤に差し込むが反応がない

「これがアカデミアの連中のデータって可能性は？」

「可能性は低いだろうな……まあ、この後葉繰の所に持っていくか」
元々行く予定もあった事だしとポケットに入れた

……

「葉繰、ちよつといいか？」

ガラガラと音をたてて工作室の扉を開く

「あつーリョウジだ！リョージー！」

ピシヤンと音をたてて扉を閉じる

葉繰はあんなテンション高い奴だったか？と首をかしげていると
「ちよつとー！ー！なんで閉めるのさー!？」

ガシヤーン！と音をたてて扉が開かれる、窓にヒビが入った

「いや……どうした……？」

「んー？なにがー？」

何があったのかと室内を見渡し……原因を見つける

「……酔ってるのか」

エナジードリンクの缶に混ざっている酒の缶が見えた

なぜこの次元の酒の缶はエナジードリンクとそっくりな外見なの
だろうか……と次元ギャップを感じてから

「……出直す」

逃げ出した

「大丈夫大丈夫ー！例の件で来たんだよね？」

しかしまわりこまれてしまった！

「……じゃあ、次元転移の件はどうなっている？」

早く要件を済ませよう、そしてウザ絡みされないうちにここから立ち去ろう、そう心に決める

「昨日から徹夜で解析してたんだけどまったく分かんない！お手上げ！」

なるほど、徹夜のテンション＋アルコールでこのハイテンションな訳かと納得する

先日アカデミア兵を撃退した際にアカデミア製の決闘盤をいくつ

か確保出来た

それを解析すれば次元転移も可能になる……そう思っていたのだが

「なに自壊装置って！敵に奪われた時の対策って訳!?悔しいくらい綺麗に壊れてるから修復も出来ないしっ!」

ばしんばしんと机を叩きながら嘆く

アカデミアの盤には自壊装置が組み込まれており、敗北後の強制送還が行われなかった時はオートで自壊するようになっていた

カード化の機構は何とか復元してレジスタンスの盤に組み込んだらしいが次元転移はより嚴重に壊されているらしくお手上げ状態とのことだ

「……まさかとは思うが……やけ酒じゃないよな?」

「そんなことどーでもいいじゃん!ん?なにそれー?」

持っていたメモリーカードに目ざとく反応し取り上げた

「見回り中に拾ったんだがどうも壊れているようだな」

「んー?この程度ならちよちよいのちよいよー!」

「ほいやー!」という謎の掛け声とともにメモリーカードを修復してパソコンに挿入する

「ほい!これでオツケー!」

「早いな……」

「ま、この程度朝飯前よ!」

むふー!と胸を張るマオ

それに感謝しながらもウザ絡みされないようにスルーする

「中は…映像データか?」

モニターには高校生程度の少年同士が向き合って決闘している映像が映し出された

「んー?あー、これ去年のスピード校デュエル大会じゃん」

画面の中での決闘が終わる

よく見れば片方はリョウジのよく知る人物だった

「……黒咲?」

すぐに気づくことが出来なかったのも無理はない

リョウジの知る黒咲は戦争で変わってしまった後だけ
純粹にプロ決闘者を目指していた頃の黒咲の事は知る由もなかつ
た

「お、これは丁度いい、一番いいところだー」

三位決定戦の決闘が終わり決勝を戦う決闘者が現れる
ユートとトキノだった

「……」

決勝の記録映像を見る

光り輝く身体を持つドラゴン達と暗い空気を纏った戦士達の戦い
強大な力を持つドラゴンが戦士達を蹂躪するも決して倒れない戦
士達はドラゴンへと食らいつく

やがて戦士達の場合に現れた黒いドラゴン：ダークリベリオンエク
シーズドラゴンが敵のドラゴンを打ち倒す

しかしトキノはその状況に焦ること無くエースモンスター、聖刻神
龍エネアードを繰り出して応戦する

魔法、畏、モンスター効果をフルに生かしてダークリベリオンとエ
ネアードは何度も激突する

幾度も繰り返された黒と白のドラゴンの戦いはやがて黒のドラゴ
ンに軍配が上がった

「……」

決闘が終わり決闘場で握手をする二人それは融合次元では考えら
れない光景だった

「……楽しそうだな」

楽しい決闘が出来る、そんな彼らが羨ましかった

観客の歓声に照れくさそうに笑いながら応えるトキノの姿を見て
そう思った

「トキノはね……よく笑う子だったんだー……」

マオは語り始める……それは誰かに向けてという感じではなかった
「決闘に勝っても負けても楽しそうに笑って……そんなトキノが皆大
好きだった……」

悔いるように、懺悔するように言葉を絞り出す

「皆の盤にカード化の機能を付けたのは私なんだ…アカデミアの盤を解析して…アカデミアが憎かった…でも…それでトキノを傷つけた…」

「リヨウジはそれを黙って聞いていた

「…脱走兵とトキノの決闘…楽しそうだったなあ…いいなあ…また…あんなふうに…皆で…笑って…決闘を…」

「…葉繰？」

「不意に動かなくなつたそちらに目を向ける

「…すう…」

「…寝てるだけか」

「徹夜の疲れで限界だったのだろう

「…楽しそう…か」

「なんで戦術的に無意味な交流を続けていたのかが分かった、…純粋に楽しかったんだ、彼女との決闘が

「楽しむために決闘をする…か、融合次元だったらありえない考え方だけだ」

「笑って決闘が出来る世界…だったんだな…ここは…」

「皆笑ってた

「皆幸せそうだった

「…取り戻さなくちゃ…だよな」

「俺には人をカードにする覚悟は出来そうにない

「けど、俺は見たいんだ

「みんなが笑って決闘ができる世界を

「トキノがまた笑って決闘が出来る世界を

「そのために…俺は戦う」

「そう心に誓つた矢先だった

「あの事件が起こつたのは

襲撃

煌々と輝く満月の夜、普段であれば静寂に包まれているハートランドは喧騒に包まれていた

「くっ…どういうことだ…!」

サイバードラゴンを繰り出してアカデミア兵と交戦する
始まりはほんの数分前

これまで昼間にしか攻め込んでこなかったアカデミアが突如として夜中に攻め込んだ

それに気づいた見張りのレジスタンスからの連絡を受け、今まで無かった突然のことにレジスタンス本部は大混乱

元々こういつた訓練を受けていたリョウジが先行してアカデミアと交戦している、数分も経てばレジスタンスも落ち着いて来るだろう
「カードを伏せてターンエンド、…おい!なぜこんな時間に攻めてきた!奇襲でもしなきゃ勝てない腰抜けに落ちたか!」

「俺のターン!ドロー!抜かせ!脱走兵とくたばり損ない共を相手にそんなことあるか!古代の機械猟犬を召喚!」

決闘をしながら微発するようにして情報を探る、普段であればやらないことをしている以上この襲撃にはなんらかの理由があるはずだ
「俺のターン!ドロー!だったら何故こんな卑怯な真似をしている!」

「俺が知るか!こっちだつて迷惑してるんだよ!」

こいつは情報を持ってない…ハズレか

「そうか、なら喜べ、もう帰れるぞ…サイバーツイン!」

双頭の機械龍が敵を吹き飛ばして融合次元に送り返す

「これで3人…あつちか!」

戦闘音が聞こえる、レジスタンスとアカデミアの戦闘が始まったよ
うだ

「急いでそっちの援護へ向かおうとし…」

「……っ!?!」

強烈な寒気を覚えて立ち止まる

暗い通路の先から一人歩いてきている

「…あれ？今回の作戦は黄服以上の参加のはずだけど？」

リヨウジの赤い制服を見るなりそう声をかけてきたのは特注の紫のアカデミア制服を着た少年

「……ユーリ」

「ん？そうだけど？」

思わず口に出た言葉を肯定する

リヨウジはユーリのことを知っていた、いや、アカデミアに所属している者でユーリのことを知らない者はいない

関わってはいけない

喧嘩を売ってはいけない

関われば笑いながらカードにされる

喧嘩を売るなんてものは自殺と同じだ

そんな存在が目の前にいる

決闘盤を構え、いつでも対応できるように全神経を研ぎ澄ます

するとユーリは「ああ」と納得して手を叩く

「君が件のレジスタンスに寝返った脱走兵か、なるほどなるほど」

興味深げにリヨウジの顔を見る、その姿に警戒している様子は全く無い

敵であると理解していないのか、それとも、警戒するまでもないと思っているのか

「あっそうだ、ってことはこの次元のことも詳しいよね？」

ユーリはリヨウジの事など知らない、にも関わらず親しげに話しかけ続ける

「プロフェッサーからこの子を連れてこいって言われてるんだけど……知らないかな？」

「っ!？」

ユーリが懐から取り出した写真にはリヨウジもよく知る人物……

黒咲瑠璃が映っていた

「…さあな、それ、セレナじゃないのか？」

「あつ、やっぱりそう思うよね？僕も最初は見間違えたよ、よく似てる

よねー」

ケラケラと親しい友人と話すように笑うユーリ

「でも…」

その顔がニタア…と歪んで

「君、さつき表情が変わったよね？…何か知ってるんでしょ」

獲物を見つけたとばかりに獰猛な笑みを浮かべる

「……っ！」

ぞわり、と産毛が逆立つ

リヨウジは融合次元の頃よりも確かに強くなった

だが、目の前の圧倒的な力に膝を折りそうになる…それでも

「…誰が話すか」

リヨウジは立ち向かう、ユーリを睨みつけて盤を構える

「あっそ」

それを興味なさげに切り捨てて決闘盤を構え……

「リヨウジさん!!」

向かい合った向こう側、ユーリの後ろから来た者がリヨウジの名を

呼んだ

「っ!?!」

レジスタンスからの救援だった…が

今の状況では最悪だった

「来るな!!」

それに気づいたユーリが不機嫌そうに振り返り……「あは」と上機

嫌に笑う

「見いつけたあ」

「コイツの狙いはお前だ！逃げる瑠璃!!」

「何言って…ヒツ!?!」

一瞬リヨウジの言葉を理解出来なかった瑠璃だが、ユーリの笑みを
見て本能的な恐怖から足が止まり悲鳴が漏れる

「逃げるー！」

「っ！…っ！めんなさいー！」

2度目の声で足が動き、見捨てる形になったことの謝罪とともに反対側に走り出す

「ああ、彼女瑠璃って言うんだ…ありがとね」

それを追う…と言うにはあまりにもゆっくりとした動きで歩き出すユーリ…その前にリョウジが回り込む

「…なんのつもり？もう君に用はないんだけど？」

「…行かせない…！」

アカデミアが何のために瑠璃を求めているのかは分からない、けど、渡すわけにはいかない

「…なら、君を倒してから行くことにするよ」

「何をしているユーリ」

苛立たしげに盤を構えたユーリに話しかける人影がいた

「っ…オベリススクフォース…！」

エリート中のエリートを示す白い仮面を付けたアカデミア兵が3人、そのうちのリーダー格と思しき男がユーリに話しかける

「貴様の仕事は例の少女の確保だろう」

「ああ、見つけたんだけど、これが邪魔でさ？」

指刺さした先、赤い制服を見て忌々しげに表情を歪める

「…状況は把握した、ユーリ、貴様は目標の確保に迎え、こいつは私達が片づけよう」

「えー？でもさー」

「目標の確保はプロフェッサーからの命令だろう？」

プロフェッサーからの命令…と言われればユーリも我儘を通す気はしなかった

「…はいはい、分かりましたよ…ばいばーい」

「っ!？」

紫色の閃光に思わず目を腕で隠す、再びユーリのいた場所が見える頃には…ユーリの姿が無くなっていた

瑠璃に危険が迫っている、しかし動くことは出来ない、リョウジの危機もまだ消えてはいないのだから

「さて、言い残すことはあるか？好きなやられ方はあるか？ビートで

もバーンでも、可能な限り叶えてやろう」

生真面目そうな声でそう言うオベリスクフオース、後ろに控えていた二人も出てきて盤を構える、アカデミアでは作戦中三人一組での行動が基本だ

これが黄服や青服：通常のアカデミア兵ならばさしたる問題はなかった、だが相手はオベリスクフオース、プロフェツサー直属のエンジニア部隊、一筋縄では行かない

あちこちで火の手が上がり、戦闘音も派手なものになっている……今は瑠璃がユーリから逃げ切ってくれるのを祈るしかない……

「どっちも断らせてもらう、お前達に構っている暇はない……押し通らせてもらう！」

「脱走兵^ぐのときがよく吠える」

オベリスクフオース三人とリョウジは向かい合い、決闘盤を起動させて叫ぶ

「『決闘！』」

オベリスクフオース

リヨウジ LP4000

V S

オベリスクフオースA LP4000

V S

オベリスクフオースB LP4000

V S

オベリスクフオースC LP4000

バトルロワイヤルモードが始まった決闘

当然ながらオベリスクフオース同士が攻撃し合う事などないので
実質1VS3な訳だが人数差のある決闘などリヨウジにとっては慣
れたもの

「俺の先行！サイバーヴァアリーを召喚！さらに機械複製術を発動！こ
い！3体のサイバーヴァアリー！」

サイバーヴァアリー 攻0

サイバーヴァアリー 守0

サイバーヴァアリー 守0

3対1では自分のターンが来る前にライフが消し飛ぶなど珍しく
ない、故に先行を取り守りを固める

普段であれば二ターン目を奪って強引にワンターンキルを狙った
所だが、オベリスクフオースが相手ではさすがに分が悪い

「さらに俺は永続魔法、未来融合フューチャーフュージョンを発動！
発動後1回目のスタンバイフェイズに融合素材を墓地に送り、2回目
のスタンバイフェイズにその融合モンスターを融合召喚する！」

リヨウジの背後にビルのような建造物が建つ、2ターン後に中から
融合モンスターが出てくるのだろうか

「カードを2枚伏せてターンエンド」

「俺のターン、ドロロー！」

オベリスクフオースA 手札6枚

先程まで後ろに控えていたオベリスクフオースが二ターン目を取

る

「俺は古代の機械猟犬を召喚！古代の機械猟犬は1ターンに一度相手プレイヤーに600のダメージを与える、喰らえ！ハウンドフレイム！」

「くっ！」

リヨウジ LP4000↓3400

猟犬の口から炎が吐き出されてリヨウジに襲いかかる、リヨウジはもはや慣れてしまった熱さに顔をしかめる

「さらに俺は融合を発動！場と手札の古代の機械猟犬を2体融合！古の魂受け継ぎし機械仕掛けの猟犬たちよ！群れ成して混じり合い、新たな力と共に生まれ変わらん！融合召喚！現れろ！レベル5！古代の機械双頭猟犬！」

—古代の機械双頭猟犬《アンティークギア・ダブルバイトハウンドドッグ》 攻1400

二つの首を持つ猟犬がオベリスクフォースの場に降り立ち、3体の機械龍を威嚇する

「さらに俺は永続魔法古代の破壊機械アンティーク・ハルマゲドンギアを発動！このカードが場にあり限り自分のモンスターを破壊されたプレイヤーはその攻撃力分のダメージを受ける、カードを一枚伏せてターンエンド！」

「…攻撃してこないか」

一人目のオベリスクフォースは1体の融合モンスターと一枚の永続魔法、そして一枚の伏せカードだけでターンを終える

「俺のターン、ドロォー！」

オベリスクフォースB 手札6枚

二人目のオベリスクフォースにターンが移る

「俺も古代の機械猟犬を召喚！効果発動！ハウンドフレイム！」

「やつぱりか…うぐっ」

リヨウジ LP3400↓2800

「更に俺は魔法カード、古代の機械双造アンティークギア・ダブルイミテートを発動！自分及び相手の墓地から古代の機械モンスターを2体効果を無効にして俺の場に特殊召喚する、俺はこいつの墓地の古代の機械猟犬を2体特殊召喚！」

古代の機械猟犬 攻1000

古代の機械猟犬 攻1000 (効果無効) × 2

「そして融合を発動し、場の3体の古代の機械猟犬を融合！古の魂受け継ぎし機械仕掛けの猟犬たちよ！群れ成して混じり合い、新たな力と共に生まれ変わらん！融合召喚！現れる！レベル7！古代の機械三頭猟犬！」

— 古代の機械三頭猟犬 《アンテイクギア・トリプルバイトハウンドドッグ》 攻1800

「俺はこのままバトルフェイズに移行する！」

三つの頭が三体の機械龍に狙いを定める、するとその時既にターンを終えていたオベリスクフォースに動きがあった

「俺はここで伏せカードオープン！ディフェンダーズクロス！場の守備モンスターを攻撃表示に変更させてその効果を無効にする！」

「なにっ!？」

守備表示で待機していたサイバークヴァリー2体が攻撃表示になりその効果を失う

サイバークヴァリー 攻0

サイバークヴァリー 攻0 (効果無効) × 2

「そして古代の機械三頭猟犬は相手モンスターに3回攻撃することが出来る！」

「ちっ！罨発動！ダメージダイエット！このターン受けるすべてのダメージを半分にする！」

古代の機械には攻撃時に相手の魔法罨の発動を封じる効果がある故に攻撃宣言される前に発動する必要がある

「行け！古代の機械三頭猟犬で効果が無効になっている奴から順に攻撃だ！」

一体目のサイバークヴァリーは体当たりで破壊され

「ぐっ！」

二体目のサイバークヴァリーが顎で噛み砕かれ

「がっ！」

三体目にはその爪が襲いかかり

「…っ、サイバーヴァリーの効果！このカードを除外して一枚ドロ
しバトルを終了する！」

事件の狭間に消えてその爪は空振りに終わる

リヨウジ LP2800↓1900↓1000

ダメージダイエットの効果でダメージを半減して何とか耐え凌ぐ

「ちっ、しぶとい…：ターンエンド」

「はあ…私のターンだな、ドロ」

オベリスクフォースC 手札6枚

3人目…リーダー格のオベリスクフォースはため息とともにター
ンを開始する

「やれやれ、先の二人で決まると思っていたのだが、思いのほかしぶ
い…：古代の機械猟犬を召喚！ハウンドフレイム！」

三度目になる火球がリヨウジに襲いかかり

「リバースカードオープン！ホーリーライフバリアー！手札を一枚捨
てこのターン相手から受けるダメージを0にする！」

リヨウジを覆ったバリアが火球をかき消す

「ちっ、くたばり損ないが…私は古代の機械双造を発動、墓地から古代
の機械猟犬を2体特殊召喚」

オベリスクフォースAの墓地から猟犬を呼び出して場に並べる

古代の機械両足 攻1000

古代の機械猟犬 攻1000（効果無効）×2

「また三頭猟犬か…」

「残念、ハズレだ、私はライフを500支払い二重融合を発動、その効
果で二回の融合を行う、まず1回目！」

場の3体の猟犬が混じりあい一つになる

「現れるレベル7…古代の機械三頭猟犬！さらに三頭猟犬と手札の猟
犬を融合！古の魂受け継ぎし機械仕掛けの猟犬たちよ！群れ成して
混じり合い、究極の力と共に生まれ変わらん！融合召喚！現れる！レ
ベル9！古代の機械究極猟犬！」

—古代の機械究極猟犬《アンティークギア・アルティメットハウ
ンドッグ》 攻2800

これまでの2体とは違い禍々しい姿となった融合モンスターが最後のオベリスクフオースの場に降り立つ

「古代の機械究極猟犬は融合召喚に成功した時、相手のLPを半分にするーこれはダメージでは無い！」

「ぐああっ！」

究極猟犬の咆哮がホーリーライフバリアーをすり抜けてリヨウジのライフをさらに削り取る

リヨウジ LP1000↓500

「これで貴様のライフは風前の灯火、早くサレンダーしろ、裏切り者の貴様と違い私達は暇ではないからな」

「……断る……まだ俺のライフは残っている……」

「やれやれ、この状況でまだ勝てるつもりでいるのか……ならば無駄にあがいて見せろ、ターンエンド」

オベリスクフオースA 手札1枚 LP4000

古代の機械双頭猟犬

古代の破滅機械

オベリスクフオースB 手札3枚 LP4000

古代の機械三頭猟犬

オベリスクフオースC 手札2枚 LP3500

古代の機械究極猟犬

リヨウジ 手札0枚 LP500

未来融合フューチャーフュージョン

「……はは……絶望的だな……」

改めて場の状況を見て乾いた笑いが出る

「……でも、レジスタンスはずっとこんな戦いを続けてきた」

デッキトップのカードに指をかける

「なら……この程度は絶望でもなんでも無い」

このドローですべてが決まる

「そこを退いてもらうぞ、アカデミア……！」

ピツ……と静かにカードを引き抜いた

「……未来融合フューチャーフュージョンの効果発動、発動後1回目

のスタンバイフェイズに融合素材モンスターをデッキから墓地に送る、俺はこのカード達を墓地へ送る」

サイバードラゴン?3

サイバードラゴンツヴァイ?3

プロトサイバードラゴン?3

「なっ!?9体での融合モンスターだとっ!」

「だが!所詮次のターンにならなければ出てこない!」

「貴様に次のターンなどない!」

自分たちの勝利を疑わないオベリスクフォース、それにリョウジは冷たい声で返す

「ああそうだな……俺に次のターンはない……なぜなら……」

唯一の手札、さつきドロローしたカードを発動させる

「このターンで終わらせるからだ、オーバーロードフュージョンを發動!」

リョウジの背後にそびえ立っていた建物へヒビが入る

「このカードは闇属性機械族モンスター専用の融合魔法、その融合には墓地のモンスターも使用できる!!俺は未来融合の効果で墓地に送ったモンスターと2体のサイバーヴァリーの計11体で融合!!」

「なにっ!」

「墓地で!」

「11体の融合だとっ!」

びしり、とヒビが大きくなる

「進化する機械龍よ!数多の残骸取り込みて、限界を超える力を得るがいい!!」

建物がガラガラと崩れ落ち、その姿を現す

「融合召喚!レベル9、キメラテックオーバードラゴン!!」

11の首を持つ破壊の化身がリョウジの場に顕現し、その咆哮が空気をビリビリと震わせた

キメラテックオーバードラゴン 攻8800

「キメラテックオーバードラゴンが場に出た時、俺の場のカードはすべて墓地へ送られる」

もはや用済みとなった未来融合を墓地へ送り、場はキメラテック
オーバードラゴンのみとなる

「こっ！攻撃力8800だど!?!」

「だが！いくら攻撃力が高くとも！」

「あ、ああ！俺は古代の機械双頭猟犬の効果発動！1ターンに1度相
手の場にモンスターが召喚、特殊召喚された時！そのモンスターにギ
アアシッドカウンターを乗せる！」

双頭猟犬から歯車が飛び出してオーバードラゴンへと向かう

「そしてギアアシッドカウンターの乗ったモンスターがバトルする
時、そのモンスターを破壊する！そして古代の破滅機械の効果で貴様
はその攻撃力分のダメージを受ける！これで終わりだ！」

オベリスクフォーズ達の勝利への確信を乗せた歯車はキメラテッ
クオーバードラゴンへと飛んでいき、……その機械の身体に触れた途
端粉々に砕けて消えた

「なっ……?」

「俺は墓地のスキルプリズナーを発動した、このカードを除外するこ
とで俺の場のモンスターはこのターン相手モンスターの効果を受け
ない！」

「いつの間にそんなカードを……っ！……ホーリーライフバリアーのコ
ストか！」

「その通り」

歯車のお返しとばかりにその1の首へエネルギーを溜める

「そしてキメラテックオーバードラゴンは融合素材としたモンスター
の数まで相手モンスターを攻撃できる！」

「う、うわあああ!!」

その効果を聞き、一人は己の掲げる誇りすら忘れ逃げだそうと背を
向け

「キメラテックオーバードラゴンで古代の機械双頭猟犬を攻撃！エボ
リューションレザルトバースト!!」

その場のモンスターごとそのライフを消し飛ばされた

「ぎゃあああああっ！」

オベリスクフオースA LP4000↓0

「くっそがああああ!!」

二人目は自棄を起こして三頭猟犬に突撃させる、だが、三つ程度の頭では11の首へは遠く及ばずに捕えられ

「エボリューションレザルトバースト、第2打あ!!」

「ぐぎやあああつ!!」

捕らえた三頭猟犬を跡形もなく消し去り、ライフをゼロにする

オベリスクフオースB LP4000↓0

「エボリューションレザルト…」

「……答えろ」

究極猟犬に狙いを定めて11の口にエネルギーを溜める

最後のオベリスクフオースは自らの敗北を受け入れると悔しげに問いかける

「……それほどの力を持っていながら!なぜアカデミアを裏切った!」

エリート中のエリートである自分たちを倒すほどの実力者、それが寝返った理由が分からない

「……アカデミアは間違っている、そう気付いたからだよ」

そう答えると腕を突き出して己のモンスターに攻撃の指示を送る

「エボリューションレザルトバースト!第3打あ!!」

オベリスクフオースC LP3500↓0

覚悟

ガンっ……！とリヨウジは黒咲に胸ぐらを掴まれてレジスタンス本部の壁に叩き付けられる

「おい隼、落ち着けて！」

「やめろ！そんなことをしても！」

「いい……こいつは、俺を殴る権利がある……」

それを静止するアレンとユート、それを受け入れるリヨウジ

結局……瑠璃を守ることは出来なかった

追いかけたユートの目の前で瑠璃はユーリと共に消えてしまった

そして目的を達したアカデミアも続くようにその姿を消した……

ひよつとしたら、という淡い希望を捨てきれずに日が昇るまで皆で走り回ったが、何も見つけることは出来なかった……

「……貴様が手引きしたんだろう！協力者を偽ってレジスタンスに入り込み！瑠璃を攫う機会を伺ってたんじゃないのか！」

瑠璃は黒咲にとって唯一無二の家族、それが敵に攫われたとなれば怒り狂うのも至極普通のこと

「冷静になれ隼！仲間同士で争っている場合じゃないだろう！」

ユートはその手を引き剥がして間に割り込む

が、逆にそれが神経を逆なでしてしまった

「仲間……仲間だど!?こいつは奴らと同じアカデミアだ！俺はこいつを仲間だとは認めない！絶対に!!」

そう言うと黒咲は部屋を出ていこうとして

「……ユート、奴は瑠璃を抱えたまま消えたんだな？」

「……ああ」

「なら、……まだ取り戻せる」

「っ！どういふことだ!?!」

リヨウジのその言葉にユートだけでなく集まっていたレジスタンスにもわかにぎわめき、黒咲はその足を止める

「ユーリは……アカデミアは瑠璃を狙っていた、理由はわからないが奴らにとって瑠璃は特別な存在だという事だ、それにカードにするなら

わざわざ抱えて転移する必要も無い」

「……たしかに」

仲間を救えるかもしれない、その可能性が見えたことで少しではあるが意気消沈していた空気が軽くなる

「……ならば」

黒咲はその話を聞くと

「奪われた仲間は……瑠璃は、俺が必ず取り戻す！例え何があろうとも！アカデミアから救い出してみせる!!」

誰でもない自分に誓うようにそう宣言した

……………

被害の報告などが終わるとリョウジは工作室へ足を向けた

ガラガラ音をたてて扉を開く、中ではマオが鬼気迫る顔でキーボードを叩き続けていた

「これなら……復元プログラム……ダメか」

「……あ、リョウジ君」

そしてその隣ではトキノがジャンクパーツをより分けている

昨日の襲撃でもいくつか盤を回収出来た、そしてまた解析をした訳だが……今回も芳しくないようだ

「まだ解析中……でも今回も収穫無しになりそう」

画面から目を離さずにそう言う

やはり今回もアカデミア性盤の自壊装置はしっかりと次元転移装置を壊していたようだ

「……瑠璃は」

「知ってる、アレンがさつき報告に来てたから」

「瑠璃ちゃん……」

淡々とそう答えるマオと目を伏せるトキノ

マオは誰かを失うことに慣れてしまった

トキノはまだそれに慣れることが出来ていない

そのどちらが正しいなど言えない、どちらも正しいのだから

「…じゃあ、俺は見回りに行ってくる」

「あ…うん…いってらっしゃい…」

リヨウジは報告が不要だと分かれば踵を返して部屋を後にした

「あ……」

行かないで、そう言いかけて

「…うん…」

届きもしないのに手を伸ばして

「…いってらっしゃい」

言葉を飲み込んでその背中を見送る

このまま居なくなってしまうのではないか

これが最後の別れになってしまうのではないか

そんな不安で胸が苦しくなる

カタカタとキーボードを叩く音だけが部屋に響く

『お前は俺やユートに並ぶ実力者だ！』

ふと、言われた言葉が脳裏によぎる

『お前が戦線に復帰してくれれば戦況も変わる！』

その光景を想像する

『アカデミアを倒せるんだ！』

…手の震えが止まらなくなり

ギュツと目を閉じる

自分がカードにされるのが怖い

誰かをカードにしてしまうのが怖い

……でも……

「……マオちゃん」

「ん？…どうかした？」

マオはトキノの強い決意を含んだ言葉に作業する手を止めて振り
向く

「…お願いしたいことがあるの」

.....

「葉繰、俺に用事とは？」

「……来れば分かる、こっち」

見回りを終えたリヨウジはマオに連れられて階段を登っていく

「ほら……連れてきたよ」

そう言っつて屋上へのドアを開ける

「……聖？」

屋上にはトキノが待っていた

…普段なら付けていない薄い黄色の盤を装着して

「あのね……リヨウジ君、私……」

「…戦うつもりか？」

トキノの言いたいことを察したりリヨウジが言葉を挟む

少し面食らった様子のトキノだったが、すぐに真剣な顔に戻って頷

いた

「…うん…私も皆と一緒に戦いたい」

「……お前が戦場に出る必要は無い」

マオは黙ってその様子を見守る、それがトキノからのお願いだったからだ

「でも、このままだと……」

「お前は戦士にはなれない」

どの口が言うんだ、と内心で自嘲しながら否定するリヨウジ

「はつきり言っつてやる、お前が戦場に来ても足でまといでしかない、足を引つ張る味方は敵よりもタチが悪い」

「あんたっ！そんな言い方」

「マオちゃん！」

トキノに投げつけられる厳しい言葉へ怒ろうとしたマオだったが、それはトキノによって止められる

「……私は大丈夫だから」

「っ！……分かった……」

マオに向かって微笑むとそう言う

その下手な笑顔を見れば怒りを抑えて引き下がるしかなかった

「……それでも、私は……」

「……いいだろう」

リョウジの纏っている空気が変わる

普段の冷たくも優しい雰囲気から、戦う時の鋭い殺気へ

「なら思い出させてやる、聖、お前に……融合の恐怖を……!」

決闘盤を展開させそう言い放った

覚悟（2）

彼女を戦わせたくない

戦場での：勝利だけが目的の決闘なんてさせたくない

それが自分のわがままだとしても

彼女には平和な世界で笑って決闘をしていて欲しい

：そのためなら、たとえ自分が悪になっても、恨まれることになっても構わない

今この時だけ：俺は、冷酷な決闘戦士となろう

……………

「……………うん、決闘…だよね」

薄い黄色の盤を構える、するとリアルソリッドビジョンがカードを置くプレート部分を形成し、デッキがオートでシャッフルされて決闘の準備が整う

結局、決闘者どうしの争いを収める方法は決闘しかない

トキノもこうなることは予想していた

だからここに呼んだのだ、リョウジとトキノがはじめて決闘をしたこの屋上に

「……………」

鋭い目つき、そして威圧感をトキノに向けるリョウジ

アカデミアと戦うときと同様、あるいはそれ以上の気迫をもってこの決闘に臨む

下地そのままのシルバーの盤を構え、決闘の準備を整える

「…トキノ…リョウジ」

マオはその二人を見守る

トキノの強さを知っているから、一緒に戦いつてくれたら心強いと思ってしまう

トキノの弱さを知っているから、もう戦わせたくないと思ってしまう…

「…うん、いくよ…！」

「決闘!!」

トキノ LP4000

リヨウジ LP4000

決闘盤がトキノの先行を決定する

「…っ！私の先行！私は、聖刻龍ドラゴンヌートを召喚！」

聖刻龍ドラゴンヌート 攻1700

相手が後攻を得意としているデッキだけに自分が先行になってしまったことに内心で焦りを覚えるが、すぐに切り替えて今できることを行う

「竜の霊廟を発動！その効果でデッキからドラゴン族モンスターを墓地に送る！そのカードが通常モンスターならさらにもう一枚墓地に！私は神竜ラグナロクと聖刻龍シユウドラゴンを墓地へ！」

淀みなく慣れた手つきで効果を使用していく

「さらに魔法カード！モンスターロットを発動！私の場のモンスターを選択し同レベルの墓地のモンスターを除外して1枚ドロ！それが同じレベルのモンスターならそのまま特殊召喚する！さらに対象になったドラゴンヌートの効果！効果対象になった時手札、デッキ、墓地からドラゴン族通常モンスターを攻守0にして特殊召喚する！きて！エメラルドドラゴン！」

エメラルドドラゴン 守0

「モンスターロットで墓地のレベル4モンスター、ラグナロクを除外してドロ！…私が引いたのはレベル4の神竜ラグナロク！よつてこのまま特殊召喚！」

神竜ラグナロク 攻1500

「…レベル4が2体…」

「行くよ！私はレベル4のドラゴンヌートとラグナロクでオーバーレイ！誉れある竜の姫よ！その竖琴で我らを守り給え！エクシーズ召喚！ランク4！竜魔人クイーンドラグーン！」

2体のモンスターが球体となって地面の穴に飛び込み、その中から竜の下半身を持つ女性が現れトキノの場に降り立つ

竜魔人クイーンドラグーン 攻2200

「そしてクイーンドラグーンの効果！1ターンに一度ORUを一つ使うことで墓地からレベル5以上のドラゴン族モンスターを特殊召喚！墓地から聖刻龍シユウドラゴンを蘇生！」

聖刻龍シユウドラゴン 攻2200

「そして私はレベル6のエメラルドドラゴンとシユウドラゴンでオーバレイ!!」

再び2体のモンスターが舞い上がり、地面の穴へと吸い込まれる

「聖なる証刻みし龍よ！今こそその輝きを放ち、後にくももの道しるべとなれ！エクシーズ召喚！ランク6！聖刻龍王アトウムス！」

聖刻龍王アトウムス 攻2400

竜の姫の隣に龍王が立ち並ぶ

1ターンで2度のエクシーズ召喚、だがまだ終わらない

「アトウムスの効果！ORUを一つ使つてデッキからドラゴン族モンスターを攻守0にして特殊召喚！来て！神龍の聖刻印！」

神龍の聖刻印 守0

前回の決闘でも出てきた巨大な球体が場に現れる

しかしそのステータスはやはり0、このままでは置物だが

「アドバンスドローを発動！場のレベル8モンスター、聖刻印をリリースして2枚ドロー！さらにエクシーズギフトを発動！私の場にエクシーズモンスターが2体以上いるときORUを2つ使つて2枚ドロー！」

流れるようにカード効果を駆使して手札を整える、しかしまだ終わらない

「トレードインを発動！手札の聖刻印を墓地に送つて2枚ドロー！超再生能力を発動！このターン手札から墓地に送った、またはリリースしたドラゴン族の数だけエンドフェイズにドローする！」

次々と手札を回す

「カードを2枚伏せてエンドフェイズ！超再生能力で2枚ドローし

て、ターンエンド！」

エクシーズモンスターが2体、伏せカードが2枚、手札が4枚
前回の何もできずに負けた決闘とは段違いのカード捌き

…だが、それらはすべてリョウジも見知っているカード達だ

「俺のターン、ドロー…行くぞ…！」

リョウジ 手札6枚

トキノにとって…エクシーズ次元にとって忌々しいカードを発動
させる

「融合を発動！手札のサイバードラゴン2体を融合！」

両の手を広げ、胸の前で両の指を組み力を込める、その姿は紛れも
なく融合次元の決闘者のそれだった

「進化する2体の機械龍よ、一つとなりて、二筋の閃光を生み出せ！

……融合召喚!!」

融合モンスターがその渦より姿を現す

「現れるーレベル8！サイバーツインドラゴン!!」

サイバーツインドラゴン 攻2800

2つの首がトキノに向かって大きく吠え、周囲の空気をビリビリと
震わせた

「っ！リョウジ！あんたまさか!!」

その衝撃であることに気が付いたマオが叫ぶ

「ああそうだ、ダメージ実体化を切っていない…衝撃も、痛みも…ダ
メージを受ければそれがそのままお前を襲う」

低い唸り声をあげるツインドラゴンはソリッドビジョンとは思え
ないような威圧感を放ち、確かにそこに在った

「当然だろう、戦場で戦うということはこういうこと、本物の痛みを味
わうということ…嫌なら今すぐ荷物をまとめてどっかに消えること
だ」

スっ…と指をトキノのエクシーズモンスターへ向ける

「クイーンドラゴンにはほかのドラゴンに戦闘耐性を与える能力が
あったな？そっちから始末する」

ツインドラゴンの口にエネルギーが貯められる

「サイバーツインドラゴンで竜魔人クイーンドラグーン、続いて聖刻龍王アトムスを攻撃、エボリューションツインバースト！」

解き放たれたエネルギーがトキノのモンスターへ襲い掛かり、粉砕した

モンスターを破壊した余波が現実の衝撃となって襲う

「くうっ！」

トキノ LP4000↓3400↓3000

サイバーツインドラゴンの2回攻撃は終わる、だがバトルは終わっていない

「速攻魔法、融合解除！サイバーツインドラゴンの融合を解除する！」

サイバードラゴン 攻2100

サイバードラゴン 攻2100

「行け！サイバードラゴンでダイレクトアタック！エボリューションバースト!!」

「ぎゃああっ!?!」

サイバードラゴンから放たれたエネルギー光線がトキノに直接襲い掛かる、トキノは衝撃で吹き飛ばされないよう必死に耐える

トキノ LP3000↓900

「…お前はこの程度だ、ただのデュエルでは確かに俺よりも強い、だが、実践で役に立たなければ意味がない…サイバードラゴン!!」

最後のサイバードラゴンがトキノのライフを消し去らんと光線を放つ

「っ！トラップ発動!!ガードブロック！受けるダメージを0にして1枚ドロウする！」

直撃する直前、光線は掻き消える、まだ終わらない

「…ちっ！」

我知らず舌打ちが出る

今ので倒れてほしかった…そう思ってしまっ

だが今は決闘中、すぐに切り替えて次のターンへの準備をする

「命拾いしたな…バトル終了、魔法カードアイアンドローを発動、俺の場のモンスターが機械族効果モンスター2体だけの時カードを2枚

ドロー、カードを2枚伏せてターンエンドだ」

1度目の攻防が終わる

…すると屋上へつながる扉が大きな音を立てて開かれた

「何事だ!!…リヨウジ? トキノ?」

建物を揺らすリアルソリッドビジョンの衝撃でこの決闘に気が付いたユートが飛び出し、その衝撃の発生源である2人を見て目を丸くした

「なぜおまえたちが…?それに…」

「…いろいろ言いたいことはあると思うけど」

何がどうなっているのか分からないといったユートにマオが話しかける

「今はあの二人の邪魔をしないであげて…これは必要なことなの…トキノにとっても…レジスタンスにとっても」

「…分かった…後でしっかり説明してもらおうぞ」

ユートはトキノ、マオ、そしてリヨウジにも一定以上の信頼を置いている

そしてマオからそう頼まれれば2人を見守ることに異論はなかった

「…ありがとう、マオちゃん」

友は自分の頼みを聞いてくれた

なら、自分は思いっきりやるだけ

ダメージで震える足に力を入れ、恐怖で震える手でカードを引く

「私のターン! ドロー!!」

トキノ 手札6枚

「私は伏せてあった補充要員を発動! 効果で墓地の攻撃力1500以下の効果モンスターではないモンスターを3枚まで回収できる! 私はラグナロクと聖刻印を2枚回収! トレードインを2枚発動! 今回収した聖刻印2枚を墓地に送って4枚ドロー!」

一般的に扱いが難しいとされている通常モンスターを利用して一

気にアドバンテージを稼ぎ、手札が9枚になる

「…私は思い出のブランコを発動！墓地から通常モンスターを特殊召喚！甦れ！神龍の聖刻印!!さらに私は黙する死者を発動！墓地から通常モンスターを守備表示で特殊召喚！もう一体神龍の聖刻印を特殊召喚！」

トキノの場に巨大な球体が2つ並ぶ

「…来るか」

「うん…行くよ！私はレベル8の神龍の聖刻印2体で…オーバーレイ!!」

2つの球体は地面の穴に吸い込まれるようにして場から姿を消す

「聖なる証刻みし龍よ！今こそ太陽の輝きを解き放ち、勝利の道を照らし給え！エクシーズ召喚！」

地面から現れた球体は一見するともとの聖刻印と何ら変わらないように見える

しかし、球体の中から光が漏れだして全身の装甲が展開し、その姿を変えていく

「君臨せよ！ランク8！聖刻神龍―エネアード!!」

強大な光の龍が神々しい光と雄々しい咆哮を放ち、己の主人を守るようにリョウジの前に立ちはだかった

聖刻神龍―エネアード 攻3000

「来たか…エネアード！」

「エネアードの効果を発動！ORUを1つと手札か場のモンスターを任意の枚数リリースし、その数だけ相手のカードを破壊！私は手札のモンスターを4枚リリースし、リョウジ君の場のカードをすべて破壊！」

エネアードは自身のORUにモンスター4体分のエネルギーを込めると一気にそれを開放する

「燃え尽きて…ソルフレア!!」

「ぐっ!?!」

猟犬の火球とは比べ物にならない圧倒的な熱量にたまらず顔を腕で覆う、再び目を開けるころには2体のサイバードラゴンは塵も残ら

ずに燃え尽きていた

「これで…っ?! エネアード!？」

だが、リヨウジもただではやられない、エネアードは大きく体勢を崩して膝をついていた

「破壊させる直前に伏せカード…重力解除を発動していた、これにより場のモンスターの表示形式を強制的に変更される」

聖刻神龍エネアード 攻3000↓守2400

「さらにもう一枚の伏せカード、融合準備も発動させてもらった、効果でデッキからサイバードラゴンを、墓地から融合を手札に加える」

「くうっ…でもいまながら空き…聖刻龍ドラゴンゲイヴを召喚！
リヨウジ君にダイレクトアタック!!」

聖刻龍ドラゴンゲイヴ 攻1800

屈強な四肢を持つ龍が召喚され、リヨウジに殴り掛かる

「ぐっ!？」

リアルソリッドビジョンのその重い攻撃をこらえきれずに弾き飛ばされるが、すぐに体勢を立て直す

リヨウジLP4000↓2200

「倒しきれなかった…カードを2枚伏せて、ターンエンド…」

「…どう見る、この決闘」

見守ると決めたユート、だが決闘者としてこの勝敗が気にならないわけはなくマオに話しかける

「…そうね、今んところはトキノが優勢…って言いたいけど」

「ああ、リヨウジのデッキには爆発力がある」

決闘の衝撃や爆発音を聞きつけて他のレジスタンスも集まりつつある、しかし、レジスタンスリーダーであるユートが見守っているのを確認すれば手出しをせずに遠巻きに傍観を決める

「それに…トキノは、まだ恐怖が抜けきってはいない」

決闘者として鍛えられた視力はトキノの体の震えを見逃さなかった
戦うことに怖がりながら戦っている、それは以前から変わっていない

い

「…トキノ」

心配した表情で決闘の行く末を見守る…いまのマオにはそれしかできなかった

「俺のターン…ドロー!!」

リョウジ 手札4枚

「…相手の場にのみモンスターが存在するとき、サイバードラゴンは特殊召喚できる!来い!サイバードラゴン!」

サイバードラゴン 攻2100

「そして死者蘇生を発動、墓地から甦れ、サイバードラゴン!」

サイバードラゴン 攻2100

場に2体の機械龍が並ぶ

リョウジは手札の融合のカードを手に取り…少し思考すると何もせずに元に戻した

「俺はレベル5のサイバードラゴン2体でオーバーレイ!」

2体の機械龍が黒い穴へと吸い込まれ、姿を変える

「進化する機械龍よ!新たな力をその身に宿し!敵を撃ち抜く閃光となれ!エクシーズ召喚!襲雷せよ!ランク5、サイバードラゴンノヴァ!!」

サイバードラゴンノヴァ 攻2100

融合を行うこともできた…だが、リョウジが選んだのはエクシーズだった

「サイバードラゴンノヴァ…」

「ノヴァの効果発動!ORU一つ使い、墓地からサイバードラゴンを蘇生する!」

サイバードラゴン 攻2100

「さらにノヴァの効果!場のサイバードラゴンを除外することでこのターン攻撃力を2100アップさせる!」

サイバードラゴンノヴァ 攻2100↓4200

「…これでドラゴンゲイヴを攻撃すれば超過ダメージでトキノのライフは0になる」

それを見ていたマオは冷静にそう判断する

「いや、そうはならないだろう」

それに対してユートはそう切り返す

「どうしてそう言い切れるの?」

「リヨウジのデッキの爆発力は俺たちもよく知っている…だが、だれよりもリヨウジのデッキを知っているのは誰だと思う?」

「…トキノ?」

「そうだ」

遠い日に思いをはせるように目を細める

「トキノは優れた決闘者だ…昔から、相手への対策も怠らないし、何度も同じ手を喰らうほど抜けてもいない…」

「…この状況の対策もできている…と?」

「おそろくな」

どちらが勝つにせよ、次の攻防で勝敗が決まる

そんな確信に近い予感がして、見逃さないように2人の決闘の行く末を見守る

「バトルだ!サイバードラゴンノヴァで聖刻龍ドラゴンゲイヴを攻撃!

サイバードラゴンノヴァの口へと雷のエネルギーが充填されていく

…だが、それが解き放たれることはなかった

「リバースカードオープン!罨発動!抹殺の聖刻印!!」

攻撃対象となったドラゴンゲイヴが当たったものを除外するエネルギーとなつてサイバードラゴンノヴァへと突撃する

「聖刻モンスター、ドラゴンゲイヴをリリースして、相手のカードを1枚除外!!これで…!」

サイバードラゴンノヴァは相手の効果によって墓地へと送られた場合融合モンスターを特殊召喚する能力がある、だが、除外ならばそ

の効果を発動させずに除去ができる

リョウジの戦法を、使用カードを知っているからこそその冷静な対応だったと言える

「ああ、そうだな……そう来ると思っていた」

だが、相手の手の内を知っているのはトキノだけではない

「速攻魔法…イグニッション!!」

「っ!」

突撃したエネルギーはサイバードラゴンノヴァへと直撃し…大きな爆発が巻き起こった

「除外されてない!? どうして!」

「イグニッションの効果は相手の発動した魔法罫の効果を手元のモンスター1体を破壊する効果へと書き換える」

このカードはトキノも知らない…リョウジが新しくデッキに入れたカードだった

除外に使われるはずだったエネルギーはそのまま破壊のエネルギーへと変わり、サイバードラゴンノヴァを破壊した

「そんなカードが…それじゃあ…」

すなわち、サイバードラゴンノヴァの効果の発動条件を満たしてしまったということ

サイバーエンドドラゴン 攻4000

現れたサイバーエンドドラゴンは爆発の煙をその翼で吹き飛ばし自らの存在を主張するように大きく咆哮し、空気が震える

リアルソリッドビジョンのそれはもはや現実のものとかわりない、咆哮だけで周囲の窓が割れ、近くで見えていたものはたまたらずに耳を抑える

「サイバー…エンド……」

「さあ、お前の効果処理はまだ終わっていないだろう?」

「…私は…ドラゴンゲイヴの効果で…神龍の聖刻印を特殊召喚……」

神龍の聖刻印 守0

ドラゴンゲイヴの効果は強制効果、トキノの意思にかかわらず発動

してしまう

そして、サイバーエンドドラゴンの前でのその効果は自殺行為に等しい

「……サイバーエンドドラゴンには……」

「ああ、よく知っているだろう？……守備モンスターを攻撃したときにその守備力を上回った分のダメージを与える……貫通能力だ」

今はリョウジのバトルフェイズ、サイバードラゴンノヴァは消えたが、代わりにサイバーエンドがいる、そして、ちょうどいい時まで存在してしまっている

「…サレンダーしろ、今なら認めてやる」

このまま続ければ4000の貫通ダメージを受けてトキノが負ける

普段の…普通の決闘ならばそれで終わるだけ…だが、これはダメージが実体化する決闘

当然、ダメージ量に比例して受ける衝撃も大きくなる

このままならばトキノは4000もの大ダメージをその身で受けなければならぬ

「……」

きゅつと唇をかみまっすぐにリョウジの目を見据える

「サレンダーはしない！私は…決闘者だから……」

「……」

震えている、目の前の圧倒的な威圧感に、目の前の殺気に、目の前に迫った敗北に恐怖して

そんなことは誰が見ても明らかだった

それでも、彼女は恐怖を克服しないまま、この場に立っている、目の前の敵へと立ち向かっている

その姿は紛れもなく最後まであきらめないレジスタンスそのものだった

「……だったら……」

右手を掲げる、その合図を受けたサイバーエンドドラゴンは神龍の聖刻印へ狙いを定め、その3つの口へとエネルギーを溜める

「っ！リヨウジ！そこまでする必要があるのかっ!?!」
たまらずにユートが叫ぶ

これまでの決闘でリヨウジはトキノの覚悟を問うていたのだと思っていたユートにはもう十分なように思えた

「…サイバーエンドドラゴンで神龍の聖刻印を攻撃……」

だがリヨウジは宣言を止めない

元よりこの決闘は彼女の覚悟を問いかけるために始めたわけではない

『トキノを戦わせたくない』そんなただのわがまま

…たとえその本人を傷つけようと、レジスタンスから追い出されても構わない

「エターナル……」

ゆっくり、ゆっくりと攻撃宣言を進める

もしも途中でサレンダーを宣言するようであれば攻撃を止めるつもりだった

だが、溜まつたエネルギーで周囲が熱を感じるようになってもまだトキノは震えながら立ち向かっている

「……エボリューション……」

エネルギーが限界までたまり、後は解き放たれるのを待つだけ

ここまで来ると巻き添えをうけないようにと逃げるものやユートのように攻撃を止めさせようと駆け出すものも出始める…だが、攻撃を止めるにはもう遅かった

「…トキノ!!リヨウジ!!」

マオの絶叫は何に対してだったのだろうか

トキノに逃げてと言いたかったのか、リヨウジに攻撃を止めさせたかったのか

いずれにしろ、その願いは届かない

「……バーストオ!!!」

たっぷりと時間をかけた宣言とともに掲げた腕を振り下ろす

サイバーエンドドラゴンは主からの命令に従いそのエネルギーを解き放ち

「っ!!きやああああああああっ!!」

圧倒的なエネルギーの奔流は神龍の聖刻印を一瞬で消し去り、一切弱まることなくトキノのライフを奪っていった

覚悟（3）

「エターナル…」

いつもであれば流れるようにできる攻撃宣言がとてつもなく重かった

「エボリューション…」

標的は無力な球体、そしてその奥の…傷ついてほしくないと思った人

その相手を自らの手で傷つけている…だが、もうこれで終わる

これで心が折れれば、もう二度と戦いたいだなんて言いださなはず

頼む、サイバーエンド…彼女の心を折ってくれ

「…バーストオ!!!」

そんな祈りを乗せた攻撃は易々と壁モンスターを粉碎し、貫通したダメージがトキノの身体を吹き飛ばした

悲鳴とともに屋上を跳ねるように吹き飛んで、屋上の金網に背中を打ち付けてようやくやく止まる

「トキノっ!!!」

マオは矢も楯もたまらずに駆け寄る

あれほどのダメージを受けてしまつて、ただですむとは思えなかつた

「リョウジ！お前は!!」

ユートは怒りを滲ませながらリョウジに詰め寄る

仲間になんてことをするのだと糾弾しようとして

遠巻きに見ていたレジスタンスも同様に、それぞれトキノとリョウジへ近づこうとして

「…ない…で…」

誰でもない、攻撃を受けて屋上で倒れ伏しているトキノの弱々しい声があれば、皆一斉に注目する

「ま…だ…終わって…ない…から…」

「終わってない…だと?…何を言ってる…」

そう言ってるリヨウジはライフカウンターを確認し、驚愕する

トキノLP900

「ライフが…減ってない?…バカな!」

リアルソリッドビジョンの衝撃は正確だ

ダメージが半減すれば衝撃も半減し、ダメージが無効になれば衝撃は発生しない

今の攻撃は確かに4000のダメージを与えた一撃のはずだった

「私は…攻撃を受ける…直前に…このカードを…発動……してた…!」

「…体力増強剤スーパーZ!」

トキノの場にあつた最後のリバースカードが開かれていた

それは、2000以上のダメージを受けるとき、その前に4000のライフを回復するカード

トキノLP900↓4900↓900

…だが、それは4000もの衝撃をその身で受けたということ

ただの衝撃体感システムであるリアルソリッドビジョンとはわけが違う

金網に縋るように立ち上がったものの、ふらふらと体が揺れていていつ倒れてもおかしくない

「あはは…痛いね…やっぱり…」

そう言ってる腕を抑える、吹き飛んだ際に強く打ち付けたのか、青あざができていた

そこだけではない、全身に擦り傷やあざができていて、見るも痛々しい姿となってしまうていた

「…でもね」

リヨウジだけでなくこの決闘を見ていたものは呆気に取られてトキノの言葉を聴く

「…友達がいなくなっちゃったときのほうが痛かった…つらかった…苦しかった!」

胸を押さえ、涙があふれる

「私は…誰かを傷つけることなんてしたくない…でも、もう誰も失いたくない!!」

その叫びは紛れもなく本物

敵を倒すためではなく、仲間を守るために戦いたいという強い意志

「マオちゃん…ユート君…みんなも…もうちよつとだけ待ってて…」

マオとユート…他の者も2人の決闘者から離れる

この決闘の最後を見届けるために

「お…俺は…ターン…エンド…」

「私の…ターン!」

トキノ 手札1枚

「エネアードの効果…ORU一つと手札のモンスターをリリースして

…サイバーエンドドラゴンを破壊!」

エネアードがモンスターのエネルギーの詰まったORUをサイ

バーエンドへと叩きつけ、焼却する

これでリヨウジの場はがら空き

「エネアードを攻撃表示に変更…バトル…」

息も絶え絶えに最後の攻撃を行う

「聖刻神龍エネアードで…リヨウジ君に…ダイレクト…アタック…」

倒れそうになる体を必死に支え、薄れゆく意識の中で宣言する

「行って…オーバーロード…フレア!」

攻撃の指示を受けたエネアードは炎と光のブレスを放つ

リヨウジはそれを黙って受け入れた

リヨウジLP2200↓0

決闘終了のブザーが鳴り、勝敗が決する

「…やっ…たあ…勝っ…た…あ…」

その言葉を最後に、意識を失った

…

「…あ…れ…ここは…?」

トキノは保健室に差し込む夕日で目が覚める

決闘後、ダメージで倒れたトキノは保健室に運ばれ、ベッドで寝かされていた

「…痛っ…!」

起き上がるうとして痛みを感じ、全身のあちこちに包帯や湿布が貼られていることに気が付く

「…えっと…リヨウジ君と決闘して…最後は…」

「お前が勝った」

どうしてこうなったのか思い出していると不意に声をかけられてつきり誰もいないのだと思っただけにビクツと驚いてしま
う

「ふえっ!?リヨ、リヨウジ君!?…って…どうしたのその顔!」

驚いてそつちの方を向けばリヨウジが椅子に座っていて…その頬は腫れ上がっていた

「…ユートに殴られた、『どんな事情があったにせよ仲間を傷つけることは許さん』…ってな」

後ろめたさ全開といった感じでそう言う

実際のところ、大勢のレジスタンスの前でリーダーが直々に処罰を与えたということとそれ以外のお咎めはなく、他のレジスタンスを納得させるための行動でもあった

「…そ、そうなんだ…ごめんね」

「いや、お前に比べれば全然軽い…すまなかった」

全身怪我だらけな姿を前に頭を下げる

「だ、大丈夫!昔から怪我の治りは早いから!真剣勝負の結果だし!気にしないで!」

「俺が間違っていた」

頭を下げたままで謝罪する、怪我をさせたことだけではない相手の気持ちも考えずに勝手な思いで否定してしまったことと、その覚悟を見誤っていたことへの謝罪

「俺は、お前は戦えないと思っていた…だが、実際は違った」

「…私は…もう大丈夫…みんなを守るためなら…戦える」

強い決意、強い覚悟でその言葉を口にする

「そうか…お前は、覚悟ができているんだな…けど、しばらくは療養に専念だな」

「おおげさじゃないかな…大丈夫だよ」

と会話をしていると保健室のドアが開き、マオが入ってきた

「様子見に来たよー…って、もう起きてる？大丈夫？痛くない？」

「だ、大丈夫だよ、心配かけてごめんね」

入ってくるなりトキノに駆け寄り

「まったく、女の子に怪我させるなんてひどい男もいたもんよねー」

「うぐっ…」

じろりとリョウジを見てそうつぶやく

当人もまったくもってその通りだと思っただけなので何も言い返せない

「…本当にすまない、俺にできることなら何でもやろう」

「あはは…そっか…なら」

その言葉を聞けば困ったように笑って…

「私ね、あんなこと言っただけど、まだちよつぱり怖いの…だから」

まっすぐとリョウジの目を見ながら言う

「私と一緒に戦ってくれる？…絶対に、足手まといになんてならないから」

その真剣な問いにリョウジもトキノの目をまっすぐ見て返す

「…分かった…聖、お前が皆を守るって言うのなら、…俺がお前を守る」

「っ…！…よかった、なら、安心だね」

トキノはこの時だけは顔に貼られた湿布に感謝した

赤くなつた顔を見られずにすんだのだから

「…あ、それじゃあ、もう一ついいかな？」

「なんだ？」

どうせだからと、もう一つお願いをする

「これからは聖じゃなくて名前です…トキノって呼んでほしいの」

「…そんなことでもいいのか？」

「くりと頷く」

償いと言った手前断れず

多少の気恥ずかしさを覚えながらもそれを受け入れる

「トキノ…これでいいか？」

「…うん！」

窓から差し込む夕日に照らされたトキノの笑顔は、とてもまぶしく輝いていた

ユーゴ

トキノとリョウジの決闘から数日後…

「行って！アトムス!!」

「ぎゃあっ!?!」

輝く龍が機械の猟犬を破壊し、アカデミア兵を融合次元へと送り返す

「はあ…はあ…これで…」

「隙あり!!」

送り返したことで油断したところへ、潜んでいたアカデミア兵が不意打ちをする

猟犬の爪が襲い掛かり、完全に不意を突かれて回避ができず…

「っしまっ!?!」

「いけ！古代の機械猟犬!!」

「…エボリユーシヨントインバーストお!!」

猟犬は己の攻撃が標的に当たる直前、光線によって消し飛ばされた「なっ!?!」

「続けてプレイヤーを直接攻撃！エボリユーシヨントインバースト第2打あ!!」

「ぐおおっ!?!」

続く光線でもうアカデミア兵のライフを消し飛ばして元の次元へ強制送還させる

「戦場で気を抜くな、トキノ」

「う、うんっ！ごめん!」

警戒を続けながら不意を突かれて転んだトキノを引っ張り起こす
実践経験が少ないトキノはリョウジと組んで戦場に出ていた

「…敵はもういない…か」

周囲から気配が消えて戦闘音が止む

今回の襲撃は小規模のものだったようだ

「…はあ」

息を吐き出して肩の力を抜く、無論どこに伏兵が潜んでいるか分か

らないので最低限の警戒を続けてはいるが、アカデミアで長年訓練を受けた身ならばその程度は苦も無く行える

残党狩り…と称するこの襲撃も瑠璃の誘拐から明らかに頻度が減った、今までの襲撃も瑠璃の居所を探していたということだったのだろうか

「…すこし歩くか、確かこつちの方はまだ探索していなかったはずだ」
もしかしたらなにか情報が、あるいは食料などが見つかるのではないかと思ひ、そう提案する

「う、うん、こつち方面なら私も道案内できるよ、…景色はずいぶん変わったけど」

ここには何があった、ここでこんなことがあった…といった思い出話をしながらがれきの山と化した街を歩いていく

「こつちの方は…えーと…あつ、そうだ！たしかこの近くにスーパーがあったよー」

「まだなにか使えるものもあるかもしれない、案内を頼む」

案内に従って進むとスーパー…のなれの果てがあった

窓ガラスはすべて割れ、ところどころ天井も落ちていて到底営業など出来ない状態だった

「使えるものがないか探してくる、トキノは入り口で警戒、何かあったらすぐに知らせてくれ」

「り、了解」

トキノは戦場では基本的にリョウジの指示で動くようにしている、こういった事態の対処ならリョウジのほうがベテランなのだ

中に入るとひよいひよいとがれきを乗り越えて奥へ進む、手前の方にはほとんど商品がなかった、最初の襲撃の際にまだこのあたりにいた人が持つて行ったのだろう

それに引き換え奥の方はほとんど手付かずで大量の食糧が残っていた、天井が落ちて先には進めなかったようだ

「よし、これだけあればしばらくは持つな」

多くは消費期限が切れてしまっていたがそれでも多くの食料を見つけることができた

いくつか食料を回収する、後で食料調達班へこここの情報を伝えて大規模な回収作戦を…

…と考えていると、外から衝突事故が起こったような衝撃音、続いてトキノの悲鳴が聞こえた

全速力で駆け出し、がれきも飛ぶように回避して盤を構え、スパーの入り口まで駆け戻る

「トキノ！大丈夫か!!」

「あつ…リョウジ君…あれ…」

とりあえずは無事を確認して安堵し、警戒をトキノが指さした方へと向ける…と

「…なんだあれは？」

白いバイク…と白いライダースーツを着た人物ががれきの山の前で倒れていた、見たところバイクでがれきに突っ込んで倒れたようにも見える

だが…この辺はがれきだらけでバイクなんて走れそうにない

「だーっ！いきなり何だつてんだよ!!」

不意に倒れていたライダースーツの男が跳ね起きて叫ぶ、当然ながら知らない人物だ

「…ん？」

「あ」

目が合った、ライダースーツの男はこちらを確認するとゆっくりと近づいてくる

「っ！」

トキノを下がらせて決闘盤を構える、相手の正体が不明な以上警戒するしかない

…が、よく見れば決闘盤もつけていない、何をする気だ…と警戒を続けていると

「…その食いもん分けてくれ！頼む！」

目の前まで来ると頭を下げた、そしてすぐにぐう、というお腹が鳴る音

「…あ、ああ…いいが…」

……

「いやー助かった！……ここ数日なんも食ってなかったんだよ」

「お、おう……そうか」

ライダースーツの男：ユーゴはつま楊枝で歯に挟まったものを取りながらそう言う

ヘルメットを取った時はユートやユーリと同じ顔だったことに多少驚いたが、3度目ともなればもう慣れた

「……それで、お前は何者だ？」

食事も終わったことだしと座ったまままで話を聞く、少なくとも敵ではなさそうだが

「俺はユーゴってんだ！」

「いや名前はもう聞いた……」

少ししか話してないけど分かった、こいつバカだ

「いやそうじゃなくて……目的とか……所属とか……」

「さらわれた幼馴染を探している」

一転して真面目な雰囲気になり、懐から紙を取り出す

「俺の幼馴染のリンがさらわれて……リンはこんな奴だ、見てないか？」

そう言っつて似顔絵を見せられる……が

「……ええと……すまないが分からん」

……幼稚園児の落書きかと思うほど超ドヘタだった、かろうじて髪が緑色ということくらいしか分からん

「ちなみに誘拐した奴はこんな顔の奴だ！」

「……」

誘拐犯を描いたと思われる紙も同じく

かろうじて髪が紫っぽいということが分かる程度

これで尋ね人は少々無理がないだろうか

「……目的はわかった……が、お前は何者なんだ？どこから来た？」

「どこから……うーん……何って言えばいいんだ？」

腕を組んでぐむむと悩み始める、普通どこから来たかを聞いただけ

でここまで悩むものか？

「…あんまり信じらんねえかもしれないねえけど、俺はこことは全く違うところから来た、こいつの力でな」

「っ!？」

しばらく悩むとバイクにセットされていたデッキからカードを1枚取り出して見せてくる

その白い枠のカードをみて息をのむ

「なに？このカード…？見たことない色だけ…？」

「…シンクロモンスター」

4つの次元の1つ、シンクロ次元で使用されているらしいカード

このカードを持っているというだけでも違う場所から来たという言葉にこの上ない説得力がある…いや、それよりも

「お前、今このカードの力で次元を超えてきたって言ったか？」

「次元？…俺にもわかんねーけど、こいつがバーって光ったら急に別の場所に移動すんだよ、さつきも走ってたら急に光って、気が付いたらこんなところに」

ちらりとトキノへ視線を向けるとコクコクと頷く

どうやら次元転移の話は本当の様だ

「失礼を承知で頼みがある…少しそのカードを調べさせてもらえないか？」

普通であればほぼ初対面の相手にこんなことを頼むなど失礼極まりない

しかもそれが特別なカードであればなおさら

「クリアウイングを…ちよつとだけだぞ？」

意外なことにあっさりとOKしてカードを差し出してくる

「…いいのか？」

「飯の礼だ、…それに、お前らにも事情があるんだろ？」

貧民街…コモンズ出身であるユーゴにとって食料を分けてくれた相手には最大限の礼をするというのは当然のこと

しかもみるからに周囲は荒れ果て、簡単に施しを与えられるようにも見えないとあればなおさら

「…感謝する」

それを受け取ると丁寧な盤へとしよう

信頼してカードを渡された以上その信頼にこたえる必要がある

「じゃあ、レジスタンス本部へ戻ろう、葉操なら何かわかるかもしれない、ユーゴもそれでいいな？」

「おういいぜ」

そう言つてバイクに跨り、アクセルを回すユーゴ

「……ん？」

何も起こらない、再びアクセルを回す

「…ひよつとして…さっきの衝撃で？」

「…壊れたのか？」

冷や汗交じりで頷くユーゴ、葉操の元に行く理由が一つ増えた

ユーゴはバイクを押しながらリヨウジ達に連いていく

その道すがらに軽く情報交換も済ませておく、この後にレジスタンスと合流した際に説明してもらおうつもりだったが事前に知っておいた方が円滑に進められる

「…なるほど、シンクロ次元は格差社会…か」

「…大変そうだね」

戦争の絶えない融合次元とも、格差が激しいシンクロ次元とも違う平和なエクシーズ次元で生きていたトキノはその話を聞いてそう思ってしまう

「…俺はそれが当然だと思つてた、それに、その日その日を生きているので精いっぱい、大変だなんて思つてる暇もなかったな」

ユーゴは白いバイク…シンクロ次元の決闘盤、Dホイールを押しながらがれきの間を進んでいく

あの後見てみたが、工具やパーツが無ければどうにもならない壊れ方をしていた

「お前は…えーと…融合が戦争を仕掛けて…エクシーズがこんなありさまで…」

さすがに一気に説明しすぎたかと反省しながらもう一度説明するというか、融合と言ったら『俺はユーゴだ！』と切り返されたせい

でちゃんと説明ができていなかった、直接融合のカードを見せてようやく自分の名前ではないと理解してくれたようだ

「…この世界は召喚方法別に4つの世界に分かれている、お前がいたのがシンクロ次元、ここがエクシーズ次元、融合を使う融合次元、それから、特別な召喚法がないらしいスタンダード次元の4つだ」

ユーゴはこの辺は次元転移で全く違う世界を見て回った経験からすんなりと受け入れた

「融合次元の決闘戦士育成組織…アカデミアは4つの次元を侵略、統合して理想郷を作る計画…アークエリアプロジェクトと銘打って戦争を始めた…その最初の標的になったのはこのエクシーズ次元だった」

辛そうな顔を浮かべるトキノ、その姿に罪悪感を感じないでもないが、この説明抜きでは話が進まない

「エクシーズ次元は見ての通り、壊滅的な被害を受けた…だが、残った者たちでレジスタンスを結成し、まだ抗っている」

トキノは左手首に巻かれたレジスタンスの証である赤いスカーフをぎゅつと抑える

共に戦うことを決めたその日にユートから渡されたものだ

「…おう、だいたい分かった、融合が悪者でエクシーズが被害者だな！」

「…その認識でいい」

軽く頭を押さえて話を終える、訂正するほど間違ってもいないのでもうそれで構わない

「…ん？ちよつと待て、お前さつき融合のカード持ってたよな？」

「…ああ、俺は融合次元の出身だ」

軽くため息をつく、こうやって説明をするとつくづく自分の立場の厄介さが分かる

「俺は融合次元で決闘戦士になるために訓練を積み、エクシーズ次元の侵略に参加する予定だった…が、俺は融合次元を見限り、エクシーズの側についた」

思い出すのはあの日、目の前でカードにされていく人達を見て、体

が勝手に動いていた

人がカードにされるだなんて見慣れた光景のはずだった

でも、無抵抗の人たちが次々とカードにされていくのを見れば、それまでのように無関心でいることは出来なかった

「へえ、融合次元にもお前みたいに話が分かるやつがいるんだな」

「っ！…それはない、融合は悪だ…滅ぼさなければならぬ悪だ…！」

エクシーズ次元に来て、平和だった世界の住民に触れてようやくわかった、あの世界は狂っている、仲間を平気でカードにする、親も友人もそれが当然だとばかりにカード化したものを『弱かったんだからしょうがない』の一言で終わらせる世界だ、狂っていると言わずしてなんと言う

「…そうか」

「リョウジ君…」

ユーゴもトキノもそれ以上は聞いてこなかった、

……

「…とりあえずユートにこのことを報告しないと、また通り魔が出てきても困る」

「あ、じゃあ私が呼んでくるよ」

「頼む」

レジスタンス本部へ着けばトキノが中へとユートを呼びに行く、一応詳細不明な人物を連れてきている以上は見張りという形でここにとどまる

ここでの通り魔とは無論黒咲のことだ、いらん種火は作る前に対策しなければ

「…別次元の決闘者だど？」

しばらくするとユートが中から出てきてこちらへ向かってくる

「おーあれがレジスタンスのリー…ダー…」

ユーゴはその姿を見るなり言葉を失い、弾かれたように指を指して

大声をあげる

「あーっ！あん時のニヤケ面あ！！てんめえ！リンを返しやがれえっどわっ！」

そのままユートのほうへと駆け出しそうとしたので足をひっかけて転ばせ、そのまま寝技を決める

「てめえ何しやがるっ！誘拐犯がそこにいんだぞ！あっ！てめえもグルか！」

「なっ…なんなんだ…いったい…？」

ユートは困惑顔でそうつぶやく…そりやそうなるな

……

「おいこら！離しやがれ！」

後ろ手で縛り上げられたユーゴが吠える

暴れないようにとリヨウジが捕虜をとらえる要領で縛ったものだ

「いいから落ち着け！」

「落ち着いてられっか！！リンを返しやがれ！！」

ユートが誘拐犯…と聞いてリヨウジは事の真相が分かった

「…よく見ろ、そいつはもつとニヤケ面じゃなかったか？髪の色も違わなかったか？」

「ああ？んなもんちやんと見るまでもなく…」

一通り暴れて体力もなくなつてくるとその言葉を素直に聞いてじっくりとユートの顔を確認する

ユートは自分と同じ顔の謎の男に見つめられるという不可思議な現象に居心地の悪さを覚えるが、潔白の証明のためにも目をそらさずに見つめ返す

「……言われてみれば…誘拐しやがった奴はもつとこう…気味が悪い奴だったような…？」

誘拐犯だという確信が疑念に変わったところで話を進める

「おそらく…いや、間違いなく犯人は融合次元の決闘者、ユーリだろ
う」

「融合次元…つてこの町をめちやめちやにしやがった連中か！許せねえ！」

良くも悪くも単純なユーゴだが今回はそれがいい方に転んだよう
だ

ここでリヨウジはふとある疑念が浮かび、それを確認しようとする
「トキノ、瑠璃の顔が分かるものはあるか？写真でもなんでもいい」

「え？瑠璃ちゃんの？う、うん、ちよつと待って、写真が…」

「ユーゴ、この顔に見覚えはあるか？」

トキノが自分の盤で写真データを投影する、どうやらスクールの皆
で撮った集合写真のようだ

「なんだ？…ってリンじゃねえか!？」

その反応を見て疑念は確信に変わる

瑠璃と同じ顔の人間、そしてユートと同じ顔の人間が融合、エク
シーズ、シンクロ次元それぞれに存在している

これは次元が違うからなのだろうか？もしかしたら探せば黒咲や
葉練と同じ顔の人間もいたりするのだろうか？それはまだ分からな
い

だが…アカデミアが瑠璃と同じ顔の人間を攫ったということだけ
は確実だった

「この写真はお前の探してるリンじゃない、エクシーズ次元の人間で、
名前は瑠璃だ」

「リンじゃない…？たしかに…言われてみれば髪の色も違うし…」

というか似顔絵を見る限り髪色は緑だったよな…と思うがリヨウ
ジも最初に瑠璃やユートを見たときにセレナとユーリに見間違えた

ちゃんと落ち着いて見れば違うことはわかるが、なぜだか同じ人間
だと思ってしまう

ユーゴの様子が落ち着くとようやくユートが口を開く

「…誤解は解けたようだな、それじゃあいい加減に説明してもらおう、
俺と同じ顔の彼はいったい何者なんだ？」

「いきなり襲って悪かったな、俺はユーゴだ」

「…融合？」

「融合じゃねえ！ユーゴだ!!」

…そのフリーズ気に入ったのか？

そんなこと思いながら縛った縄を解く、ユーゴももう襲い掛かることもせず話に応じてくれるだろう、だが話が進まないのは困るので助け船を出す

「こいつはユーゴ…融合次元ともエクシード次元とも違う第3の次元、シンクロ次元から来た決闘者だ」

「…そうか、俺はユート、このレジスタンスのリーダーをしている」
「お、おう」

まずはユートが手を差し出して握手を求め、ユーゴはそれに戸惑いながらも応えて握手

そしてユーゴの事情を説明する

「…なるほど、攫われた幼馴染を探している…と」

「おう、それで、その誘拐犯とお前の顔が似てたもんだから早とちりしちゃった」

顔が似てるのはお前もじゃないか?と周囲は言いかけたが堪えた

どうやら自分の顔に似ているという自覚は無いらしい

「だがリョウジ、どうして彼をここに?ただ顔を合わせたかつたわけじゃないんだろう?」

「ああ、こいつはさつきも言った通りシンクロ次元から…次元を超えてきた」

次元転移の手がかり、それに気が付けばユートはハツと目を見開く
懐から預かっていたシンクロモンスターを取り出して見せる

「どうやらこのカードが次元転移にかかわっているらしい、葉繰に詳しく調べてもらうつもりだ」

……

それで、リーダーからも許可をもらい、葉繰の元にトキノとユーゴを連れて向かったのだが…

「何これっ!半永久機関!?本当に!?しかもこれほとんど手作り!」

「おうよ!俺とリンで頑張って作ったDホイールだぜ!かつこいいだろ!」

…ものすごい意気投合していた、葉繰がDホイールに興味津々で、ユーゴはそれを誇らしげにしている

「あー、葉繰？…カードの解析をお願いしたいんだが？」

「はっ…う、うん、分かってる、すぐにやるから」

ちらちらとDホイールを見ながら言われても…

「…つてわけで、彼女にカードを預けるが…」

「いいぜー」

即答された、Dホイールを褒められたことで一気に信頼を置いたよ
うだ、単純な奴め

だがここでひと悶着あるよりは何倍もいい

カードを渡された葉繰はスキャナーにカードをセットするとPC
に向きあう

「……なにこれ？…見たことないデータのオンパレードなんだけど
…」

カードにはそれぞれ情報が刻まれているが、ただでさえ見たことな
ないシンクロモンスターということもあつて、必要なデータがどれな
のかも分からない

「…ちよつと屋上来て、シンクロモンスターのデータ取らないと…」

ユーゴにカードを返し、灰色のデータ取り用の盤を渡した

ユーゴ（2）

「…よしっ俺はいつでもいいぜ？」

先日の決闘の余波で荒れたままの屋上、ユーゴはエクシード次元製の盤に慣れない様子だがすぐに操作を理解して構える

「…盤付けるのも久しぶりな気がするな…よし、やろっか」

それに対する葉線も青赤緑の四角いドットパターン柄の派手な盤を構える

『たまにはやらないと腕が鈍っちゃうからねー』…とって自分からユーゴと決闘を申し込んだ

「決闘!!」

ユーゴLP4000

マオ LP4000

「行くぜ！俺の先行！」

ユーゴ 手札5枚

「俺の場にモンスターが存在しない時SRベイゴマックスは特殊召喚できる！さらに召喚、特殊召喚に成功したとき、デッキからSRモンスターを手札に、そしてそのまま召喚！来い！チューナーモンスター！SR電々大公！」

SRベイゴマックス 攻1200

SR電々大公 攻1000

「チューナー…モンスター？」

トキノは聞き覚えのない言葉に首をかしげる

「シンクロモンスターを召喚するのに必要なモンスター…らしい」

アカデミアでも一応教わりはしたがそこまで詳しいわけではない

「融合モンスターで言うところの融合みたいな感じかな？」

「その認識であっている…はずだが」

終わったらユーゴに聞こう、そう思いながら決闘へ意識を戻す

「俺はレベル3のベイゴマックスにレベル3チューナーモンスター、電々大公をチューニング!!」

でんでん太鼓を持ったモンスターが3つの輪に、それを潜ったベイゴマは3つの星へと姿を変える

「十文字の姿もつ魔剣よ!その力ですべての敵を切り裂け!シンクロ召喚!現れる、レベル6!HSR魔剣ダーマ!」

HSR魔剣ダーマ 攻2200

ピカツとまぶしい光、その中から、巨大なけん玉のようなシンクロモンスターが姿を現す

「これがシンクロ召喚…」

マオだけでなくそれを見ていたリョウジとトキノも興味深くそれを見る、なんだかんだ言っても見たことないモンスターは決闘者にとつて興味の対象なのだ

「魔剣ダーマの効果発動!墓地の機械族モンスターを除外することで相手に500のダメージを与える!」

「くうっ!」

マオLP4000↓3500

けん玉の先からビームがマオを襲う、衝撃の発生しないホログラムでもつりアクションを取ってしまうのは決闘者のさがなのだろう

「よしっ!俺はこれでターンエンド!」

「やってくれたわね…私のターン!ドロ!」

マオ 手札6枚

そう言えば彼女が決闘する姿は初めて見るな…とリョウジは思いながら使用カードを注視する

「私はギアギアーマーを召喚!」

『ギア—!』という鳴き声(?)とともに現れたのはいくつもの歯車が組み合わさって出来た小さなキャラクター、そしてそれが乗り込んでいる大きな盾を構えたアーマー

明らかに防御のモンスターといった感じだが

「私の場にギアギアがいるとき、ギアギアクセルは特殊召喚できる!来なさい!ギアギアクセル!」

その隣にコミカルな見た目のレーシングカーが現れて、レベル4モンスターが2体並ぶ

「私はレベル4のギアギアーマーとギアギアアクセルでオーバーレイ！現れよ！歯車回せし鋼の巨人！エクシーズ召喚！ランク4、ギアギガントX!!」

ギアギガントX 攻2300

巨大な歯車を背負った歯車仕掛けのロボットが現れる

歯車の目立つ機械族：というと古代の機械と同じコンセプトだが、錆の浮いた古めかしいイメージの古代の機械とは違い、カラフルな原色が目立つコミカルなモンスターだ

「へえ、それがエクシーズモンスターかあ！」

「ふふん、ギアギガントXの効果！ORUを1つ使ってデッキか墓地からレベル4以下の機械族を手札に、デッキからギアギアノを手札に！さらに手札断殺を発動！お互いに手札を2枚捨てて2枚ドロースする！」

「お、俺もか」

サーチと手札交換を使って手札と墓地を整える、ユーゴは初めて見るエクシーズモンスターに興奮した様子だ

「バトル！ギアギガントXで魔剣ダーマを攻撃！ギアギガントフェイスト！」

「うおっと！やるな！」

鋼の巨人の拳で粉碎され、超過ダメージがユーゴのライフを削る

ユーゴLP4000↓3900

「これでターンエンド！」

「へっ！俺のターン！ドロ！」

ユーゴ 手札5枚

「俺は手札からSRオハジキッドを召喚！効果発動！墓地からチューナーモンスターを特殊召喚し、そのモンスターとこのカードでシンクロ召喚を行う！甦れ！SR赤目のダイス！」

「っ！…手札断殺の時に…！」

「おう、利用させてもらったぜ？…俺はレベル3のオハジキッドに、レ

ベル1の赤目のダイスをチューニング！」

さいころが1つの輪に、おはじきをもったモンスターが3つの星になる

「幾千の顔を持つ迷宮の影よ、その鋭き刃で混沌の闇を切り裂け！シンクロ召喚！レベル4、HSR快刀乱破ズール！さらにスピードリバースを発動！墓地からHSR魔剣ダーマを蘇生！」

HSR快刀乱破ズール 攻1300

HSR魔剣ダーマ 攻2200

2体のシンクロモンスターが場に並ぶ、マオのカードも利用して場を整えた

「魔剣ダーマの効果！墓地の機械族を除外して500ダメージ！」

「またっ…！くっ！」

マオ LP3500↓3000

「いくぜバトル！ズールでギアギガントXを攻撃！」

「…？攻撃力はギアギガントの方が上…」

「ズールは特殊召喚されたモンスターとバトルする時！攻撃力をダメージステップの間だけ倍にする！」

「っ!？」

HSR快刀乱破ズール 攻1300↓2600

マオLP3000↓2700

ズールの攻撃でギアギガントは破壊されて破片が飛び散る…が、ただでは破壊されない

「ギアギガントXが場を離れたとき！墓地からレベル3以下のギアギアを特殊召喚する！甦れ！ギアギアーン！」

破片の中から小さな歯車のキャラクターが起き上がり、両手を交差して防御態勢を取り、追撃に対する壁となる

ギアギアーン 守1000

「なら魔剣ダーマでギアギアーンを攻撃！」

魔剣ダーマはその剣先でギアギアーンをつらぬき、マオのライフを削る

マオ LP2700↓1500

「っ！貫通能力…」

「おうよ！魔剣ダーマは守備モンスターを攻撃したとき、その守備力を超えた分のダメージを与える！」

先日の決闘を思い出してか端の方で申し訳なさげに顔を反らすリョウジとそれを気にしてないと慰めるトキノの姿が見えた

「よっし！俺はこれでターンエンド！」

「く……私のターン！ドロー！」

マオ 手札5枚

「ギアギアノMK2を召喚！」

先ほどのギアギアノの色違いのキャラが出てくる…と墓地から別のモンスターを引き上げる

「効果発動！墓地からギアギアノMK3を特殊召喚！さらに、MK3の効果で墓地からギアギアノを特殊召喚！」

MK2に引き上げられたMK3が今度はギアギアノを引き上げ、3種のギアギアノが並ぶ

ギアギアノ 守1000

ギアギアノMK2 攻1000

ギアギアノMK3 守1000

「おっ！レベル3が3体か！」

それに対するユーゴはどんなモンスターが出てくるのかと楽しそうに笑う

「私はレベル3のギアギアノ！ギアギアノMK2！ギアギアノMK3の3体でオーバーレイ!!」

3体のギアギアノが光の玉になって地面に吸い込まれ、爆発が起こる

「歯車回せし鋼の巨人よ！3つの力を1つに束ね、眼前の敵を撃ち抜かん！エクシーズ召喚！現れるーランク3！ギアギアギアXG!!」

ギアギアギアXG 攻2500

現れたモンスターは先ほどのギアギガントよりもさらに大きく、強化されており、その胸元には素材となった3体のギアギアノがはめ込まれていた

「さらにアイアンコールを発動！私の場に機械族モンスターが存在するとき、墓地のレベル4以下の機械族を効果を無効にして特殊召喚できる！甦れ、ギアギアアクセル！」

ギアギアアクセル 攻1400

「バトル！ギアギアアクセルで快刀乱破ズールを攻撃！」

コミカルなレーシングカーがユーゴのモンスターに向けて発進する

「忘れたか？ズールは特殊召喚されたモンスターとバトルする時その攻撃力を倍にするんだぜ？」

「忘れるわけじゃないでしょ？ギアギアギアXGの効果発動！機械族モンスターがバトルする時！ORUを1つ使い、バトル終了まで相手の場のカード効果を無効にし、カードの発動を禁止する！エフエクトシヤッター！」

ギアギアギアXGから大量の歯車が飛び出しユーゴのモンスターへと取り付き、その効果を無効にする

「なっ!?」

ユーゴLP3900↓3800

効果を無効にされたズールはレーシングカーに跳ね飛ばされる、もはやただの事故である

「続けてXGで魔剣ダーマを攻撃！ギアギアカノン！」

「うおっ！」

XGの構える大砲からの砲撃により魔剣ダーマも破壊される、

ユーゴLP3800↓3500

「よし、バトル終了、エンドフェイズにアイアンコールの効果で特殊召喚されたギアギアアクセルは破壊されて、ギアギアアクセルの効果、墓地に送られた時アクセル以外のギアギアモンスターを回収、ギアギア1ノMK2を回収」

「俺もズールの効果を使わせてもらうぜ、墓地に送られたターンのエンドフェイズに墓地からSRモンスターを回収、俺はSRベイゴマツクスを手札に加える！」

「……今ので攻めきれなかったか」

冷静にその決闘を見ながらひとりごちるリョウジ

ギアギアギアXGは場のカード効果を無効にしカード効果の発動も封じること、反撃を気にせずに攻撃ができる強力なカード

しかし、それで攻めきれなかったというのはパワー不足と言わざるを得ない

見たところギアギアはアドバンテージを取ることには長けているが、ここの一番の決定力に不足しているようだ

……だが万一襲われた時に時間を稼ぐ等の最低限の自衛程度ならできるとは、彼女がそもそも戦闘員ではなく、メカニック担当ということを考えればなんら問題はない

リョウジは決闘戦士としての冷酷な部分でそう結論付けると決闘の……シンクロの監察へと戻った

「俺のターン……ドロー！」

ユーゴ 手札5枚

「俺の場にモンスターが存在しない時、ベイゴマックスは特殊召喚できる！そして特殊召喚成功時、デッキからSRモンスターを手札へ、そしてサーチした赤目のダイスを召喚！」

SRベイゴマックス 攻1200

SR赤目のダイス 攻100

「赤目のダイスの効果！召喚成功時にSRモンスターを選択してターン終了までレベルを1〜6に変更する！ベイゴマックスのレベルを3から6へ！」

SRベイゴマックス ☆3↓6

「さあ行くぜ！俺はレベル6になったベイゴマックスにレベル1の赤目のダイスをチューニング！その美しくも雄々しき翼翻し、光の速さで敵を討て！シンクロ召喚！現れる、レベル7！クリアウイング・シンクロ・ドラゴン！」

クリアウイング・シンクロ・ドラゴン 攻2500

「来たわね……でも！攻撃力はXGと同じ！その効果も通じないよ！」

先ほどデータを調べたときに効果は見ていた、レベル5以上を対象にして発動したモンスター効果、またはレベル5以上のモンスターが発生させた効果を無効に破壊、その攻撃力を得る効果

ギアギアギアXGにはレベルは無く、また効果も対象とするものではない

さらに言えばクリアウイングが効果で攻撃力を上げようともXGの効果で無効にすれば相打ちにまで持っていける

「そうだな、でもこれならどうだ？魔法カード！ハイスピードリレベル！墓地のSRモンスターを除外してそのレベル×500俺の場のシンクロモンスターの攻撃力を上昇させる！俺はレベル3のベイゴマックスを除外して1500ポイントアップだ！」

クリアウイング・シンクロ・ドラゴン 攻2500↓4000

「っ…あつ…」

ギアギアギアXGの効果はバトルが発生しないと発動できない、効果を無効にできるのは場で表向きになっているカードのみ

これでクリアウイングとXGの攻撃力の差は1500、今のマオのライフと同じ

「バトル！クリアウイング・シンクロ・ドラゴンでギアギアギアXGを攻撃！」

クリアウイングは大きく飛翔、XGへと流星のように落ちていく

「旋風のヘルダイブスラッシャー!!」

マオ LP1500↓0

「……やっぱ…勝てなかった…か」

敗北を受け入れたマオはぽつりとつぶやいた

…

「なあ、こんな形の工具ってあるか？」

「えーと……これでもいい？」

「おう、サンキュ」

決闘後Dホイールの修理をするユーゴとマオ、リョウジとトキノの

二人は決闘を見届けた後見回りに戻った

工作室のコンピュータではシンクロのデータの処理で忙しく稼働し続けている

「……なにこれ？ハンガー？」

「ん？ああ、パーツ足りねえからぶち込んだんだった、忘れてた忘れてた」

「これでよく次元移動の旅なんてできたわね……えっと……こういう作りなら……」

元はユーゴが作ったということで修理はユーゴ主導でマオは主に修理機材の提供と手伝いといった感じでどうにか修理を進める

「これで直った？」

「ちよいまち……お？行けそうだな？」

アクセルを軽く回す、すると沈黙していたエンジンが息を吹き返した

「よっし直った！サンキューな！」

「礼なんていいわよ、私ほとんど何もしてないし」

「いやいや、何か礼しねーと……おっそうだ」

がさがさとライダースーツの中からカードを何枚か取り出す

コモンズでは貨幣ではなくカードを使って物々交換をするなど珍しいことではない

ユーゴも何かあった時のためにレア度が高かったり取引に使えるようなカードは持ち歩いてた

そして目的のカードを見つけるとマオへと渡す

「おっ、あつたあつた、これやるよ」

「これ……？ってチューナーモンスターとシンクロモンスターじゃない！？」

渡されたものはチューナーとシンクロのカード

当然エクシーズ次元には存在しないカードだけに貴重なものだ

「いや、機械族だから使えるかと思って持ってただけだよ、俺のデッキじゃかみ合いが悪くてな？お前のデッキなら使えるだろ？」

「……まあ確かに、種族も属性も合ってるけど……でもこんなの……」

受け取れない、と突き返そうとして逆に突き返される

「いいんだよ、クリアウイングのデータはリョウジの飯の礼、これはDホイールを直すのを手伝ってもらった礼だ」

「いやでも…」

それでも返そうとする…と

「そいつらを使いこなせばお前はもっと強くなれる」

「っ!?!…何の話?」

ドキリ、と本心を言い当てられた気がして顔を反らす

「いや…なんつーか…お前らの話聞かせてもらって、お前と決闘してさ?言っちゃわりーけど力不足だなんて思っちゃったんだよ」

「…悪かったわね」

一緒に戦うには力不足、そんなことは本人が一番よくわかっているでも皆の役に立ちたくて…メカニックとして役に立ってきたつもりだった

…でも思ってしまう、トキノの代わりに自分が戦えてたら、彼女はあそこまで追い詰められなかったのではないか? 皆とともに戦っていたら被害ももっと少なかったのではないか?

昨年のスピード校決闘大会では本戦にも残れずに予選落ち…決闘者として、ここが限界だと思った、これ以上強くはなれないとあきらめてた、大会の決勝で華々しく戦う皆がうらやましかった

「だからよこれ使ってみたらいいんじゃないかと思ってる?」

「……」

不意に示された新しい可能性

もっと強くなれる…シンクロという可能性

…手元のカードに意識が向いていると急にユーゴとDホイールが光り出した

「っ!?!なに!?!」

「うおっ…ここぞかよー!」

驚きながらも慣れた様子でDホイールへと跨る、次元移動は自分でもいつ起こるか分からないと言っていた、これがそうなのだろう

「わりい!ちゃんとシンクロ教えたかったんだけど無理そうだ!独学

で頑張ってくれ！」

「ちよっ!?そんな勝手な！」

いきなりのことで驚きながらも距離を取る、次元転移の仕組みが分からない以上巻き込まれてはたまらない

「俺もリンを探しながらアカデミアの情報を探る!おめーらもアカデミアなんかを負けんじゃねーぞ!」

「ああもう!分かったわよ!あんたも頑張んなさい!」

勝手に押し付けて勝手に激励して勝手に消えようとしている、それに対して怒ればいいのか感謝すればいいのか分からずに切れ気味にその言葉だけを言い放つ

ユーゴはそれに親指を立てて答え、そのまま光の中へと消えた

「つたく…またやらなきやいけないことが増えたじゃん」

手元に残ったカードを見ながらそうボヤいた

…:…それから数日後、クリアウイングから取れたデータとアカデミア盤の残骸から次元転移リングが完成した

しかし一度使用すれば壊れてしまう片道仕様、数は2つ

次元移動ができるのは1度切り、行けるのは2人まで

黒咲

レジスタンス本部

報告のために集まっていたレジスタンスたちの視線は目の前の腕輪に注がれていた

「…今説明したとおり、この間のユーゴの協力のおかげで得られたデータとアカデミアの盤から回収できたパーツを使って次元転移リングが2つ出来た、でも一回使ったら壊れる片道仕様の欠陥品、こんな状態で渡すのは心苦しいけど…」

「いや、充分だ、よくやってくれた」

メカニックとして完璧でないものを渡すことへの罪悪感を感じているマオとそれをねぎらうユート

手詰まりだった現状を打破できる可能性を提示できたというだけでも称賛に値する

「問題は…」

「誰が、どこへ行くか…だな」

ユートの言葉を引き継ぐように話し始める黒咲

2つしかなく、1回しか使えないとなればその二つは重要課題だ

「先に言っておくが、直接融合次元へ行くというのは無しだ、たった2人で行ったところで何もできない、それに帰ってくる方法もない」

「ぐっ……………分かってる」

リヨウジからの忠告に苦虫を噛み潰した表情を浮かべる黒咲

周囲のレジスタンスも悔しいがその通りだと頷いている

「であればシンクロ次元かスタンダード次元の2択…というわけだが」

「俺はスタンダード次元を提案する」

今回の次元転移の目的はアカデミアと戦う仲間を集めること

それを達成するにはどちらへ行けばいいか

リヨウジはスタンダード次元行きを提案した理由を話す

「…スタンダード次元にはプロフェッサーの息子、赤馬零児がいる」

「なるほど、息子を人質にして取引を…」

「話は最後まで聞け」

早々に結論付けようとする黒咲を黙らせて続ける

「正直言つてスタンダードもシンクロもまともな情報がない、俺がプロフェツサーの息子のことを知ったのもだいたい昔だし今はどうなっているか分からない…が、少なくとも次元転移のことを知っている人間であることは確かだ」

「私もスタンダード次元に一票かな」

それを引き継ぐようにマオも意見を述べる

「つて言つてもスタンダードがいつて言うよりはシンクロは止めた方がいいんじゃないかなって消去法なんだけどね？Dホイールの修理中にユーゴから色々聞いたんだけど…正直、シンクロ次元に助けを求めるつてのは無理だと思う」

1%のトップスが資産の99%を独占し、99%のコモンズが残り1%の資産を奪い合う

コモンズはトップスには頭が上がらず、歯向かおうものなら犯罪者として捕らえられる

そんな差別主義が横行している世界でたった二人が声を上げても誰が振り向いてくれるだろうか？コモンズと同じようにとらえられるのが関の山だろう

マオはユーゴの話からそういう結論に至り、それならまだスタンダードのほうが可能があると判断していた

「…赤馬零児は少なくとも次元転移や融合次元のことは知っている、コンタクトが取れば話は聞いてもらえるだろうし、そこから仲間を探す足がかりにすることもできるだろう」

他の世界から来た人間なんて普通であれば信じてもらえないだろう、片道の次元転移だという以上はその次元で長く滞在する可能性も考えなければならぬ、戸籍もない不審者が2人、だれにも頼れずに孤立するという状況は可能な限り避けたい

「…他に意見はないか？俺は二人の意見を尊重したいと思つているが」

ユートが2人の意見を聞いてまとめに入る、他のレジスタンスは2

人の意見に同意を示すものと考え込むもので分かれるがいずれもリンクロ次元行きを提案する者は現れない

「…決まりだな、行く先はスタンダード次元、では次は誰が行くかだが…」

「俺が行く」

真つ先に名乗りを上げたのはやはり黒咲だ、実際のところ實力はレジスタンスでもトップクラスの實力者で戦闘要員としては申し分ない…ただ

「…隼、今回の次元転移の目的は分かっているな？ともに戦う仲間を集めにいくんだぞ？」

「分かっている」

念のためにとユートが確認する、これが敵を倒しに行くというだけであれば迷いなく選抜したところだが黒咲は性格的に交渉などに向いているとは言い難い

だが未知の世界では強さが求められる場面も出てくるだろう、そうした場合には彼が最適解となる

「…俺はトキノかマオに行ってもらえないかとも思っていたんだが…」

「えっ!? わっ、私っ!?」

「…私が？」

ユートの発言に慌てた様子の子ノと呆気にとられた様子の子ノのマオしかしユートは悩ましげに目を瞑って唸る

トキノは實力があり自分の身を守れて黒咲のように交戦的ではない…が、優しすぎて交渉や要求などを行えるとは思えない、さらに言えばこれから敵を打ち倒す仲間を探すというのに仲間を守るために戦っているトキノでは説得力も弱くなってしまうかねない

マオは知識や交渉事であれば問題ない、むしろレジスタンスで最もそう言ったことに向いている人物と言えよう、しかし實力が足りていない、スタンダード次元でなにか不測の事態があった時に対処ができるかどうか

「…マオ、次元転移リングはこれ以上増やせないのか？」

「残念ながら材料が足りてない、アカデミア盤の次元転移装置の壊れていない部分をつぎはぎしてどうにか2個分、3つ目を作るんならアカデミア盤があと50個くらいは必要かな」

「どうあがいても行けるのは2人までと再確認して悩むユート」

「…えと、リヨウジ君じゃダメなのかな?」

「ダメだ」

「おずおずとリヨウジを推薦したトキノだったがそれは即座に本人に却下される」

「俺はそもそも融合次元の人間、これから融合と戦う仲間を集めるのに俺の存在は邪魔になる、むしろ俺の存在は隠して交渉するべきだ」

リヨウジの言葉に頷くユートとマオ

「これから融合と言う共通の敵を倒そうという組織の身内に融合使いがいると分かれば第一印象は最悪だろう」

「仲間を探すという今回の目的においてリヨウジは真っ先に候補から外れることとなる」

「…ユート、お前はどうかんだ?」

「…やはりそうなるか」

本人もその選択肢も当然考えていた

ユートであれば実力も交渉も問題なくこなせ、またレジスタンスのリーダーが来たということでも誠意を見せることもでき、考えうる限りでは最善の人選であろう

「…では…」

「ならいっしょに行くのは…」

……

あの後も日が暮れるまで誰がスタンダード次元に行くかという会議を続け、最終的に行くのは交渉役のユートとその護衛として黒咲が行くこととなった

「…責任重大、だな」

「…うん」

リヨウジとトキノはがれきの山に座って神妙な面持ち、その原因は会議終盤のユートの言葉

『俺たちは絶対に仲間を連れて帰ってくる、だからそれまで…お前たちがレジスタンスを、エクシード次元を守ってほしい』

無論それはその場にいたレジスタンス全員に向けられた言葉だが特にリヨウジ達に向けられたものだ

ユートと黒咲がいなくなればレジスタンスで最も強いのはリヨウジとトキノ

どうしても責任感を感じてしまい、暗い中で座り込み2人で黙り込んでしまっていて

…足音が近づいてくる、そちらを向けば見覚えのある人物が歩いてきていた

「…なんだ脱走兵、今更おじけづいたのか？」

「…黒咲か、準備はできたのか？」

「当然だ、いつでも出発できるように準備は整えていた」

さらりと言つてのけるあたりはさすがと言わざるを得ない

黒咲も平和な世界の住人だったはずなのに融合の侵攻から今日までのわずかな間で歴戦の決闘戦士の風格を纏っている

普通ならあり得ないことだがそれを可能としたのはエクシード次元を守ろうとする強い覚悟だろう

「俺とユートは明日スタンダードへと向かう…だがその前に、一つやっっておかねばならないことがある」

決闘盤を起動して構える

「構える脱走兵、決闘だ」

「…分かった、いいだろう」

リヨウジはそれを承諾する、黒咲の意図は分からないがこの決闘は受けなければならぬ気がした

がれきの山から下りてリヨウジと黒咲は広いスペースで向き合う

トキノは黒咲がリヨウジを好ましく思っていないことは当然承知していたが今更気に食わないという理由で申し込むとも思えなかつ

た、ゆえに何も言わずに2人を見守ることにした

「…行くぞ」

「来い…」

「決闘!!」

黒咲 LP4000

リョウジ LP4000

盤が示した先行は黒咲、勢いよく手札を盤へと置く

「俺の先行！俺はRRバニシング・レイニアスを召喚!!」

場に黒い鉄のような体を持つ隼が舞い降り、後続のモンスターを呼ぶ

「バニシング・レイニアスは召喚、特殊召喚成功時に手札からRRモンスターを特殊召喚できる！2体目のバニシング・レイニアスを召喚！さらに2体目の効果で3体目のバニシング・レイニアスを召喚！3体目の効果でRRトリビュート・レイニアスを召喚！トリビュートの効果でデッキからRRレディネスを墓地へ！」

効果を使つて一気にモンスターを4体並べる、そのレベルはいずれも4

「行くぞ！俺はレベル4のバニシングレイニアス3体とトリビュートレイニアスを2体ずつでオーバーレイ！冥府の猛禽よ、闇の眼力で真実をあばき、鋭き鉤爪で栄光をもぎ取れ！エクシーズ召喚！飛来せよ！ランク4！RRフォース・ストリクス!!」

RRフォース・ストリクス 守2000

RRフォース・ストリクス 守2000

「つ…一気に2体のエクシーズか」

「まだまだ！フォースストリクスの効果発動！ORUを一つ使い、デッキから闇属性レベル4鳥獣族モンスターをサーチ！RRシンギングレイニアスとRRファジーレイニアスを手札へ！そしてシンギングは場にXモンスターがいるとき、ファジーはRRモンスターがいるとき手札から特殊召喚できる！そのままエクシーズ召喚！現れる！3体目のフォースストリクス!!」

RRフォースストリクス 守2000

黒咲の場に3体のエクシーズが並び、手札はまだ2枚ある

それだけでも十分トップクラスの實力者だということは感じさせられるが…

「3体目のフォースストリクスの効果でデッキからブースターストリクスをサーチ！さらにORUとして墓地に送られたファジーレイニアスの効果でデッキから同名カードを手札へ！さらにエクシーズギフト！エクシーズモンスターが2体以上いるときORUを2つ使って2枚ドロロー！！」

「くっ、手札5枚…」

先行は手札5枚でのスタートとなる、しかし黒咲はカード効果を駆使して手札を1枚も減らさずに3体のエクシーズモンスターを展開するという離れ業をやつてのけた

これがレジスタンスの、エクシーズ次元でもトップクラスの決闘者の力量

「永続魔法RRネストを発動！場にRRモンスターが2体以上ある時1ターンの一度デッキか墓地からRRモンスターを手札に加える、墓地のバニシングレイニアスを回収！カードを1枚伏せてターンエンド！！フォースストリクスの攻守は自身以外の鳥獣族の数×500ポイントアップする！」

RRフォース・ストリクス 守20000↓30000

RRフォース・ストリクス 守20000↓30000

RRフォース・ストリクス 守20000↓30000

最終盤面は守備力3000のモンスターが3体、伏せカードが1枚、手札が4枚

黒咲は紛れもなく本気の布陣でリョウジを待ち構える

「貴様の力を見せろ！脱走兵！」

黒咲（2）

「俺のターン！ドロー！」

リョウジ手札6枚

相手の場には守備力3000のモンスターが3体、そうやすやすとは超えられない壁…そう、相手は壁を用意した、ならばそれを超えてみせる。

「サイバードラゴンコアを召喚！コアは召喚成功時にデツキからサイバー、またはサイバネティックと名のつく魔法か罠カードをサーチ！サイバーネットワークを手札へ加える！」

サイバードラゴンコア 攻400

「そして機械複製術を発動！場の攻撃力500以下の機械族モンスターを選択し、同名カードをデツキから2体特殊召喚する！さあ来い！」

「低ステータスを並べて壁にする気か？」

低ステータスでも油断ならないことは理解しているためにしつかりと警戒をしながらモンスターを見つめる、しかし召喚されたのは予想を裏切るモンスターだった。

サイバードラゴン 攻2100

サイバードラゴン 攻2100

「なにっ!?サイバードラゴンだと!?」

「サイバードラゴンコアは場か墓地にいるときカード名をサイバードラゴンとして扱う！」

機械複製術が指定しているのは元になったモンスターの名前のみ、名前を変えるモンスターを用いればこのように別のモンスターを呼ぶこともできる。

「俺はレベル5のサイバードラゴン2体でオーバーレイ!!」

2体のサイバードラゴンは地面の穴へと吸い込まれる。

「進化する機械龍よ！新たな力をその身に宿し！敵を撃ち抜く閃光となれ！エクシーズ召喚！襲雷せよ！サイバードラゴンノヴァ!!」

サイバードラゴンノヴァ 攻2100

サイバードラゴンノヴァは眼前の3体の猛禽を睨み付け、紫電をほとばしらせる。

「ノヴァの効果発動！場か手札のサイバードラゴンを除外することで攻撃力を2100アップさせる！サイバードラゴン扱いのコアを除外！」

サイバードラゴンノヴァ 攻2100↓4200

「異次元からの埋葬を発動！除外されたコアを墓地へ戻す！そしてサイバードラゴンノヴァの効果発動！ORUを一つ使い、墓地からサイバードラゴンを蘇生する！俺はORUとして墓地に送られたサイバードラゴンを特殊召喚!!」

サイバードラゴン 攻2100

サイバードラゴンコアは墓地にいるときにもサイバードラゴンとして扱う、ノヴァの蘇生効果は墓地にサイバードラゴンがいなければ使用できないが対象はORUとして使われたカードでも問題なく行える、それを利用して場にサイバードラゴンを呼び寄せた。

「アイアンドローを発動！俺の場のモンスターが機械族2体だけの時カードを2枚ドロウする！バトルだ！サイバードラゴンノヴァでORUの残っているフォースストリクスを攻撃!!エボリューションノヴァバースト!!」

バトルに入り、攻撃力を上げているノヴァの口へと雷のエネルギーが充填され、壁を破壊せんと解き放たれる。

「甘い！俺は手札のRRブースターストリクスの効果発動！RRモンスターが攻撃対象になった時手札のこのカードを除外してその攻撃モンスターを破壊する！」

フォースストリクスの背中にブースターストリクスが取りつき、そのブースターを吹かせてノヴァバーストを回避、そのままの勢いでサイバードラゴンノヴァへと突貫しノヴァの身体が爆散する。

「甘いのはお前もだ！サイバードラゴンノヴァが相手の効果で墓地に送られた時、機械族の融合モンスターを特殊召喚する！来い！サイバーツインドラゴン!!」

サイバーツインドラゴン 攻2800

爆煙の中から2つの首を持つ白銀の機械龍が現れ、ノヴァの攻撃を引き継ぐように口へとエネルギーを溜める。

「サイバーツインドラゴンでフォースストリクスを攻撃!」

「攻撃力が足りていないようだが?」

「足りてないなら足すだけだ!速攻魔法虚栄巨影!サイバーツインの攻撃力をバトル終了まで10000アップさせる!」

サイバーツインドラゴン 攻2800↓3800

サイバーツインドラゴンに一回り大きな幻影が重なりその力を増加させ、守備力3000のフォースストリクスを粉砕する。

「続けて2体目のフォースストリクスを攻撃!エボリューションツインバースト!」

連続攻撃で2体のフォースストリクスを破壊する。場の鳥獣族モンスターが減ったことで残った1体のステータスも下がってしまう。

RRフォースストリクス 守3000↓2500↓2000

「続け!サイバードラゴン!エボリューションバースト!!」

元に戻ったステータスでは光線を止められずに爆散、黒咲の場に存在した3体の壁は破壊された。

「…この布陣を1ターンで突破するか…」

「バトル終了、虚栄巨影の効果も終了して攻撃力が元に戻る、カードを1枚伏せてターンエンド!」

サイバーツインドラゴン 攻3800↓2800

守備力3000が3体、手札にはカウンターのブースターストリクス、黒咲の布陣をリョウジは1ターンで打ち破って見せた。

だがまだ足りない。

「流石の攻撃力といったところか…だが!貴様のエンドフェイズに俺は伏せカードを発動する!速攻魔法!RUMラプターズフォース!!」

「っ!RUM!?!」

地面に墓地につながる穴が開き、先ほど破壊されたフォースストリクス1体が甦る、だがそれで終わりならばランクアップという言葉はつかない。

「俺の場のRRエクシーズが破壊されたターン、墓地のRRエクシー

ズを蘇生し、そのモンスターを素材にランクの1つ高いRRエクシースへとランクアップさせる！

フォースストリクスは球体となって地面に空いた穴へと吸い込まれる。

「獰猛なるハヤブサよ。激戦を切り抜けしその翼翻し、寄せ来る敵を打ち破れ！ランクアップエクシースチェンジ！現れろ！ランク5！RRブレイズ・ファルコン!!」。

RRブレイズファルコン 攻1000

「ブレイズファルコン…これがお前のランクアップ…！」

リヨウジは以前にトキノからランクアップを教わった、トキノ曰く『ランクアップの扱いにおいては黒咲隼の右に出る者はいない』

攻撃力が1000と低いがその分強力な効果を持っているであろうことは容易に想像できる、しかしバトルを終え、エンド宣言をしてしまった以上もうどうすることもできない。

「っ…ターンエンド…」

「俺のターン！ドロー！」

黒咲 手札4枚

ブレイズファルコンの効果はまだ分からない、しかし攻撃的なものだろうと目星をつけて先手を打つことにする。

「スタンバイフェイズにリバーズカードオープン！サイバーネットワーク！俺の場にサイバードラゴンが存在する場合、1ターンに1度デッキから光属性機械族のモンスターをゲームから除外する！サイバードラゴンドライを除外！そしてドライは除外された時、そのターン中場のサイバードラゴン1体は戦闘と効果で破壊されなくなる！」

デッキからサイバードラゴンドライが除外されると場にいたサイバードラゴンの周囲にそのターンの破壊を防ぐ不可視の壁が現れる。

「チツ…装備魔法ラプターズアルティメットメイスをブレイズファルコンに装備！攻撃力を1000ポイントアップさせる！」

RRブレイズファルコン 攻1000↓2000

「だが攻撃力はまだサイバードラゴンの方が上！」

「ああそうだ、だが、天空を舞うハヤブサを貴様のモンスターごときで

止められると思うな！ORUを持っているブレイズファルコンは相手に直接攻撃ができる！バトルだ！ブレイズファルコンでダイレクタアタック！」

ブレイズファルコンは大きく飛翔し、サイバードラゴン、サイバーツインドラゴンを飛び越えて直接プレイヤーを狙う。

「迅雷のラプターズブレイク!!」

「ぐうっ!?!」

リヨウジ LP4000↓2000

稲妻状のビームが放たれてリヨウジのライフを半分奪う、本来であればブレイズファルコンには戦闘ダメージを与えたときに相手モンスターを破壊できる能力があるが今回は使用せずにバトルを終える。「バトル終了、ブレイズファルコンの効果発動！ORUを1つ使い、相手フィールドの特殊召喚されたモンスターをすべて破壊し、その数×500のダメージを与える！」

ブレイズファルコンから多数のミサイルが発射されリヨウジのフィールドに降り注ぐ。

不可視の壁に守られていたサイバードラゴンは無事だが、それがないサイバーツインドラゴンは破壊され、その爆風がリヨウジを襲う。

リヨウジ LP2000↓1500

「ぐあっ！」

「リヨウジ君!?!」

ミサイルの爆風に吹き飛ばされてがれきの山に叩きつけられるリヨウジ。

驚いてとつさに駆け寄ろうとするトキノだったがそれはリヨウジに止められる。

「…まだ決闘中だ…来るな…」

「…うん…分かった」

しびしび2人の決闘の邪魔にならないように下がるトキノ、トキノには黒咲の考えが分からなかったが真剣な決闘であるなら決闘者として邪魔をするわけにはいかない…自分にそう言い聞かせて見守ることを決める。

「カードを1枚伏せてターンエンドだ」

「俺の…ターン!!」

リョウジ 手札4枚

「魔法カードエマジエンシーサイバーを発動!効果でデッキからサイバードラゴンモンスター、または通常召喚不可の光属性機械族モンスターをサーチする!」

「させん!カウンター罠ラプターズガスト!RRカードがあるとき魔法、罠の発動を無効にして破壊する!」

突風が吹き荒れてエマジエンシーサイバーが破壊される…だが、破壊されたはずのエマジエンシーサイバーは風に吹き上げられるようにリョウジの手札へと戻っていく。

「エマジエンシーサイバーは相手によって無効にされて墓地へ送られた時手札1枚をコストに手札へと戻すことができる!そして再び発動!」

「チツ…!」

今度は止めることができずにデッキから手札へカードが加わる、黒咲は展開の起点となるサーチカードを潰せなかったことで舌打ちをする。

「エマジエンシーサイバーの効果でサイバードラゴンを手札へ、さらに俺はサイバードラゴンを発動!墓地にサイバードラゴンが存在するとき、デッキから光属性機械族モンスターをサーチ、または墓地の同じ条件のモンスターをデッキに戻す、俺の墓地にサイバードラゴンが3体以上いれば両方の効果を適応できる!」

「貴様の墓地にサイバードラゴンは1体…いや、サイバードラゴンコアには名称変更能力があったな、それでもまだ2体だ」

「いいや3体だ、さつきエマジエンシーサイバーの効果で墓地に送ったのはサイバードラゴンツヴァイ、こいつにも墓地でサイバードラゴンとして扱う効果がある!墓地のサイバードラゴンノヴァをEXデッキに戻し、デッキからサイバードラゴンドライを手札へ!」

「……」

その二人の決闘をレジスタンス本部の屋上から見ているユート、いつもであれば黒咲とリョウジの決闘が起こればすぐに黒咲を止めに入るところだが、今日は遠くから見るだけにとどめていた。

「やつほー」

「…マオか」

「マオちゃんです、隣失礼するよー」

コキコキと関節を伸ばしながら屋上にやってきたマオがその隣に来て双眼鏡で2人の決闘を見る、工作室でリングの最終調整を終えたころに決闘の音が聞こえてきて気になって見に来たというわけだ。

「止めに行かなくていいのか?」

「それ私のセリフ、ま、トキノもいるし最悪の事態にはならないでしょ?」

工作室から双眼鏡で覗いたときにトキノの姿も確認した、これが黒咲の暴走によるものだったとしたらトキノも黙ってはいないだろう、というトキノへの信頼からあの決闘は大丈夫だと判断し、工作室より見やすい屋上へ来た。

「それよりリーダー様は止めなくていいの?あれ、ダメージ実体化切ってないよ?」

わざと茶化すような口調だが目つきは真剣、周りののがれきの飛び散り方やリョウジの服が焦げていることからダメージが実体化していることは察せられた。

「…本気の決闘でなければ意味がない」

「ふーん…まあ、何か考えがあるってことね」

詳しくは聞かないことにする、もとよりユートが手を出さない以上は何か意図しての決闘なのだろう、ならそれを邪魔するわけにはいかない。

「サイバードラゴンドライを召喚!サイバードラゴンドライは召喚成功時に場のサイバードラゴンのレベルをすべて5にする、そしてドライにも場と墓地でサイバードラゴンとして扱う能力がある!」

サイバードラゴンドライ 攻1800 ☆4↓5

「俺はレベル5のサイバードラゴンとサイバードラゴンドライでオーバレー！再び襲雷せよ！サイバードラゴンノヴァ!!」

サイバードラゴンノヴァ 攻2100

エクシーズモンスターはORUの都合上ただ蘇生しただけではほとんど意味をなさない、だが一度デッキに戻して再召喚すれば問題なく効果も使用できる。

「サイバードラゴンノヴァの効果発動！ORUを一つ使い、墓地からサイバードラゴンを蘇生する！甦れ！サイバードラゴン！」

ノヴァがORUを一つ砕くとそのORUからサイバードラゴンが飛び出して横に並ぶ。

「バトル！サイバードラゴンでブレイズファルコンを攻撃!!」

「ラプターズアルティメットメイスの効果発動！装備モンスターが装備モンスターより攻撃力の高い相手から攻撃対象になった時、墓地からRUMを手札に加え、その戦闘で発生するダメージを0にする！」
ブレイズファルコンは破壊されるが装備カードの効果でダメージを無くしカードを回収する、しかし場はがら空きになった。

「サイバードラゴンノヴァの効果発動！場のサイバードラゴンを除外することで攻撃力を2100アップさせる！」

サイバードラゴンノヴァ 攻2100↓4200

「これでトドメだ！エボリューションノヴァバースト!!」

サイバードラゴンノヴァの攻撃力が黒咲のライフを上回り、稲妻のブレスを黒咲へと放つ。

「墓地のRRレディネスの効果！墓地のこのカードを除外し、このターン受けるダメージを0にする！」

稲妻は不可視の壁に阻まれて黒咲には届かずに拡散し周囲のがれきを吹き飛ばすにとどまる。

「くっ…一時休戦を発動、お互いにカードを1枚ドロし、次の相手ターン終了までお互いに受けるダメージは0になる、これでターンエンドだ」

サイバードラゴンノヴァ 攻4200↓2100

黒咲 (3)

「俺のターン、ドロー！」

黒咲 手札5枚

「さて：打ち出の小槌を発動、手札を2枚デッキに戻してドロー：このターンはダメージを与えられん：ならば貴様のモンスターを処理させてもらう死者蘇生を発動！甦れ！ブレイズファルコン！」

RRブレイズファルコン 攻1000

「バトルだ！ブレイズファルコンでサイバー・ドラゴン・ノヴァを攻撃！」

「っ!?!自爆特攻っ!?!」

赤いハヤブサは機械龍へと襲い掛かり稲妻状のビームを放つ、サイバー・ドラゴン・ノヴァはそれに対抗して口から稲妻のビームを放ち、ブレイズファルコンの攻撃を打ち消して返り討ちにした。一時休戦の効果でダメージこそ発生しないが無意味にそんなことをするわけがない。

「速攻魔法！RUMラプターズフォース！RRが破壊されたターン墓地のRRを特殊召喚し、ランクを1つ上げる!!」

再びブレイズファルコンは復活し、炎に包まれ、その姿を変えていく。

「誇り高きハヤブサよ。英雄の血潮に染まる翼翻し 革命の道を突き進め！ランクアップ・エクシーズ・チェンジ！現れろ！ランク6！RRレヴォリユーション・ファルコン!!」

RRレヴォリユーション・ファルコン 攻2000

炎を振り払い、黒く輝く身体となり、革命の名を冠するハヤブサは飛翔する。

「レヴォリユーション：革命…」

追い詰められているエクシーズ次元が融合次元を打ち倒す、その思い、その決意がそのモンスターからは感じられる。

「そうだ、俺たちは必ず融合次元を：アカデミアを打ち倒す！レヴォリユーションファルコンの効果発動！エクシーズ召喚に成功したと

き！相手の場のモンスターを破壊する！」

革命のハヤブサは高速で飛翔し光弾を放ってサイバードラゴンノヴァを破壊する。

「サイバー・ドラゴン・ノヴァの効果を忘れたか！相手によって墓地に送られた時融合モンスターを特殊召喚する！サイバー・エンドを特殊召喚！」

サイバー・エンド・ドラゴン攻4000

「忘れるはずがないだろう？……その忌々しい効果を！レヴオリューションファルコンは特殊召喚されたモンスターとバトルする時！バトルする相手の攻守を0にする！行けっ！レボリューションファルコン!!」

ノヴァを破壊した後はるか上空へと舞い上がり、身体のハッチをすべて開く

サイバー・エンド・ドラゴン 攻4000↓0

「レヴオリューションファルコンでサイバー・エンド・ドラゴンを攻撃！革命の火を…受けろお!!」

「っ!？」

爆撃が三つ首の機械龍へと降り注ぎ跡形もなく破壊しつくす、一時休戦も効果でリョウジにダメージは通らないものの、余波の熱さや衝撃が周囲を襲う。

「くっ…」

爆撃の後には周囲のがれきも荒れ果てて残り火がくすぶる、その光景はまさしく戦場跡、破壊されつくされた町の跡だった。

「カードを一枚セット、俺はこれでターンエンド…正直言つて貴様のことは好きにはなれん。貴様が得たエクシーズも融合を前提としたものだ」

「それは…」

リョウジは元々融合使い。だからか獲得したエクシーズもまた融合に関連した効果を持つ、融合を使うことを前提としたエクシーズモンスター。融合を毛嫌いするエクシーズ次元の人間から見ればそれを不快に感じても仕方がない。

「だが、貴様はまだそのエクシーズを使いこなしているとは言えない」
「…どういうことだ…?」

「まだ気がつかないか? 貴様のエクシーズの可能性に。貴様のモンス
ターは進化する機械龍なのだろうか?」

「可能性…?」

「貴様のターンだ、早くドローをしろ…脱走兵!」

「お、俺のターン、ドロー!」

その勢いに気おされるようにカードを引く。

リョウジ 手札3枚

手札を見て今の状況を冷静に思考する、リョウジのデッキはサイ
バー・ドラゴンを中心としたパワー型。大型モンスターを特殊召喚
し、その攻撃力で相手を圧倒することが基本の戦術…つまり、特殊召
喚されたモンスターとの戦闘では無敵の強さを誇るレヴオリュー
ションファルコンは致命的に相性が悪い。

(可能性だと…? 黒咲はいったい何を伝えようと…?)

黒咲は確かに融合を毛嫌いし、今でも融合使用であるリョウジのこ
とは嫌っている。だが、いまさらそんなことで無意味な決闘を挑ん
だりするほど愚かではない。顔を上げる…すると、黒咲と目が合っ
た。黒咲の目には怒りも、憎しみもない、ただまっすぐに真剣な目
だ。

「可能性…進化…」

もう少しで答えが出そうな気はする、だがもう少し、最後の1ピ
スが足りない。

「…リョウジ君!!」

思考の迷路に陥っているとトキノの声で我に返り、振り返る。

「頑張れ!」

アドバイスでも何でもない、ありふれた声援…だが、リョウジに
とっては一瞬ぼかんとする出来事。アカデミアでも異端児だった
リョウジに他人の応援などあるはずもなく、ただ孤独にいるしか
なかった…けど、今は違った。

「…ははっ、そうだな」

かちりと歯車がかみ合うような感覚がした。勝手に口角が上がる、迷っていた思考がクリアになる：応援されただけで体の奥から活力が沸く。

「じゃあ、頑張らせてもらうか！貪欲な壺を発動！墓地のサイバー・ドラゴン・コア、ドライブ、ツイン、エンド、ノヴァの5枚をデッキに戻して2枚ドロロー!!：よし、サイバー・ドラゴンは相手の場のみモンスターがいるとき特殊召喚できる！来い！」

サイバー・ドラゴン 攻2100

「そしてサイバー・ドラゴン・ドライブを通常召喚！召喚成功時にその効果でレベルを5に!：レベル5のサイバー・ドラゴンとサイバー・ドラゴン・ドライブでオーバーレイ!3度襲雷せよ!サイバー・ドラゴン・ノヴァ!!」

サイバー・ドラゴン・ノヴァ 攻2100

この決闘だけで3回エクシーズ召喚されるサイバー・ドラゴン・ノヴァ。だがその効果ではレヴオリューションファルコンを突破することはかなわない。

「そのモンスターでは俺には勝てんぞ?」

「ああ、お前はそれを教えに来てくれたんだろ?」

黒咲は答えない、だがそれが何よりの肯定だった。

「サイバー・ドラゴン・ノヴァの効果、ORUを1つ使って墓地からサイバー・ドラゴンを特殊召喚、そして…」

目を閉じて深呼吸をする、もうそれを呼ぶだけの力量はあった、後はそれを具現化するきっかけが必要だった。新しい力の鼓動を感じ、カッと目を見開いて宣言する。

「俺はランク5のサイバー・ドラゴン・ノヴァで…オーバーレイ!!」

サイバー・ドラゴン・ノヴァは光の球体となり地面に穴へと吸い込まれる。黒咲はようやくかと言わんばかりにあきれながら、トキノは驚きと納得の入り混じった表情でその光景を見る。

「進化を続ける機械龍よ！鋼の意思をその身に重ね、無限の力を得るがいい！ランクアップ！エクシーズチェンジ！」

地面が爆発しその姿が現れる、基本の姿はサイバードラゴンノヴァ

のそれに近しいが、翼はより大きく、身体はより長くなっている。

「これが俺の答えだ…ランク6！サイバー・ドラゴン・インフィニティ
!!」

進化したサイバー・ドラゴンは己の生誕をこの世界に知らしめんとばかりに大きく咆哮した。

「ランク…アップ…」

その光景を遠くから見ていたマオは双眼鏡から目を離し、輝くその機械龍に茫然と眩く。ランクアップとはエクシード使いのたどり着く1つの到達点。ついでマオがたどり着けなかった高み。

「…黒咲は最初からこれを？」

「ああ、だいぶ前から気がついていたようだがな」

目論見がうまくいったことに安堵のため息を吐くユート、実は以前から黒咲はサイバー・ドラゴン・ノヴァにランクアップの可能性があることを察していた。だが黒咲本人はそれを不愉快に感じ、今日の日までユート以外には話していなかったが。

「だから見せつけるようにランクアップして見本を示したってわけね？」

「口で説明するより実際にやって見せる…アイツらしいやり方だな…最も、それだけじゃないようだけどな」

決闘者の視力でしっかりと状況を見ていたユートはトキノもきっかけをつくった要因であると見抜いていた。

なにより、RUMに頼らないランクアップは黒咲のそれではなくトキノのやり方、今までのエクシード次元での決闘がああのもンスターを生み出したのだ。

「…さて、そろそろ行くか」

「あれ？今から行くの？」

てつきりユートもここで2人の決闘を見終えると思っており、踵を返し階段へ向かう姿に疑問を覚える。

「ああ、俺からも1つ伝えたいことがあるからな…」